

対話集

二〇〇五年十二月～二〇一〇年一月

目次

はじめに	4	転換の経験	34
経済原理に抗して	5	京都北白川	34
六八年の継承	5	風土と風光	36
出立の場所	5	生死を包む	38
人間として	8	資本と階級	41
人間の定義	11	搾取の現実	41
歴史を忘れず	14	階級の復権	46
数学の経験	19	技術と制御	50
文明の方法	19	共産と共生	53
数学も母語	21	根をもつこと	57
現象の分節	23	根こぎと根づき	57
仏教の経験	26	野を拓き田を耕す	60
存在の不安	26	それを担うもの	64
道元に聴く	27	理念をもって生きる	69
非・人間主義	31	世の形をつかむ	69
		時代の課題	69
		近代の二重性	74
		普遍と固有	79
		人間の溶解	85
		言を挙げる	90
		御言は民の事	90

ものとひとの輝き	98
言を割ること	105
ともに受ける	113
まことをつかむ	122
民主党政権の意味	122
昭和天皇の生き様	126
西洋の苦悩と東洋	133
反・西洋を超える	142
対話の結論	146
来し方行く末	146
己の立ち位置	150
列島弧の課題	154

はじめに

北原真夏と南海先生は同じ人間の内にある。一人の人間のなかに二人の人間が同居し、二〇〇六年のいま、それはまだ十全の統一を実現しているとは言いがたい。

一人は、教育労働運動に取り組みながら、その一方で党派の活動に就き、教員を辞めて専従になり、そのあぐくそれに破れた。その後生活を再建しながら、根のある変革思想が成立する根拠を言葉に問い、少しばかりの準備をしてきた。青空学園にきて十年以上になった。一人は、いちどは数学研究を離れながら結局は離れられず、数学を教えることで糊口を凌ぎながら、智慧と生きる力をつける学問としての数学を根づかせようと、青空学園に居着いて高校数学の根拠を勉強し、高校生に語りかけながら、方法論や構造論をまとめてきた。

これは一人の人間の内のことではあるが、同時に二人は分裂し葛藤し、青空学園も別個にやってきた。二兎を追うもの一兎をも得ずであり、一人の人間の仕事として中途半端なことこのうえない。革命とはあのようなことではなく、数学とはこのようなことではない。人生をふりかえって、いづれにおいても本気であったかと考えると、やはり厳しさがなかったことは認めねばならない。しかしまた、近代日本という時代の条件の下で、人間を失わずに生きようとすれば、二兎を追うのもやむを得なかったと自己弁護もする。

やむを得なかったものなら、そこには幾ばくかの真理もあるはずだ。こうして二人は対話をはじめた。時あたかも帝国アメリカが没落する時代である。資本主義による人間の収奪と搾取が世界大にあからさまになる場において、その帝国の没落がはじまった。時代はふたたび転換し始めたのだ。経済第一の時代から人間第一の時代へ、これは大きな転換だ。人間は苦しい段階をくぐらなければならぬ。しかしこのような困難のなかからこそ、まったく新しい人間と世のあり方が生まれてくる。

二人の対話の主題は、この歴史の段階を、どのように吾が身に引き受けるのかということに、あるはずだ。内部からの問いかけに耳を傾けながら対話を重ね、この時代における人間の根拠を問わねばならない。この営みが時代の動きにつながっていることを信じている。第一章は、二〇〇五年年末から二〇〇八年秋の経済破綻までの新自由主義全盛の中での対話であり、第二章はその破綻を受けての対話である。

二〇一一年一月十七日追記：二〇一〇年年末から二〇一一年年初にかけてようやくこの二人は統一した。この結論を追記しこの対話集を終える。これからは一人の人間として、経験を深めながら、残された時間を生きぬくつもりである。

二〇一二年二月六日追記：上記の追記を書き、この対話を締めくくって間もなく、東北大地震と東電核惨事が

起こった。それから一年。ようやくに周辺の整理もした。これからは、時間を与えられるかぎり、青空学園の場で思索を深めたい。

二〇一七年六月十二日追記：この対話では「人間」を定義し、それを用いている。二〇一六年以降、その「人間」の意味が実は「人」にあったことを確認し、「人—人間—人」の第三の「人」を用いている。対話集では元のままにしてある。

経済原理に抗して

六八年の継承

出立の場所

北原 還暦を過ぎました。願うことは多くあります。求めることはあまりありません。今日まで、何かに追われるように走ってきました。最近、少し落ちついて考えられるようになりました。青空学園は里であり、ものごとを原則から考え、その根拠を問う場としての根拠地です。私が青空学園に来たのが九九年初秋、幾ばくかの時が過ぎました。

しかし、これまでここで書いてきたものを読みかえすと、おしなべて、自分の考えを掘りさげたりまとめたりするのに精一杯であり、思いついたことを直感的に述べ

るのみで、根拠を示すことが弱いのが目につきます。根拠を問う場をめざしながら、根拠を示さない陳述が続き、論述は荒く、わかるように、また説得的に書くことはできていません。

が、問題は単に書く技術のことではありません。私は近代日本語の根拠を問いました。しかしその問いが意味あることを述べきれていません。これまでのところ自分の力が根拠を問いきるには不足していた、といわざるを得ません。まして、問題を掘りさげ新たな場で根拠を示すことはほとんど何もできていません。根拠を問うとは、現象を根本において捉えることであり、その根本としたことさえ疑い、さらにその根本を求める永続運動なのです。問題を考えるのは独りでなければならない。ですが、考える契機は対話のなかで得るものです。青空学園で出会った二人で改めて対話をすすめ、を通してわれわれが考えてきたことを深めたいのです。このように考えることができるのは、これまでの人生があるからです。それは忘れないようにして、われわれに残された時間、考えうるところまでは考えおきたいのです。

南海 十九世紀後半、数学の世界ではカントールやデデキントが解析学の根拠を問いました。そして実数論を展開しその中から数学基礎論が生まれゲーデルにまで至りました。この時代はまた資本主義がその根拠を問われたマルクス主義の時代でもあるのです。時代の危機が人間

にその根拠を問うことを促すのです。

私は高校時代に学ぶべき数学がどのような構造をもち、人間にとってどのような意義があるのかを、改めてつかみ直したいと思っています。人間にとっての数学、です。このような問題意識をもっています。数学教育の根拠を問うということです。

ですから、近代日本語の根拠を問うことと近代日本の数学教育の根拠を問うことは、現代という時代、資本主義が爛熟し崩壊をはじめたこの時代によって促されているとも思います。ささやかでも、時代につながっていることを感じとりつつ対話を進めていきたいものです。

北原 対話のはじめに、われわれがどこから来たかをおさえておきたい。思いつきなどそれだけでは意味ないのですが、一九六八年に青年学生が問いかけたことは、今日になっていよいよ重要な開かれた問題であると思われる。われわれの生きてきた事実のなかに今日につながるどんな問題があるのかをふりかえっておくことは、若干の意味はあると思います。

南海 人生はどのみち試行錯誤であり、その意味では実験です。実験からどんな教訓を引き出すのかということ大切なことです。そんなにたいそうなことなど何もなかったですが、われわれが歩みはじめた六八年を考えおきたいと思います。

北原 私はそのつもりで『個人史』を書いておいたので

すが、あれは私の一つの段階におけるまとめに過ぎないので、改めて考えたいと思います。

われわれは一九四七年生まれで、大学闘争の渦中に学生時代を送りました。そこで考えたことが、その後の歩みを規定しています。われわれは学部学生の頃にあの闘争を闘いました。

南海 「あの運動に関係したのは同世代の一角に満たないし、時代の基調は大学の外で形成されていたのだ」という意見があります。しかし六八年から七〇年にいたる若者の反乱は世界的なものであり、また大学にとどまるものでもありませんでした。

北原 反戦青年委員会などの労働運動や街頭闘争もありました。が、その一方で表には出ない地域や職場の闘いが各地でくり広げられました。そのような闘いこそあの時代を特徴づけると思います。

私は、一九七三年に高校教員になりました。その地の教育運動の歴史をいろいろ勉強したのですが、六八年から七五年にかけて阪神間では受験体制のなかでは底辺に位置する定時制高校、工業高校をはじめいくつかの普通高校でも教育闘争が火を噴いていました。その前史として戦後間もなく燃えあがった阪神教育事件といわれる民族教育を求めた闘いや、地域ぐるみで取り組まれた勤評闘争がありました。

その歴史のうえにたつて、学校の差別体質を批判し、学

力の保障を求める運動があちこちで闘われ、そういう高校生の闘いや地域の教育闘争と一体となった教育運動もまたあの当時高揚していました。私はその闘いの過程で勝ち取られた教員定員の増加枠(同和加配)で教員になりました。

そのように考えると、六八年から七〇年代初頭の大学闘争は、同時代に高揚した新しい運動、それまではまだ声をあげていなかった層が、それを突き破って声をあげた、その一環であったと考えることができます。運動する側からいえば、日本の人民運動にとって、闘う側の足下が問われ、それに応えようとする人間がそれまでの学生を少し変え、そのうえで闘いを担った、はじめての運動であったということです。

一九六八年の闘争は、一九六八年五月のパリのカルチェ・ラタンの学生暴動をきっかけに、フランスの若者が解放を求めて決起したことにじまります。この五月の革命は、ベルリン、サンフランシスコ、東京と世界に広がりました。共通点は、自分自身が「何々である」という既存の体系から離脱し、闘おうとする運動であったということです。

もちろん青年の自分探しという側面もまたあったのですが、それが時代のなかで鍛えられ、制度や体制から離れ、自主的な方法や生きる仕組みを模索しようという決断を促しました。それを自分自身で受けとめる人間が存在

在した。それがこの六八年の特徴です。彼の地での闘いの詳細はわかりませんが、世界的にいつても、単なる学生の運動ではなかったと思います。

南海 そうですね。近代西洋社会が生みだしてきた価値観とその制度が、中国文化大革命やベトナム戦争によって揺らいだ。東大闘争の発端となった医学部での問題のように、その制度は内部で疲弊しはじめていた。青年はそれを鋭く感じ、制度とその背後の価値観に闘いを開始した。近代制度のもとでおさえられてきた人びとが、このときはじめて立ちあがった。

北原 私が働いた高校とその地域では、被差別部落の生徒、障害をもつ生徒らの、教育権保障を求める切実な闘いがおこなわれていました。高校へ行きたい。行けないのは中学までに必要な力をつけなかった社会の責任ではないのか。私は赴任して早々でしたが、障害生徒の普通高校での教育保障に取り組みました。

全国ではじめて公立普通高校にいろいろな障害をもつ生徒を、教育保障として受け入れました。しかしその後、八〇年代後半になってそれらの取り組みはいわゆる中曽根行革の流れのなかでつぶされてしまった。地域で問われた教育の問題は何も解決しなかった。それどころか、より深く厳しくなって今日の問題に直結しています。中曽根行革は小泉改革のさきがけであり、新自由主義資本主義です。私の働いた高校は、この行革の流れのなかで終

に廃校になってしまいました。

新自由主義資本主義とは近代西洋資本主義の価値観の誰はばかることのない宣言であり、資本の露骨な搾取と収奪の行動です。一方、イラク戦争を通して帝国アメリカはいよいよ凋落し、アメリカ主導の世界経済もまた二〇〇七年夏には明確な恐慌過程に入りました。今はまさに新自由主義が山を越え下りはじめる節目となる時代です。

人間として

南海 六八年のような激動のときには、どの世代としてあの闘争に関わったのかが、内部にいた学生にとつては大きなことでした。東大全共闘の山本義隆氏は大学を去るときに「物理学徒として」といわれました。その後、大学を離れたところで、「物理学徒」の立場で科学史の仕事をされてきました。山本氏の世代は既に何かの専門家としてあの時代を生きたのです。

北原 六八年の闘争はそのような既成の「何々として」からは自由であろうとしたこともまた事実なのです。実際にまたわれわれはその前の段階で時代の動きにのみこまれました。そして、それまで漠然と考えていたことや、その背景となっていた考え方を変えたのです。大げさにいえば「何々として」といえる前に近代大学制度から離れたのです。われわれには既成の知的分野で「何々として」

ものごとを考えるという前提はありませんでした。

ではどのように生きていくのか。それを模索しました。その頃、先日亡くなられた小田実さんは何人かの人と雑誌『人間として』を出していました。また、小田さんは森有正さんと、人間の原理、世直しの原理について対談をしていました（対談『人間の原理を求めて：揺れ動く世界に立つて』（小田実との共著）、筑摩書房、一九七一年四月）。私はそれを読んで、震えるほど心を動かされました。「人間として」として生きていくということを教えられました。またわれわれにはそれしかなかったのです。改めて読みかえました。書棚を整理していたら、二〇〇八年の九月末に奥の方から出てきたのです。小田さんの発言をひきとるかたちでなされた森有正さんの言葉に、今改めて問題を提起された思いです。

ことに今度の学生の五月のパリの騒動で、私は学生と非常に接触しました。それで私はまたフランスを見る目が非常に次元が高まったと思うんです。そういうことはフランスで、そこで自分で働いて金をとつて暮らしていないと、なかなかわからない。フランスの若い人は何を求めているか、それは驚くほど日本の若い人と近いのですが、それが内側からわかってきて、彼ら自身のフランスの過去の文化というものに対して自分をどういうふうに定義しているかということもわかってくるし、どうしても私の心

の要求として今フランスを離れ去ることができない。

……

中国のああいう文化大革命の動きの根源的な動力というものは、どういうところから出てきているんでしょう。……その根本はどこにあるかという点、ある一つの社会が、あるいは一つの人民の集団が自身自身の現実の中に、進化といってもいいし、自己批判といってもいいし、そういう原理を自分自身の中にもつという一つの動きじゃないかと思うんですよ。

……

その場合に、人間とはなにかという問いに進みそうな場合、私は、すぐには進まない方がいいと思うのです。早急に進むと、やはり昔のままの人間に返ってくる。人間とはそもそもなんぞやというのは逆で、ある、人間という名よりほかに名のつけようがないあるものが、すでにそこにある。それに「人間」という名をつけておいて、さて、人間とはなにかといつては駄目です。第一無駄で、折角そこにある人間を観念で置きかえてしまうことになる。

……

すべての問題、ことに日本で特殊であるというふうな考えられている問題を、一般の次元に一ぺんひき降して、そこから見直す、理解し直すというゆき

方は、たしかに必要なと思います。しかしそれは、かなり専門的な操作を必要とする問題だと思っております。あれは人間の一般的な傾向だといっただけじゃ、非常に明確さを欠くので、あとの議論の発展がない。そのためにはやはり歴史と社会とかそういうものに対する心理であつても、あるいは論理であつても、あらゆるそういうかなり掘り下げられた知識をもった人たちが、その問題に挑戦して、日本の歴史の一般化というものをとにかくなしとげる必要があると思っております。私は、あらゆる段階の意味で、そういうふうな仕事をして、日本の本当の民主化というものに貢献する人を、知識人と呼びたいと思うのです。

……

ぼくは、日本人のいちばん大きな欠点の一つは、そういうことは日本人の性格だとか欠点だとかいってみんな逃がっているのですね。だからまず自分が始めなければだめだということですね。自分の生活そのものの中の折れ目をつけること、歴史の中に折れ目を織り込んでいって、そこから今の生きている意味を汲みだしていくということです。そういう点から見えていかないと、ただ漠然と日本の将来ということには言えないですね。私のいう経験も、私にとってのそういう作業だと思つて下さい。

問題を三つ提起されていたと思います。

一、フランスの青年がそうなら、では、われわれは日本の過去の文化というものに対して自分をどういうふうに定義しているのか。六八年にこの問題意識があったか。固有性から一般性を結論づけるのに、人間の一般的な傾向ですませてはならない。固有性から普遍性を獲得するのは紆余曲折の地についた難しい道を歩まねばならない。その問題に挑戦して、日本の歴史の一般化というものをとにかなしとげる必要がある。これは青空学園日本語科に即していえば、近代日本語の根拠を問うた場を掘りさげ、新たな場で根拠を示すことです。固有の言葉のことわりを、言葉を超えた普遍性に高めるということでもありません。幾人かの先人が挑戦しつつ未だ活路の切り開けていない問題です。私もまたこの問題の前に立ち止まってきた。が、やはり道はまだ見えない。

二、「人間」という名をつけておいて、さて、人間とはなにかといつては駄目だという。第一無駄で、折角そこにある人間を観念で置きかえてしまうことになるという。これはまた難しい問題です。人間という名よりほかに名のつけようがないあるものとどれだけ向き合いやりとりしてきたのか。かつての活動を含めて観念的なものでしかなかったのではないか。人間を定義するのは人間の経験である。人間を豊かに述べねばならない。人間という言葉で括って済ま

せてはならない。定義集の人間はまだまったく貧しいものだ。

三、ある一つの社会が、あるいは一つの人民の集団が自分自身の現実の中に、自己批判の原理をもつという一つの動き、これは実際には共産主義に向かう運動のもつべき内実であり、文化大革命が試行した最も重要なことである。いま文革は表向き否定されたままである。そのために文革か試みたことが再度取りあげられるということもない。これは六八年の再評価でもあるのだが、そこにあった新しい運動論や組織論を取りあげ直すことはわれわれの世代の責任である。新たな共産・共生の運動の味がここで問われていた。

くりかえしますが、私はかつてこの本に震えるように心を動かされました。この本とそして北白川の経験によって、一から自分で生きてみようとして、今日までやってきました。いろいろやってきて、いま読み直して改めて警鐘を鳴らされたという思いです。これだけのことが問われていたとはその当時思いもよりませんでした。

南海 でもこうして人間の経験は引き継がれていくのです。われわれが生きていく立脚点は「人間として」ということ以外にはなかったのです。しかしそれはいくら人間としてといつてもそれでは何ともならないことだったのです。

北原 人間として生きるということは、考えてみれば当たり前前のことであり、働きの人はみな人間として働きの人生を送ります。われわれは時代の力におされて「人間として生きる」ことを選び直したのです。それは決して時代に強制されたという意味での受け身なことではなく、これからの時代を人間の原理で一から生きてみようではないかという決心でした。

その試行錯誤の跡がこれまでの人生であったといえます。このような試行錯誤を生きてきたことに悔いはありません。少なくとも人間が大学を中退したり労働運動や地域の運動に入ったりしました。いちばん誠実に考えた層が大学から離れた。知的誠実さをもった層は日本の大学を離れた。

既成の知的制度の体系から離れて人間として生き考えよう。近代日本はあの時期を通してはじめてそのような生き方を生み出したのです。私もまたそのような一人です。六八年のころを生活の場で持続すること、これは前提です。そのうえで、この間の諸々の経験を深め、今、人間であるとは何を意味するのか、考えておきたいのです。それはまた、このように生きてきたものの責任でもあろうかと考えています。

人間の定義

南海 定義集では「人間」が次のように定義されています。用例を除いてここに挙げてみます。

「人間（にんげん）」「人」を「言葉をもって協同して労働する生命体」としてとらえかえすとき「人間」という。人の人であるゆえんを「人」に付け加えた言葉。人が自らを人として自覚するのは社会のなかにおける自己という認識を土台にする。さらにこれが近代にいたって資本主義の成立とともに言葉をもって労働する生命として人をとらえかえすようになる。この意味で「人間」は近代に発見され、この意味での「人間」は近代日本語ではじめて用いられるようになった。

▼もともと「人間」は「人の住む世界」「人間界」を意味し、「じんかん」と読まれることが多かった。

◆この言葉が近代になって、「人」を概念としてとらえるときに用いられるようになった。

近代は「人」を「言葉をもって協同して労働する生命体」として再発見した。これは、近代資本主義が勃興する時代に始まり、近代ブルジョア革命と資本主義生産制度もとの産業革命によって社会が根本から変化して全面的に用いられるようになる。日本語でいえば、江戸期に今日に通じる「人間」の用法

が始まり、「明治維新」と「殖産興業」による近代工業の成立以降になって一般化する。

明治維新は日本に資本主義を全面化させ、産業革命を準備した。産業革命の求める大規模な生産を可能にしたのは「自由」な（封建制度から自由になった）が、しかし同時に搾取されることにおいても自由な労働者である。明治資本主義の本源的な資本蓄積は農村の収奪によってなされた。その結果、農業で生活できず都市に多くの労働者が流出した。こうして労働のみが生きる術である労働者が生み出された。「自由な」労働者の出現である。

労働によって何が維持されるのか。それは生命と人間相互の関係である。労働は個人の労働ではない。すべて協同労働である。協同を可能にしているものは何か。それは言語である。これが「人というもの」である。このように再発見された「人というもの」が「人間」である。

もっとも早く「人間」を発見したのはもっとも早く資本主義段階に到達した西欧近代である。フランス革命に向かう時代にキュビエによって〈生命〉の概念が確立する。資本主義の展開は西欧人をこれまでとは違う言語に直面させ、言語の比較分析は、言葉の内部構造の探求へと向かい、〈言語〉の概念が確立する。スミス、リカードによって〈生産〉の概念と

それ担う〈労働〉の概念が確立する。学としてそれは、生物学、言語学、経済学を確立する。

「人」を「労働し言語をもつ生命」として再発見するのが近代である。このようにして再発見された「人」を「人間」という。これは近代資本主義が定義する人間である。資本主義は人間を「人的資源」として把握する。「生命の尊重」という建前も、労働力は生きてはじめて価値を生み出すからである。資本主義のいう生命の尊重は労働力としての尊重に他ならずそれ以上ではない。労働力としての力を失ったもに對してその生命を尊重することはない。

人の価値は生産活動につながるかどうかで定まるものではない。生産活動は人間にとって目的ではなく手段である。では人間の目的は何か。それは新たな人間性であり、資本主義的近代の人間を超えることである。二十一世紀初頭、未だそれは見出されていない。その探求こそ、現代の人間の目的である。

北原 これが定義集の「人間」です。「近代の人間」の定義であり、近代の「人間の定義」です。近代資本主義は人間の生命を資本主義的な価値を生み出すものとして見出しました。人間を生産資源として見出したのです。

そしてそれは実は人間の価値ではない。真の価値は、これを超える新しい人間の意味を見出すことだ、このようにいいかけたのです。

一方、「人間として」の「人間」はこのような近代的人間ではないはずだと批判し、一気にそれと対抗する価値を生み出そうとする人もいます。その通りというべきかも知れません。

しかし、近代の定義を一足飛びに観念だけで超えることはできません。現実に新しい人間はまだ生まれていないのです。「人間として」ということは、近代資本主義の人間を乗り越えていく歴史の運動としての「人間」であり、定義集はまず近代の人間からはじめなければならぬと考えました。

南海 人間を基礎とするということは、フランス革命の理念であり、革命はこの理念のもと人民の力を集めて王制を打倒したのです。しかしその後、ブルジョアジーは労働者や農民を裏切る。

北原 それは近代ブルジョア革命の一般的な道筋です。明治革命も同じことでした。典型は隊長相楽総三に率いられた赤報隊のたどった経過です。赤報隊が掲げた「年貢半減」はまさに人間としてのスローガンだったのです。この旗の下に民百姓は東征する官軍を歓迎した。しかし明治革命の帰趨が決するや、大商人の意図を受けた岩倉具視らは、赤報隊を偽官軍として除く。これは私の『夜明け前』を読む」に書いたところです。

ブルジョア革命の常道として、明治革命でも権力が確立するや、人間原理は圧殺された。日本近代の諸問題は、

ここで圧殺された人間原理をいかに再構築するかという問題を基調の底流としているのです。

人間原理はもはや古いということが言われます。しかし私はそれはまだ現実化していないがゆえに新しいと考えます。あるいは、今日、剥き出しの資本主義が世界大に出現し、そして山を越えつつあるときこそ、近代革命のはじまりのときに掲げられ、その後資本主義が成立する中で投げ捨てられた人間の原理を、再度われわれは現代において掲げ直さなければならぬと考えています。それが、近代資本主義の人間を乗り越えていく歴史の運動としての「人間」ということです。いずれにせよ、歴史を観念で飛び越えることはできないのです。

南海 私もそれには賛成です。新自由主義はまだまだ根強く続きます。これを超える人間が世界大に生まれてこなければなりません。人間としての原理を問い直し、地に足のついた言葉でこれを語り、新しい人間の血肉とならなければ、次の段階はありえません。

北原 現代において「人間として」とは何を意味し、いかなる生き方であるのか、それがこの対話の基調となる問題意識です。人間を再度定義することが必要です。

南海 定義集の「人間」は「人」を基礎にし、そのうえで人と人間の関係を定義しています。では人とは何か。定義集には次のようにあります。用例と他書への批判部分を除いて引用します。

【ひと(人)】[hito] ← [hitō]

■ 「ひと[hito]」の「ひ[hi]」は「ひ(靈)[hi]」の「hi」とおなじく生命力そのものを示し、「と[to]」は「と(処)」、「つまり」「そと(外)[soto]」の「to」と同じく場所を意味する。「生命力のとどまるところ」としての「人」が、日本語が人間をつかんだ原初の形である。協同労働と言葉を獲得することによって、考えることが可能になった霊長類を人という。近代にいたり、労働し言語をもつ生命として人が「人間」として再発見された。

▼動物に対するものとしての人。

▼一人前の人格をもつものとしての「ひと」。

▽具体的な人を表す場合。▽抽象的に人というもの一般を表す場合。▽人間の品格。人柄。人品など人としての内容そのものを意味する。

▼人を一般的に示す。漠然と示す

南海 さてこれは、「人間として」ということを生きる土台としようするとき、その根拠となる定義でしようか。これは、日本語の相互関係のなかで何かを定義していません。しかし、人を定義するということはどのようなのか。定義するということは、人間とはこのように生きるものであるということを用いるものでなければ、無意味だと思ふのです。

北原 私はかつて『準備的思索』『歴史を尊重しよう』のなかで、生命の出現、人の成立、新石器革命、等について論じました。知られていることごとを自分の考えでまとめたものに過ぎないものであり、新しいことはないもありません。それをふまえて上記のように定義集に書きましたが、ではそれで「人」と「人間」が定義されたのかというと、そうではありません。そこを考えたい、考える端緒としたい。

南海 問題はすべて開かれていて、これからです。私たちが生きてきた経験をふまえて、人間を考えなければなりません。森有正がいうように、人間の経験が言葉を定義するのです。言葉は人生を経験が積み重なって豊かになるのです。人間を定義するのは人間です。われわれの経験を省みることです。

北原 変革の思想は根をもたねばならない。根とは根拠です。思想の根拠は人間の経験であり、経験を経験の場の言葉で語ることです。

歴史を忘れず

北原 二〇〇八年になって、雑誌や単行本で何かとよく六八年の闘いがとりあげられます。

南海 確かに。一つは若林監督の『実録連合赤軍』が公開されたことも大きいと思います。ここにえがかれた歴

史に直接の関わりをもった当事者のなかには、細部に
いていろいろと違いを指摘する人もいます。しかし、大
きくいつて人民の側から連合赤軍を歴史として残そうと
する意志は実現していると思います。

北原 もう一つは、日本においても規制緩和という名の
新自由主義が九〇年代前半に準備され、むき出しの資本
主義的搾取が社会の各分野で次々あからさまにおこなわ
れるようになりました。その結果、二十一世紀になって
日本国においても貧困と社会の荒廃が誰の目にも明らか
になってきたということがあります。今問題となってい
ることに對する本質的な問題提起がすでに六八年の闘い
のなかで出ていたのではないか。社会がその記憶を取り
もどそうとしているとすべきかも知れません。

革命の歴史を物語にして後世に語り継ぐ、このこと
についていえば『平家物語』がまさにそうです。平家物語
は古代律令制から封建制への革命期に、武家の出であり
ながら貴族主義に陥った平家と、武家の世をめざす源氏
の革命闘争の記録です。それを敗者の側からえがくこと
によって、革命期に人はどのように生きたのかという歴
史の真実が、勝ったものの自己正当化ではない言葉で語
られています。

明治革命では、島崎藤村の『夜明け前』や長谷川伸の
『相楽総三とその同志』などに物語として明治革命のここ
ろざしが語られています。司馬遼太郎の『龍馬がゆく』

『世に棲む日々』『花神』などもまた優れた物語です。し
かしそれでも明治革命全体の物語はまだありません。

『将門記』にはじまり『平家物語』、『太平記』と、日
本では歴史を物語る伝統が根付いています。人間の革命
期の生きざまが世の中の深いところに記憶されていくこ
とが、あの六八年にも必要です。革命のなかでころざ
し半ばにして倒れたもの、あるいは道はずしてしまっ
たもの、それら草莽の生きざまを記録し残すこと、それ
が必要です。

南海 今、日本でも若者が自分の生き方としての反乱に
立ちあがりつつあります。二〇〇八年のメーデーなんか
にも新しい生きざまが表に出てきています。それは素晴
らしい希望もあるのです。しかし、この運動も世の闘
いの記憶と繋がらなければ一過性のもの、失われた十年
の世代だけのものになって終わってしまいます。老人切
り捨ての問題と貧困若者の問題が同じく困民の問題とし
て結びつき、闘いの歴史とつながることを願っています。
歴史の記憶を継承するという意味で小林多喜二の『蟹工
船』が読まれることに大きな意義があると思います。

北原 一つ闘いの継承という意味でもう一つ重要なこと
は戦後革命です。この時代の運動の中心にあったのは、労
働運動は産別会議、政治運動は徳田球一の日本共産党で
した。一九四九年の中国革命の勝利によって東アジア、引
いては世界の勢力関係が大きく変わります。社会主義陣

営の拡大です。この現実の前にアメリカ帝国主義は急速に反動化します。そして朝鮮戦争です。このような世界情勢の変化に共産主義運動はどのように対応するのか。これをめぐる混乱が起こります。この時代の闘いについては『朝鮮戦争と吹田・枚方事件』（脇田憲一著、二〇〇四年、明石書店）に詳しいです。

このとき、日本共産党はいわゆる所感派（主流派）と国際派に分裂します。六全協を経て共産党は議会主義に支配されます。議会主義に飽きたらならない青年は共産主義者同盟などを旗あげし、いわゆる新左翼が生まれます。しかし新左翼も国際派の中から派生してきたものであり、そのため戦後革命を闘った共産党主流派とそのもとの闘いや産別会議の闘争は継承されませんでした。私は徳田球一を尊敬していました。徳田球一の継承を掲げる党派に参加したのはこのためです。

ナチスと闘いぬいたフランス共産党は、肯定するにせよ批判するにせよ巨大でした。徳田球一らもまた獄中十八年を闘いぬきました。しかしそれは人民闘争ではありませんでした。これはそれぞれの国と民族の歴史でありその歴史のうえに次に進まなければならないのですが、戦後革命の継承という点において日本の新左翼は歴史を清算して継承してはいなかったと思います。

私は上田等さんにひとかたならぬ世話になりましたが、上田さんはかつての日本共産党主流派に源をもつ人です。

それは『大阪の一隅に生きて七〇年〜私の総括〜 自伝』（二〇〇二年 創生社）に詳しいです。その人が六八年〜七二年の時代に大学を離れた人間をたくさん引き受け、生活の場と闘いの場を作ってこられたことは、貴重なことです。事実としての協働の場、これが重要です。この意味は大きい。

私は、徳田球一の伝統や戦後革命期の記憶、六〇年安保闘争と六八年の闘いなど、戦後六十年の人民闘争を物語ることは今こそ大切ではないかと考えています。それは、書いたものの中にだけではなく、人びとの記憶として残らなければならないのです。その蓄積が次の高揚期の質を決めます。

南海 新左翼は「反スターリン主義」を掲げました。

北原 私は「スターリン主義」という主義があるとは考えません。ナチスドイツや日本軍国主義のファシズムは結局は社会主義に対抗するものです。ファシズムに包囲されたなかでいかに闘うのか。この観点からスターリン時代を考えなければなりません。

スターリンの時代のソ連は反ファシズム連合の中心として一千万人にのぼる犠牲を出して闘いぬきました。中国人民もまた八百万人の犠牲を出して日本軍国主義と闘いぬきました。その中心にスターリンや毛沢東がいたことは事実です。そのなかで多くの誤りもまたあったのだと思います。しかしそれは闘いのなかで生まれた未解決

問題であるということです。後のものが、まさにこれから二一世紀の闘いのなかで解決していかなければならないのです。反ファシズムの闘いの社会主義の立場からの継承、これがいまほど求められていることはない。

南海 なるほど。反ファシズム連合の勝利があったからこそ、戦後の日本における政治活動の自由もあり、それがあったからこそ新左翼もありえた。新左翼が「反スターリン」をいうことは、存在の基盤を自ら否定することになるのではないか、ということですね。

北原 もちろん、われわれはかつて党派に属し、その党派もまたスターリン問題についてはいま述べたことと同じようにいっていました。新左翼の人からいえば「だから破産したのだ」という批判はありえます。私自身はスターリンの未解決問題をこの党派もまた解決できなかったから破産したのだと考えています。これはまだまだ考えなければならぬ問題です。

はじめの対話の締めくくりに、青空学園の初心を互いに確認したいです。現実の青空学園はわれわれがはじめたのです。が、最近私は、この学園は昔からあった、そこに自分が青空学園にやってきたというふうに思うことがあります。青空学園は、すでにある「何々として」とらわれず、人間として考える場です。

人間として考える場としての青空学園で一人は日本語科に、一人は数学科にやってきて出会ったのです。

『青空学園の初心』に書かれています。

青空学園は一九九九・八・二七にはじまった電脳世界の仮想学園です。その理念は、人間として自分の力で考えぬくということにつきまします。この世界のすべてのことを、自らの内の力で徹底して考える、ということである。この学園はだれでも参加できる。必要とする考える力は、およそ、高校生の段階を目安にしているが、これとて大きな幅のあることであり、参加資格は、疑問を大切にして大いに考え大いに議論すること、これだけである。自学自修、そして大いに対話する、これが青空学園の方法である。

すべてを、ただ人間として考え、そして生きよう。青空学園が将来どのように発展していくかはわからない。初心を忘れず現実に立脚し、しかも日本の学校制度からは自由に学ぶ場として育てたいと考えている。ともに考え、ともに学び、意義ある人生をともに生きよう。

いま話しあっている事々のはじまりはこの初心にあります。これは忘れてはならないと考えています。

南海 私は、教員になったときからおよそ四半世紀を生きて、そして青空学園数学科に来ました。九〇年代後半に今の塾で教える仕事に就いたのですが、はじめの頃はいったんは忘れた数学を思い起こし、高校数学の周辺領域を再確認していくのに精一杯でした。青空学園数学科

は、そこで考えた内容を客観的に見直していく場ともなりました。そして、二〇〇〇年代になってようやく高校数学の方法を系統立って考えることができるようになりました。私が『高校数学の方法』にこだわりのも、七〇年頃の生きる方法の模索があるからかも知れません。

二〇〇〇年頃から青空学園で数学書の読書会をはじめました。これは私自身ももういちど数学を勉強し直すということでした。最初は『解析概論』からはじめて二〇〇七年末には『数論Ⅱ』に至りました。ここに至る道は紆余曲折と言うべきです。大学院を辞めて社会に出て働いて三十年です。大学をやめたときには、仕事として数学を教える以外には再び数学に関わることはないだろうと考えていました。また、途中十年近く、他の仕事についてたときは、数学を教えること自体からも離れていました。

北原 その十年は党派活動に専念していたときです。
南海 結局、それに破れ、生活のために再び数学を教えるはじめたのです。以来、高校生に数学を教える仕事に携わってきました。強く感じるのは、近年の高校生の変化であり、人間の変化であり、学問という営みの危機です。六八年の問題そのものです。

そこで同じ青空学園のものでそれぞれが考えていくことになったのです。近年の高校生の一般的な考える力の衰退はすさまじいです。しかしそのなかで自分の力を自分でつけていこうとする高校生もいるのです。彼らにもつ

と適切な材料を提供したいものだと思っています。

数学は実際には文明の土台です。にもかかわらず、高校では単なる受験科目の一つにおとしめられています。これを見るにつけ、草の根から数学を根づかせるために、できることはしたいと考え読書会をはじめたのでした。

北原 われわれは数学を専門にしようと大学に入り、大学闘争の渦中でそのことを見直し、その過程を経てそれは異なる道に進みました。私は高校生の時、大学の学の学部をどこにするかというときに、言語学をやりたい気持ちもあつたのです。が、言語学はいわゆる文系学部で、数学を生かすことができないように感じたのです。数学を身につけることで自由に考えることとそして生きることができるようになる、そこで数学科に進みました。が、根っからの数学人間というわけではありませんでした。言語学が理系学部、あるいは文系理系以前の基礎学問という位置づけがあれば、そちらに進んでいたかも知れません。その後、個人史に書いたような紆余曲折を経て青空学園でやってきたのです。

南海 やはりわれわれは、六八年から七〇年代初頭の時代が求めていたことを自分自身の問題として考えるところから、はじまりました。そのことは忘れないようにしたいものです。

北原 青空学園をはじめて十年を迎えます。初期のものを読みかえし、今をふり返ると、ずいぶん深く考えられ

たということを確認することができる一方、初期の問題意識からすれば、まだほとんど進み得ていないこともありま

かります。
このような対話を踏んで、さらに深く広く考えたいき
たいと思います。

数学の経験

文明の方法

北原 数学というのは専門的な一部の人の数学であるとともに、社会生活でなくてはならないものです。専門家の数学は一種の芸術であり、打ち込んで打ち込んでその世界を少しでも解明するものだと思っています。

同時に数学は、今日のわれわれの生活でなくてはならないものです。工業は言うにおよばず、経済学や社会学でも数学は必須です。数学にはこのように二つの面があると思います。

人類の歴史を見れば数学は文明を支えるものとして機能してきました。数学の専門家の成立はこの二百年ほどのことでしょうかありません。いったい数学とは何なのでしょう

うか。
南海 確かに。私も数学から離れることができずにきました。が、ではいったい数学とは何であるのか、わかっ

ているわけではありません。教員時代の終わり頃でした
が、ある日突然高木貞治の『初等整数論』が読みたくなっ
て、学生時代に作った青焼きの写しを読みはじめたこと
がありました。それは、そこでまた中断し、その後伏流
のように心のどこかにあったのでしよう。後に青空学園
数学科をはじめ、『数論初歩』をまとめるところにつなが
りました。

青空学園数学科で自己史を書いたなかで、「文明の方法
としての数学」として次のように書いています。

数学は古代エジプトをはじめとする古代文明ととも
にはじまります。ユークリッドやピタゴラスに代
表されるギリシア文明は、古代エジプト、メソポタ
ミア等のアジア・アフリカ文明と北方の古代アール
ア人の文明の混交のなかに花開いたものです。それ
はアラブ世界に保存され、ルネッサンスの西欧が再
発見した。いちどは近代西欧文化に収斂し、そして
今日世界中に広がったのです。

今日の文明の土台にあるのは、なんといっても数
学です。数学がなければ、初歩的な技術も設計も機
械の運転も何もできません。また、情報技術の基礎
にあるのは世界を形式化しデジタル化してつかみ動かそ
うとする基本的な傾向です。世界を数学化してつか
もうとする基本的な方向性を現代文明は持っています。
この基本における仕方こそ、文明の方法としての

数学です。数学をを基礎として現代文明は成り立っています。

人間はつねに、ある文明のもとで生きているのですが、そこで生きるうえでの具体的な形を与えるのが文化です。文化は歴史的に形成された固有性をもっています。学術の研究とは、この文化を耕し、文明のもとにおける人間の生き方を豊かにするとともに、文明をもまた改変していくものです。

文明の方法としての数学が、日本の文化のなかにまっとうな位置をしめることができていない。世上いわれる「文化としての数学」は定義があいまいでたいへん底が浅く、とても文明の方法としての数学をとらえる文化にはなっていません。私は、数学が日本社会に根づくとしたら、文化が「文明の方法としての数学」をとらえ直すことからしかはじまらないと考えています。

よく「道具としての数学、ではなく文化としての数学」ということがいわれます。しかし「文化としての数学」が外部から呼びかけて可能なのかといえば、文化の本質において不可能です。文化は内からの展開以外にはありえません。今、本当に「文化としての数学」が日本で可能なのかと考えると、問題は簡単ではありません。

数学がより普遍的な文化として根づくためには、いちど、現代文明のなかで、数学がどのように普遍的に機能しているのか、あるいは数学を学び身につけることがこの文明のなかで生きる人間にとっていかに大切で、人間形成の根幹の一つをなしているか、そしてそのような数学が現代の数学とどのようなつながっているか、などを掘りさげて考えなければなりません。「文化としての数学」ではなく、文化が「文明の方法としての数学」をとらえる、ということですが。

文明と数学の問題と、文明における人間存在の具体的で固有性のあるあり方としての文化、これを明らかにすることです。その前に「文化としての数学」といっても、それは西洋文化のうわべをまねた大変根の浅いものにしかならないのではないかと考えています。私自身、数学と文化、数学と文明の問題は、まだ考え続けている問題です。

「文明の方法としての数学」にまで立ちかえらなにかぎり、日本語文化圏に数学が根づくことはありえません。ここを掘りさげ、「道具としての数学」と「文化としての数学」の対立を乗り越え、日本における数学を再認識し、それにもとづく数学教育を考えることは、すべてこれからの問題です。

わかりにくい書き方です。これまで対話してきたことをふまえ、次のように考えています。

第一、言葉と数学は人間の文明のはじまりとともにあった。生産の組織も、あらゆる人間関係も、そして人間の思想も、言葉が機能しなければ不可能である。言葉と同じ水準で、数学もまた世界を分節し、そうすることで世界をとらえ組織化してきた。二一世紀の情報技術の爆発は、数学なしにはあり得ない。

第二、物質的存在の量的側面をとらえその構造を説明すること、それは物理学であり同時にそれを記述する言葉としての数学であった。数学はまた、言葉のなかに世界があるように、数的現実と数的現象を発見し、その世界を探検してきた。これはこの一つの全体世界の量的把握であった。

第三、一つの文化が文明のもとの人間文化として機能するためには、言葉が文明の言葉として機能しなければならぬが、そのためにはその文化が数学をとらえきることが必要である。日本列島の文明は、内部の文化が数学を発見するところまでには至っていない。だから、「なぜ数学を勉強するのだ」という問いが起ころ。日本における数学について、歴史を掘り起こすとともに、われわれ自身が数学を再発見しなければならない。

数学も母語

北原 まず第一のことですが。数学は何より言葉なのですね。

南海 そうです。世界を量的側面からつかむ言葉です。人間が力をあわせて働きはじめたとき、言葉が獲得され、考えることがはじまり、それを土台として労働の度合いに応じる何かとしての量が認識される。この量の構造を記述する言葉が数学です。

人間は成長の過程で一定の数学を身につけます。数をかぞえ、量をはかり、型や形のちがいを知るようになる。数の世界は広がり、関数やグラフを学ぶ。また、厳密に論述する術も学ぶ。結論の根拠を示したり、証明することをおして、予測し、筋道を立て、論証する力をつける。これらはいずれも現代文明のもとで生きるのに必要な事々です。

人間は一人では生きていくできません。力をあわせて働かなければこの世界から恵みを受けとることはできないのです。一人の力は皆の力であり、ひとりの命は皆の命です。力をあわせて働くところに言葉が生まれましました。最初は力をあわせるためのかけ声だったかも知れません。あるいは危険を知らせる叫びだったかも知れません。長い長い時をかけて音を節に分けて発音することができますように、言葉を獲得しました。こうして人間は言葉で互いにやりとりする生命体になったのです。言

葉は発展し、物事を抽象して「これこれのもの」「これこれのこと」としてつかむ働きも、つかんだ内容を表す記号としての働きもつようになりました。この働きが言葉の分節作用です。こうして、言葉の発展と一体になって、複雑なことを考えられるようになりました。

世界を分節するとき、分節されたものの大きさや個数などの量的な把握がはじまる。「今日は昨日よりたくさん捕れた」のなかにすでに量的把握が現れている。こうしたものを量としての面からつかみ、さらにその変化や量の相互関係の把握へと進む。その内容が世界の構造を量の側面から切りとった法則です。

数学は言葉と同様に、社会生活を送るための道具であるとともに、学び身につけることで人間として考える力が形成されるという意味において、人間の土台でもあります。

つまり私は、言葉が人間形成にとって果たす役割と同等な役割を数学も果たしているのではないかと考えています。人間が世界を言葉によって分節して把握するとき、つねにそこに把握されたものの量的側面が認識されます。そこで計量と計算が生まれます。数学は人間が世界と関わる上での一つの言葉なのです。いわゆる言葉が人間と人間のあいだのことであるとすれば、数学は人間と世界のあいだのことなのです。いずれも人間が開かれた世界に歩いていくときに、必須の言葉なのです。

数学はいわゆる言葉と異なる側面をもっています。それを私なりにまとめると次のようなことではないでしょうか。人間と世界のあいだのことであるがゆえに、個別の固有の言葉を超える普遍性をもつということです。つまり次のことです。

数学は言語協働体の枠を超える。言葉は通じなくても、幾らの稲と幾らの鶏を交換するのは決まる。幾らという個数は言い方は違っても、同じかどうかは確定し比較できる。対象の普遍性。

数学は個人内部で考えられる。しかしその結果を外に出せば通用するかしないか、正しいか否か判断できる。方法と得られる結果の普遍性は検証される。

このように人間と世界の関係という普遍性を直接経験することができなのが数学です。子供は、はじめは個別の蜜柑が三個と認識していたものが、皿三枚の三と同じであることを知る。数の獲得です。ここからはじまって数学を一段一段普遍化してつかんでいきます。これはおそらく人間が数を獲得してきた過程の固体のなかでの反復であり、この過程を通して人間が形成される。

したがってこのような数学をそれぞれの段階で身につけることは、その人間の成長の段階のために大変重要なことだと考えています。

現象の分節

北原 数学は客観的に存在するのですか。それとも数学は人間が自由に構成したものののですか。

南海 人間は、言葉によって世界に働きかけることで世界の量的法則を発見し、それを数学という言葉で表しました。言葉は表現の道具であるとともに、考えることそのものです。これと同様に、数学は世界の量的法則を書きあらわす言葉であると同時に、数学それ自体で存在すると思います。

数学的現象というものは確かにあります。一方、多くに数学者が数学は自由だと主張してきました。数学は自由だということと数学的实在の客観性と、一見異なる見解があります。私はこれに対しては次のように考えます。

数学的現象は実在する。人間がそれをどのように分節してつかむかは、人間の自由である。

北原 一九世紀から二十世紀の前半、数学の基礎についての論争がなされました。その過程で、直観主義、形式主義、論理主義など数学基礎論のいくつかの立場も現れました。それについてはどうですか。

南海 それもまた数学大系をどのように分節するかの問題であって、数学大系そのものは人間がつかみきれないものとして実在していると考えています。そしてこの分

節の方法は段階を追って発展するものであり、固定していません。

北原 集合論もまた、分節の方法なのですね。

私は、「構造日本語」という概念を導入しました。言語を一つの構造としてとらえ、その構造の大枠を作る言葉を「構造日本語」を呼んだのです。構造という把握は、数学のブルバキ (Bourbaki) から得ました。構造の前提にあるのは「集合」です。「集合」の本質は述語論理です。「述語に対応してその主格に來ることが出来るものすべて」、これが集合です。

南海 \times は \cup の倍数である。 \times のところに来ることが出来るもの全体、これが \cup の倍数を要素とする集合 Δ です。集合 Δ の本質は「 \cup の倍数である」という述語です。

集合はそれだけでは構造をもちません。しかし集合を考えることは、直ちにその内部構造を考えることにつながります。 Δ の要素の和も積も、再び Δ に含まれる、といった構造です。

しかし、数学思想であり方法論でもある「集合論と構造」は一九世紀末から二十世紀中期にかけて、大きく変わりました。

(一) カントールによる集合論の開始。無限に段階があることの発見。近代数学の基本言語としての集合論の発展。

(二) 集合論の逆理の発見。数学の危機。数学基礎論論争。

(三) ヒルベルトの計画。公理論と有限の立場に基づく形式主義数学。無矛盾と完全性をもつことと数学的存在の同一視。

(四) ゲーデルの不完全性定理の発見。ヒルベルトの計画の挫折。連続体仮説の独立性の証明。

(五) ブルバキの構造主義。集合を準同型の組。公理を満たす集合の圏論。

ヒルベルトの計画は、ルネサンス以来の西洋近代化の流れのなかで、その流れに忠実に提起されたものです。カントールの集合論も、一九世紀西洋数学の展開のなかで必然的に出てきたものです。近代化の流れのなかで必然的に発見された逆理を、その流れのなかで解決しようとするのがヒルベルトの計画です。そしてそれらの計画はゲーデルによって、それ自体としては破産したのです。数学における近代化の終焉でした。

「構造」は、ゲーデルの不完全性定理によって「数学基礎論」が終結した後に、数学の思想方法論として定式化されたものです。ゲーデルの定理以降に数学の新たな枠組みを作ったフランスを中心とする数学者集団ブルバキは、このとを端的に次のように述べています。

もし、未来にそれ(現在の数学の枠組みとなっている公理的集合論)が破綻しても数学は必ずや新しい基礎を見つけるだろう。

集合論の背理の発見からヒルベルトの計画、そしてゲーデルの仕事などの一連の歴史の結果、数学は、数学現象そのものとそれを今日の段階の力で記述する方法としての体系の分離と統一を見いだしたのです。体系とは完結したものではなく、それ自体が開かれた発展する方法なのです。

数学の構造主義とは開かれた方法です。北原さんはこの構造という思想方法論を、日本語の探求に用いられました。

北原 私は事実として、数学の「構造」という考え方に依拠して日本語のことを考えたのです。かつては、数学に根があるのかと考えたのです。数学は結局ギリシア精神ではないかと考えたのです。しかし、いざ自分で日本語を考えていこうとしたとき、言葉の構造のなかで主要な役割をしている言葉、構造を決定しているような言葉、その言葉の来歴を調べ、その言葉をその構造のなかで洗いなおし、再定義しなければならぬと考えたのです。

南海 「構造」は近代化後の西洋思想が、共通の枠組みをもつために、必然的に生み出した考え方であると思います。それが日本語を考えることとなった。近代化段階の日本語への違和感に端を発する私の探求が、近代化後の西洋思想を方法に用いようとしたところ、何か、文化の根ということと、それを越えた人間としての、あるいは人類史的な普遍性があるように思われ

ます。

一、数学は本当に不思議なものです。頭の中だけにあってという側面があります。代数的整数論などにはとくにそのような感じがします。しかし、一方で、数的現実、数的存在は確かにあります。リーマン幾何と相対性理論、微分幾何、楕円曲線と暗号論、といった大きなことだけではなく、力学計算なしに建築物の強度は計算できないし、あらゆるものの設計に数学は不可欠です。朝家を出てよる帰るまで手に取った生産物で数学ぬきに設計できるものなど何もない。抽象性と具体性のこの両面が一体であることは、本当に不思議です。

二、今日の原子力技術と高度情報社会の基盤が数学なしにはあり得なかった。数学が文化の根をもつか否か、といった議論を吹き飛ばす現実です。一八世紀から二十世紀にかけて、高度な数学文化が西欧に花開きました。それはやはりすばらしいものです。しかし、人間の歴史を見れば、数学はもっと現実生活に密着したものであったし、それが数学だった。もう一度、文明の根幹、土台としての数学を考え直さなければならぬ。近代文明の意義と構造の解明はとりもなおさず数学の意味の解明でもある。

三、一方、体系化された数学は、それ自身の力によって、体系化からはみ出す領域があることを示した。無矛

盾な体系は、逆に可算個の論証の列では証明できない命題がその体系内に存在する。この意味を文明論的に解釈することは意味がありませんが、人間が考えるということの本質を識る、という立場からものと掘りさげて考えなければなりません。

北原 なるほど。数学の普遍性と、現実には数学が存在する文化の固有性との関係は、簡単なことではない、ということですね。

文明は普遍であり、数学そのものはその文明の基本的な方法として普遍的である。しかし人間が文明のうちで生きる型、つまりは文化の型は固有であり、数学が実際に存在するあり方にも固有性がある。現実の数学は、文明に対する文化としての数学には違いない。しかし、文明に向きあう数学としての視点を欠いては意味がない、ということですね。

南海 はい。そういうものとしての数学の教育に携わってきました。数学と教育、近代日本の教育における数学などに関する私の考えは『私の考え、私の願い』に書きました。数学の教育は言葉の教育とともに、教育の根幹です。日本近代の教育はその根幹についての考え方が明確ではありません。ここをあいまいにして、近代の次はあり得ない、これが私の考えです。

仏教の経験

存在の不安

北原 今もって私は、自分が人であることがわからなくなる時があります。人を定義するとは、このような人間存在の不安に対し、この問題と対峙し考えぬいたうえで、このことでなければなりません。それはできてはいません。

私は若い頃から「存在の不安」としかいいようのない不安を強く感じてきました。何をしているときにも、不意にこの感覚におそわれる瞬間がありました。この世界そのものがそもそもあるのか？ という感覚です。そうすると、その他の諸々のことが意味ないように思われるのです。その感覚は今もあります。この世界は本当のところあるのか。ないのではないかという感覚です。

そこに神をおいて、人間は神が作ったものであるという立場に立つことは、問題を一つ深めたことになりましたが、「存在の不安」を「神への信仰」に置きかえただけで、問題を引き受けきったとはいえません。神の問題は言葉の構造に規定されて起こってきたようにも考えられます。いずれにせよ、「存在の不安」はそれ自身で考えようとしてきて、「神への信仰」の方向に進むことはありませんでした。

南海 デカルトはこのような探求の末に、不安に感じている自己、無いのではないかと感じている自己そのもの

は存在する。自己が存在しないのなら、そのような不安すらないはずだ、と考えたのでしょうか。

北原 今言いましたように、言葉が根本的に違うときに、デカルトを追体験すること自体は本質的に難しいです。彼の考えたことを、われわれの問題としてとらえなおし考えることはできませんが、それがデカルトの経験であるといえるかどうかはわかりません。ただ、デカルトの省察は、まさに近代的な人間の誕生でした。そのことは、デカルトの追体験という問題を措いても言いうることです。

南海 二十世紀中葉になってデカルトと同じフランスのサルトルが実存主義を掲げました。小説『嘔吐』は「存在の不安」の探求です。その不安は、キリスト教の世界観、神はロゴスだという「言葉本質論」の世界観の破れ、その世界観ではもはや現代を生きることができないという不安が背景にあるように思われます。サルトルは「存在 (existence) は本質 (essence) に先行する」という命題を掲げ、キリスト教の世界観とは異なる道を求めたのです。

北原 しかし、西洋では真理は言葉で表されるし、言葉で表されることが真理であるという思想が確固として基盤にあります。神はロゴスだという思想です。サルトルは、「言葉本質論」に「言葉本質論」で立ち向かったように思われます。実存主義は神を離れてそのうえで西洋の言葉の世界のなかでいかに生きるかという方法の土台を

うち立てようとするように思われます。私はかつてもうつかサルトルを読みましたが、やはりそこに糸口を見いだすことはできませんでした。

だからといってもちろん、ここで安易に東洋を対置するつもりはありません。

私は、不安に感じている自己自体が不明でした。幻影が幻影を見ているような不安を感じて、自己そのものがあやふやでした。これは論理ではなく身心の感覚です。このままでは「人間として」といつても、あやふやなことになってしまふ。青空学園でいろいろやってきましたが、この基本的な疑問は疑問のままでした。

私は党派の活動をしていた時期には、この問題を次のように考えていました。自分の不安がどうのこうのという前に、まず人のために、歴史のために行動するのだ。自分の疑問はあとにおいておけ、ということです。これは、ある面では存在の不安を社会的な実践で乗り越えようとしていたともいえるし、ある面では存在の不安に正面から向きあわず、問題を避けていたともいえます。しかし、それはやはり正しくない。自分の内部からの疑問をおいたままではでききれない。私が党派活動から離れた本当の理由はここにありました。

私の党派としての活動など、ある意味では遊びでしたが、それが変革の行動であった以上、多くの人間に多大の困難の強いてしまいました。それだけに、この経験は

自分でまとめなければなりません。

それからおよそ十年間は、さまざまの実生活の問題を解決するために走ってきたという思いです。いろんな課題はまだそのままですが、ようやく存在の不安という問題に正面から向きあうところに来ました。

道元に聴く

南海 『個人史』によれば若い頃に座禅をし、また『正法眼蔵』を読んでこられました。『正法眼蔵』は北原さんにとってどのような書なのですか。

北原 道元は生涯読み続けた書になりました。

故郷の宇治には、桃山時代に再興された道元開祖の興聖寺があり、小さい頃から慣れ親しんだ遊びの場であったことは、道元に引かれるきっかけの一つだと思います。また、道元の「而今の山水は、古佛の道現成なり。ともに法位に住して、究盡の功德を成ぜり。（正法眼蔵山水經）」という言葉を、宇治川とその周辺の風光そのものとして受けとめ、『正法眼蔵』に入っていたのです。もちろん「山水經」の「而今」はそのような感覚的なことではないのですが。さらにまた学生時代に臨済宗の相国僧堂で少しは禅の修行をしたおり、梶谷宗認老師が提唱に使っておられたのが『正法眼蔵』でした。

そんなこともあって道元を読みはじめたのです。最初

に強く引かれたのは「非情の求道」という道元の姿勢です。あれだけ原則的な生涯を送った人はいません。平安時代が崩れ鎌倉となるまさに激動の時代が生み出した人物です。

最近、もう一度『正法眼蔵』を読みなおしました。三冊の書物を手引きにしました。そのうえでいくつかの疑問に改めて出会いました。

第一の本は『意識と本質』（井筒 俊彦著、岩波文庫）です。そのなかで仏教、とくに禅について書かれたところから一つの疑問に出会いました。

『意識と本質』にはつぎのことがいわれています。

人間は世界を分節して掴む。分節することが掴むことである。掴むのは「本質」である。分節は言葉による。道元は日常の言葉による分節にとられるな、異なる分節の体系もある。分節作用は世界の真実をとらえない。分節から自由になれ。

大乘仏教は「本質」を認めない。そんなものは人間の経験界における虚妄である。本質にとられる自己を脱落し、本質に縛られた日常意識が突き破られて、直接に世界に触れよ。そしてそこから、本質から解放されよ。

ここから私の存在に不安を考えなおせば、それは本質にとらわれた日常意識の裂け目であったといえます。それはよくわかります。道元を読んで、あるとき、不安を不安がる心の働きを止めてみたのです。そのままそこに

置いて止めました。このとき、日常の意識の断裂したところから真実の何かが顕れてくることを知りました。

このような経験を重ねながら、私が感じてきた「存在の不安」が、じつは存在の側からの語りかけであることが少しずつわかってきました。

一方で、人間は必ず死にます。いつとき人間として存在して、再びものに戻ります。個別の自己が自己としてあるのは一時のことである。ものとして戻っていく場合は、わかりません。人間の側からいえば、すべては空です。空とは、人間として存在した再びものに戻っていくその総体、命に現れまた滅して生成滅滅しているこのものの総体、そのありようのことだと思えます。それは意識を止めたとき、片鱗を表す。

すべては空である。空の相は縁によって起こり起こることである。自己の身心もまた縁によってあり、縁は解かれ空にかえる。これのみが実相である。縁起そのものが、日常の生成消滅ではない。縁による生起は輝きである。生成滅滅、また輝きである。自己はこの実相に触れるとき、一時のことであることを知らされ、不安と感じる。それは実は真実に触れているときである。

このように道元と仏教に学ぶことができるようになったのは最近のことです。

南海 私がやっと類体論がわかってきたとき、北原さんは道元がわかってきた。

北原 わかってきたとはいえません。私はかつて相国寺の参禅で「無字」の公案から「隻手の音声」に進みましたが、それは決して身心脱落したからではありません。修行はありますが、証はありません。

そこで疑問です。『意識と本質』には次の一節があります。

事物の「本質」はどこから来るのか。答えて言う、人間の倒錯した意識の働きによって「本質」は現れてくるのだ、と。

経験世界を分節して掴み、ものを本質において理解することは、確かに虚妄なのだ。だがしかし、それは労働の必然的な帰結ではないのか。人間は協働して労働することによって世界の中で生きる。そのときその協働を可能にするために言葉が生まれ分節の体系としての文化が生まれる。これは避けがたい。人間が生きていくということはそのようなことだ。

この事実をふまえないところで言われる大乘仏教は、やはり現実に人を救うことはできないのではないか。

南海 仏教の教えることは、世界は空だということですが。人間は皆死にます。ものに本質はありません。すべては生成滅滅、縁起の世界です。言葉は心 (kokoro) の括弧 (kururu) 働きが、本質としてとらえるところに生まれます。しかし、本質は幻です。心の働きが止まり、言葉が断られたとき、懐かしい世界が顕れます。

その通りです。しかし人間にとって言葉は働くところに生まれたものであり、人間の人間としての所以です。言葉を否定するということは、人間としての自己を否定することか。われわれの立場と食い違うのか、ということですね。

北原 それに関して第二の疑問です。『道元禅師 上下』（立松和平、東京書籍）を読んでのものです。

これはなかなか大作です。だが、一点、私が考えさせられたのは、道元が鎌倉に向いて北条時頼対面したとき、武家の頭領、將軍として苦悩する時頼に、將軍をやめればいいのだ、と言いきるところに関してである。時頼に対してはこれでいい。

しかし戦乱に苦しむ農民に対して「農民をやめればいい」といえるだろうか、ということです。「やめられるものならやめたい」といわれて仏教者はどう答えるのか、です。

南海 第一の問いと第二の問いは根が同じであるように思います。仏教は出家し世を捨てることをいうが、しかし捨てられるものなのか、と言うことですね。人間は生産に携わることで人間となった。言葉も生まれた。労働は必然的に世界を分節する。労働は対象を本質において捉えなければ不可能である。

北原 分節にとらわれるなどということ、人間が働くということと、これをどのように考えればよいのか疑問な

のです。

もう一冊は『道元』（頼住光子、NHK出版、05年11月）です。

仏教では「無自性」を主張し、あらゆるものに固定的な本質などないということを出発点としている。人は、日常生活において、漠然と「自己」という何か固定的なものがあるかのように考え、その固定的な自己を単位として、生活を営んでいる。しかし、仏教的な考え方からすれば、それはあくまで日常生活を送るために仮構されたものであって、実はそのような固定的な自我もないし、さらに存在するものはすべて、固定的な本質などないのである。

そのうえで、著者は、本質を乗り越えたところでおこなわれる、

言語化、意味化によって再び世界が立ち現れてくる、これを「現成」と言うのだという。言語化し意味化するとは、時として構造化することであるともいう。自覚点としての「有時」こそが、日常世界における自己完結性から解き放たれて、世界との一体性を回復する時（而今）なのである。

ということを言う。これはそれぞれよくわかるし、『正法眼蔵』を読む手引きとして大変よくわかるものでした。しかしそのうえで、大きな疑問があります。

自己が空ならば一体誰が時として構造化するのか、時に構造化する主体は何か、ということです。これは本書のなかでは答えられていません。著者は「哲学」の範囲で道元を読んでいます。その範囲で読むかぎり、この主体の問題は解決できないように思われます。

南海 第三の問いは、頼住光子氏の『道元』があくまで哲学の範疇での解説であるのに対して、宗教としての問いであるように思われます。この主体は哲学からは出てこない。

北原 この主体は、道元という「仏性」に関わります。仏と人との人間としての交流、そのような仏性を、既成の、現実に社会的に存在する宗派仏教の概念としての仏性ではなく、言葉によって色づけされることなく、しかし仏教が仏性という「主体」の問題を考えなければならぬ。そうしなければ「人間として」の土台にはならない。

南海 また、大乘仏教からいえば、悟りに至ったものが再びこの世界に入って人びとを救おうとするとき、どのようにするのか、と言う問題でもあります。

北原 いずれにせよ、若い頃から疑問のままであったことがここで再び現れたと思いました。ただそれでも私は長いあいだ道元を読んできて、はじめて道元を読んだという気持ちです。

南海 私がはじめて類体論を読んだということと平行なことかも知れません。いずれにせよ新たな探求のはじま

りです。

非・人間主義

北原 二〇〇八年の冬、時間を見て故郷の実家に戻り昔の写真などを集めてきました。戦後日本の典型的な核家族のなかで育ちましたが、そこにもそれなりの歴史があり、それが高度成長期の日本史のなかにまさに収まっていることもよくわかりました。

私がおのなかで、上昇志向の道から外れたのですが、やはりそれは故郷の土のにおいとそこで養われた人間と言葉に関する感性が、近代日本の上昇志向とはどうしても相容れなかったからであることも、今はよく理解できます。

このように歴史のなかで人間としての基本的な感性で現実と対抗して生きていくのが人というものです。基本は生活です。生活のために現実と対抗する。対抗するところに火花もちり思想が生まれるのですが、人間はそこで苦しみもがき、そして対抗する思想を目的意識的に自覚的に追い求める。対抗する人間の動く方向が一つになるとき、世が革まるのです。それには多くの人間のたゆまぬ努力が必要です。

私の仏教への疑問は、結局は、現代における仏教と言葉の問題です。もう少し問題を大きくとれば、二つの宗

教の土台にある西洋思想と東洋思想の二つの傾向性の確認と、そののりこえの問題といえるのではないかと思えます。

キリスト教は一神教です。イスラムもまた一神教です。今日、それらの世界のなかには神を信じるといふ人も信じないという人もいます。その違いはあります。しかし、それでもそこには一つの共通な考え方があります。それは「真理は言葉で表される」ということです。聖書のヨハネによる福音書の冒頭に有名は次の表現があります。

はじめに言葉があった。

言葉は神と共にあった。

言葉は、神であった。

ここでいう言葉とは「ロゴス」であり日本語の「こと」がもつとも近い言葉です。言葉を貫くことわりを信頼するということ、ここに西欧の考え方の基本があります。ロゴスへの信頼は「本質」があるという信頼です。

もちろんキリスト教は終末思想であり、人類の進歩を根底では認めない。一方、西洋近代の啓蒙思想は文明の進歩と人間世界の発展を認めるといふ違いはあります。しかし、キリスト教には汗を流して働くことの意味を考え、他者への働きかけを重視する思想がありました。カトリックに対するプロテスタントはこれが鮮明で、個々の人間が神のもとで勤勉に働くことを勧めるものでありいわば

改良キリスト教なのですが、啓蒙思想からキリスト教で、これらの思想の根底にはロゴス手の信頼という共通の基盤があります。

ヘラクレイトス以降、ロゴス（言葉、理性、論理）というものは、プラトン、アウグスティヌス、啓蒙主義と西洋の哲学者にとって極めて重要な意義を持つ概念であったのです。

ジャック・デリダのロゴス中心主義批判と脱構築は、西洋の哲学におけるロゴスの絶対性・優位性を問い直すことで、これまでの哲学者たちの論理的な構築というものを崩し、西洋思想の新しい可能性を模索するものです。私は西洋内部から出てきたこのような新しい思想の可能性については今は何もいえません。ただそれはあくまで西洋内部からの問題であり、われわれの問題とつながるとしても、それは直接的なことではなく、われわれ自身の側の掘りさげなくてはあり得ないことだと考えています。

それに対して、東洋にある考え方にはどのような共通の基盤があるのか。言葉が示すものの本質は存在しない、神が存在しないというだけではなく世界というこの容れものも存在しない。すべては「空」であるという思想です。人間中心主義でもありません。生きとし生けるものを同じように考える傾向性もまた共通のもので、徹底すれば個人の悟りもまた空であるという思想です。

このような空の思想は仏教だけではなく東洋思想の共通の基盤になっています。しかし、近代に向かう時代からこのような思想は支配的な思想とはなりません。仏教的な自己を含めて現世を否定する考え方は、実際の世の中の政治や経済の指針を生み出すことができなかつたのです。中国は儒教がインドはヒンズー教が日本では神道が近代を準備する上で重要でした。仏教は現世でいかに生きるかの指針を示しますが、それは決して世をいかに組織していくかに関する原理ではなかつたのです。

しかしこれらの互いに相反する思想を含めて、そこには同じ基盤があります。西洋においても表面的な対立の奥に共通の基盤を持つと同じです。それはないかと言えば、本質の否定であり、そこからの蘇りです。その結果としての多元思想であり、現世の宗教としての多神教です。

言葉を、本質を実際に否定する、その判断を止めたところで坐ることで、逆に現世の価値観を超えて生きる道を得ることができました。それ自身は底の浅いものでしかなかつたのですが、この転換の形には考えるべき問題があると思います。

大乘仏教は本来、衆生救済のために現世に現れるという思想があります。浄土教で説く往相、還相の回向である。極楽に往生した者が、再び現世に還ってきて、一切の衆生を教化して共に仏道に向かわせることを還相の回

向という。この思想は仏教の眼目です。しかしこれは今日の思想としては力と輝きを失っているように思われます。西洋思想の中ではロゴス主義を批判しそれをのり超えようとする思想が生みだされていきました。東洋思想の基盤の上に、現世に出ていく一つの形があります。これを深めなければなりません。

南海 ずいぶん難しいです。しかし、イラク戦争を含む今日の新自由主義が、西洋近代資本主義の結末であり、それをのりこえることが歴史の問題であることは、わかるものにはわかるというとき、すべてを一からではなく、東洋にあることを今日の課題の中で再生していこうということは、当然なことです。

北原 そうです。しかし、私の問いは、その体得は伝統的に仏教が行ってきたような寺での修行によらねばならないのか、この生活の場でこそなされねばならないのではないか、ということにも関わっています。そしてそれがまた私の疑問でもあり、自らこの場で求道すべきことなのです。いくつかの疑問をまとめておきたいと思います。

一、大乘仏教は自性(本質)を否定する。本質は言葉による分節の内容そのものである。言葉は協働の場での協働の必要において生まれる。言葉の体系が文化の構造である。ならば、大乘仏教は協働と言葉を否定するの。人間にとって協働はやはり人間の本質ではないか。仏教の否定の水準と協働労働と言葉の肯

定の水準とは異なるのか。それを貫く立場は可能なのか。

二、大乘仏教は本質から自由な存在のあり方を空とらえる。これは人間自身にもあてはまる。事実人間はかならず死ぬ。個別の人間は一時の形であり、空である。だがそのことは、人間にどんな生き方を提起するの。働くことを否定せずかつ人間の本質を認めない人間の生き方は可能か。

三、大乘仏教は空の場ですべてのものが生々し縁起しているという。ものは「いき」ており縁起している。空の場で「こと」としてつかむことが縁起である。生々する「こと」の立ち現れる形が「とき」である。だが、自己が空ならば一体誰が「こと」としてつかむのか。その主体は何か。

北原 ここでは問題を大きくとらえただけです。これだけでは何も言ったことにはならないのです。が、問題は大きくとらえそのなかで集中して具体的に実践的に考えることが大切でないでしょうか。

私は単純にはいえませんが、二十一世紀初頭の新自由主義経済の崩壊の本質は、人間中心主義がもはや限界であるということだと考えています。人間が万物の霊長としてこの世界のものをも自由にする、これが五百年の資本主義の時代でした。それを支えたのがキリスト教の人間中心主義でした。しかし地球環境は有限です。こ

の有限性に規定されて、カネのためにはいくらでも地球を破壊する資本主義は行き詰まりました。

このとき、生きとし生けるものとの共生だけではなく、山川草木悉有仏性として、山川にも仏性をみる観点は重要であり、これをふたたび取りあげることはこれくらいよいよ意味があると考えています。

人間が自らの決断として人間主義を脱却する。これが非人間主義です。これからの重要な問題です。

転換の経験

京都北白川

南海 『個人史』によれば、北原さんは一九七二年の秋に京都の北白川でそれまで考えてきた人生の方向を転換するというを経験されました。引用された当時の日記を読みかえさせてもらいました。今この対話のなかでその意味を考えなければならぬことがあるように思われます。

北原 私は一九七二年秋の経験について『個人史』の「京都という場」の「転換」に書きました。先に述べたように、大学闘争のなかでいろいろ考えました。しかし、そこから実際に行動し大学を離れ地域に入って教員なるには、この秋の転換が必要でした。ただ、その経験は個人の歴史にとっては大きなことであっても、ゆきづまった

青年が風土のなかでいろいろ考えているうちに、もう少し広いところから考え生きていけばいいとわかったというところで、それ自体はありふれたことです。

南海 都会での生活に疲れて故郷に帰り鎮守の森の木漏れ日のなかに坐っていると、忘れていたことに出会ったように思い、もう一度やり直そうとする気持ちが起こってくる。そしてはじめて自分が苦しんでいることを解きほぐすために行動する。

このような経験は、多かれ少なかれ誰にもあることです。しかし、誰にでもあるということは、いいかえればそれだけ普遍性があるということであり、しかも経験それ自体は大変個別で具体的なものであるだけに、実際の経験をふり返り、その構造と意味を考えることは大切です。

道元は、悟りは悟れば当たり前のことである、とっています。北原さんの経験がそのような悟りにつながることであるのかどうかはわかりません。ある心的転換であり、それがその後の人生の方向を決めたのであるなら、そしてそれが、下宿していた土地と切り離せないのなら、その構造を詳しく検証することは、根のある思想を追求する立場からも意味あることではないでしょうか。

北原 わかりました。すこし思い起こすことにしましょう。あれは大学院修士課程二年の時でした。『個人史』に書きましたが、当時私は数学にゆきづまっていました。

数年前に『個人史』をまとめたときに

一九七一年の夏が終わり、秋の気配がして、感覚が鋭くなったころ、転換を経験する。それは京都北白川の風土の中で起こった。

九月二十八日の夕方小一時間、北白川の天神宮を歩いた。そのころは、考えごとに疲れるといつも北白川の下宿の辺りを歩いていた。如意ヶ岳、俗にいう大文字山、つまり八月十六日の送り火で左大文字が浮かぶ山の麓に下宿はあった。古い地元の農家の二階だった。とにかく当時誰とも一日ものをいわないような日が続いていた。

まったく数学にゆきづまっていた。夏中、自分で考えた方向でいろいろやってみたが何の結果も得られなかった。心だけは集中していたが、壁にぶつかっていた。すべてが袋小路であった。

一方、大学を去るものは去って新しい人生を追求し始めていた。私の高校時代からの友人が当時大学を離れて空港反対運動のために淡路島に移り住んでいた。自分が遅れてしまったという意識もまた切実であった。それは今から思えば小知識人の焦りにすぎないものであったが、若い私には十分深刻であった。

と書きました。社会的な意味づけをする前の段階とか、ゆきづまりそのものというか、そんな状態でした。そしてそれは単に数学にゆきづまったということではなく、

大学というものに価値をおいて上昇してきたそれまでの人生の方向にゆきづまった、というべきことでした。

下宿をしていた京都北白川は、白川女の里として知られているように、昔は京都市中からは離れた集落でした。そこに北白川天神宮があります。

台風一過の秋の日にここに散歩に出かけ、岡の上の石に腰をかけじっとしていました。不思議な時間でした。ほっとすると、すべてがそこにあるままに、輝いていました。風のそよぎ、木漏れ日のたわむれ。日だまりに座っていました。

自分というものがなく、ただ風光だけがあるような感じでした。これは不思議な経験でした。しかし神秘的ということではなく、なにか、知っているが忘れていた懐かしい場に戻ったようでありました。

我にかえって下宿に戻り書いたのが当時の日記です。

この風光の中には、深い、透き通った、人間的な、何かがあるのだ。その何かに、限りない懐かしさを感じるのだ。これは一体何なのだろうか。道元の世界は、或いはその何かに答えているのかも知れない。けれど、今はそれはわからない。確かに識ることのできる時まで、わからぬ事は、わからぬ事として、保持してゆかねばならない。

一切の神秘主義的傾向を、退けねばならない。自分の内の何が、そもそも懐かしさを感じているのだ

ろうか。何が懐かしいのであろうか。何が何に感じているのか。こう書いている、私は誰だ。

その感動は下宿でいつそう深まったように思いました。夕刻もう一度日記を書きました。

今、やっと自分が出発点にまで、戻ってきたのだという事を、しみじみ感じる。そしてこの出発点というのは、自分が幼い日に、無意識に、無邪気に、とり入れた、何かあるものと直接に繋がっているのだという気がする。

その何かあるもの。それを言葉にすることは難しい。何処からとり入れたのか、と言われれば、幼い日の回りにいた人々、そして自然の環境によって作り出されるある精神の状態としか言えない。その精神の状態を何処に定着させていったのか、と言われれば、心と答えるより他はない。

とにかくそれは懐かしいのだ。日のあたる古い建物の作る静かな空間に、心を動かすのも、ずっとたどつてゆけば、また六才の頃にまでたどりつける。あのころ西の方を裏とする、宇治川に面したところに住んでいた。けれども六才以前に具体的な思い出出てこない。あの以前のところこそ、けれど、より本質的であるように思える。

今はただ、この出発点にまで戻ってきた自分を注

意深く、静かに、確固としたものとし、そして、ゆっくり、出てゆかなければならない。世俗のあらゆる事にも、或いは学問でさえ、その深い歩みとは、直接の関係はないのだ。自己を、そのように鍛えねばならない。その直接の関係ないものを、けれども一つ一つ試練として、またその深い歩みをより確かなものとするための機会として、誠実に受入れてゆこう。

自分を縛っていたそれまでの価値観から解き放たれたようでした。すべてをはじめから考えていこうとする土台にぶちあたったような気持ちでした。自分の計らいではなかったようです。

今はこの経験さえがかりなく懐かしい。この世に生を受けて、このようなときを経験し、そして今まで生きてきました。そのことにどれだけの意味があるのかわかりません。しかし、とにかくそれは確かにこの時代の人生であつたのです。

風土と風光

北原 私は、この時から数年さかのぼった大学初年の時代に、相国寺僧堂に参禅していました。結論からいえば、本当のところ自分を捨てることのできないというか、なりきることができなというか、そういう人間でした。禅定に入り、ある境涯が開きかけると、それを見ている自

己が現れてしまい、その向こうに入ることができませんでした。いつもそうです。いつまでたっても見ている自己が捨てきれない人間でした。

ところがこのときは、本当にゆきづまっていた、自己が現れる余裕もないままに、一人坐っていたように思います。

南海 なるほど。ゆきづまりいろんな計らいをする余裕もなく、ただ坐っていた。そうすると、「父母未生以前の本来の面目」が現れた、ということですか。

北原 いや、そこまでは言えません。私の経験は風土に関わっています。本当に普遍的な経験とはいえません。

南海 どんな経験も具体的なことを通してしかありません。そのときに感じた懐かしさを風土への懐かしきとして、その当時はとらえられました。が、それは風土と共に生きるのが人間の普遍的なあり方だからそうなるのであって、やはりそれは普遍的な経験であるように思います。

北原 しかしさらに言えば、私は、仏法を求めていたのではなかった。あのときから数年前に京都相国寺で禅の修行をしていたのは確かですが、天神宮での経験は仏道修行のなかでのことではなかった。

南海 それはわかります。しかし、仏法を求める心の働きも煎じ詰めれば仏道修行の妨げです。求めることなく座っていたというほうが、本来のあり方ではありません

か。このとき経験されたことは人間にとって共通で普遍的であり、それをどのようなこととしてとらえるか、その違いが文化の違いではないでしょうか。

北原 そうかも知れませんが、そんなに深い経験ではなかった。それにやはりそれは宗教的経験とまでいえることではなかった。そこに帰依すべき人格を感じることはなかった。ただ、たしかに言葉による分節はそのとき断たれていた。そのような心の働き、心がくる働きは止まっていた。ですから大乘仏教の言葉で言えば、空のなかで木々が輝いていたということはいえるかも知れません。ただそれでも、存在の不安はその後現れました。なくなったではありません。ですからその点からいっても、すっかり解決したというようなことではなかったのです。

今ふり返って次のようにはいえると思います。

一、人間が本当にゆきづまったとき、言葉で考えることができなくなりきったとき、そこに、懐かしい風光が立ち現れる。同じ景色が、忘れていたことになつたように新しく輝く風光として立ち現れる。その懐かしさは、人間が本来そこに立っていたところを感じるが故のことである。

二、それはつねに具体的な形で現れる。風土の個性によっている。しかしまた、そのようなことがありうるということ自体は普遍的である。経験そのもの

には共通性がある。そういう力が一人一人の人間には備わっている。

三、そこに現れたことが、空と縁起の経験であるかも知れない。しかしこの経験にも深さはある。私の経験は深いことではなかった。存在の不安はなくならなかった。ただどこかで仏教の教える世界につながっており、このときそれを垣間見た。

風土は客観的な存在です。風光はその風土を懐かしむそれぞれの人間にたちあらわれるものです。この場ままで立ちかえったとき、人間はもういちど生きることができるとは思いません。

南海 北原さんが転換を経験した京都北白川のような場が、日本列島では古くから生活のなかに位置づけられていました。鎮守の森や社叢と言われる森の中に空いた木が生えていない空間、ここに人が来て坐り、心を放つてしまい、自然とそれを越えた「もの」を感じ、心のうち荒ぶる魂を鎮める。そこから新たに再生していく。

そういう神の寄りしるを拝む祭壇とでもいうべき場があり、人の心のより所となった。琉球の御嶽（うたき）、日本列島に見られる社叢（鎮守の森）や磐座（いわくら）など、どれも人が人間として生きるうえでえの土台となる場であった。

この地に生きてきたものにとって、一人の人間として自分の本源ともいえるべきところに帰るために、これらの

場は大切な役割を果たしてきた。それは一人のことではなく、このような経験は人々の深い無意識の記憶として蓄えられ、口承のもの語りが記憶のよみがえりをたすけた。この日本列島弧の人間はこうして困難を越えてきたのではないかと。そうでなければ、現在の私たちは存在していないはずである。

ですから北原さんの経験は、まさに北白川の鎮守の森のなかの、石段を登ったところに開けた空間でのことであり、その意味で、伝統的で深い人間の底に通じることであったのだと思います。

生死を包む

南海 実際には、その後北原さんは数学を離れ社会的な運動の方に時間を割かれました。それはやはりこの経験が契機ですか。

北原 確かに。これについても、数年前に『個人史』をまとめたときに次のように書きました。

秋の転換を経て、大晦日に宇治に帰った。晦日の夜半、一人宇治の街を歩いた。県神社から平等院の裏門前を通り、宇治川に出る。川の中の島を通って対岸にわたる。宇治神社の下に、御輿を清めるところだろうか、川べりに朱の門が立っている。そこに立って空を見る。月は雲にかかり、天下を照らしてい

た。さらに宇治上神社の方から小さい頃に住んでいた辺りまで足をのびした。家々は、年越しのたつきの音がしていた。月に照らされひとり歩いた。このとき何か決意した。私は自分自身の内部に普遍的な人間の真実をめざす立場がうち立ったように思われた。

自分には自分で考えていたような数学の才はなかった。このことをおさえて、そのうえで自分が直面した問題を正面にすえて生き、そして考えていこう。数学には途が見いだせなかったが、壁に当たってはじめて転換を経験し、新しい道へ踏み出していくことができた。

そういうことでした。

南海 何かここには、個人的に懐かしいことに触れることが、人間を新しい世の中の活動に向かわせる契機があることを示しています。これは大切なことで、よく考えてみたいところです。

北原 人間は本来、なんらかの形で世の変転の中で人のために生きたいという心を持っていると思います。人間は協働のなかで形成されてきたものだからです。私は人間のこのような心信じます。本来の自分に触れることで、その心が解放されるのではないのでしょうか。

最近はおもっぱら自己実現であり自分を見つけよう、です。しかし人間は本来は、無私のうちに歴史のなかでなんらかの役割を果たしたいと考えるものです。懐かしい

自己に出会い、本来の人間性が顕れるということかも知れません。

ただ私は、その後の自分の人生に欺瞞のあったことも知っています。それは、数学ではできなかったことを他の分野でしようという野心です。今はそれがわかります。あの経験が深くなかったという理由に、自分のこの欺瞞を今は指摘できるからです。ですから、私はその後携わった労働運動や党派活動も甘さがあった。本当に命を切り刻むように闘いぬいたか。考えぬいたか。一歩引いて先を見通して向きを変えること、あまりに多かつたのではないのか。このようにも思います。この総体を人生の教訓として提示したい。そこから何かの教訓をくみ出せればと思う。

南海 追いつめられ、自分が保てなくなり、そのときはじめて立ち現れる風光に触れてきた、それは事実であり、そのかぎりでは切実に生きてきた。何か懐かしいものに触れ自分を取りもどし、世の中へ向かう。その構造は今ふたたび大変に重要です。

それとともに、もう一つ聴きたいことがあります。それは人間の生死についてです。日本は自殺大国で、年間三万人も自殺する国は他にありません。

北原 死とは何か、あのときたち顕れたあの輝く世界に還ることだ。それは間違いありません。それはおそらく厳然とした事実であり、喜怒哀楽を超えた真実です。自

己が壁にあたつてゆきづまったとき、そのまま坐つていればそこにその世界が顕れる。

南海 唐突ですが、人間は自死すべきではありません。それはなぜか。

北原 人間は死ぬものです。このことが実は人間が人間よりも大きい世界に立脚していることを示しています。死ぬものであるが故にこそ、自己より大きい世界に自己もまたあるということです。

生あり死あり、それがこの世界です。それがこの世界の輝きです。人間は大きく輝くこともあれば、小さく輝くこともあれば、ひっそりと輝くこともある。それぞれ世界の輝きを担っている。それぞれが十全に生き、そのことで世界の輝きを担っている。それが人間であり、さらに言えば命なのです。命をそれぞれの分において担うことが人間であり、生きることそのものです。

南海 死ぬものであるからこそ、自死すべきではないのですね。

北原 日本に自死が多いのは、新自由主義の階級格差のもとで人間としての尊厳が奪われ、かつ、それを自分で背負い込むからです。問題を自分で背負い、死に追いやられていくからです。私は死ぬきでがんばれば何とかかなる、などというつもりはありません。何とかかなるといふのは嘘です。

ただ、追い詰められたときに、方策を考えることもしば

し措いて、じつと世界を見てほしい、とはいいたい。追い詰められていることはそんなに大きなことではない。そう思える世界が開けるかも知れません。生きていること自体がいとおしくなるかも知れません。

生が有限であり死するものであるがゆえに、生死の起こる場、その原理は生死より大きく、生死を包んでいると思います。だからこそ、死んではならないのです。また殺してはならないのです。

もちろんさまざまな要因が重なつて心がそれにたえきれず、脳が楽としての死を求めるようになることはあり得ることであり、自死はそのゆえに起こるのですが、それが心の疲れであればあるだけ、治癒もまた可能です。病を治す根本は内因です。

南海 今はほんとうに難しい時代です。この時代に人間はどのように生きるのか。生の意味と生きる根拠を与えていた大きな物語がすべて解体しつくした後、なおかつ生きる根拠は何であるのか。対話が進むほどに、さらに考えていかなければならない課題が増えていくように思われます。これからも対話が続けることが大切だと思います。

資本と階級

搾取の現実

北原 この数年、日本の貧困問題はもう小手先の政策ではいかようにもならない段階に至っています。

NPO自立生活サポートセンター「もやい」事務局長で反貧困ネットワーク事務局長をつとめる湯浅誠さんが著書『反貧困』（岩波書店、二〇〇八年）や二〇〇八年五月二十日の講演『溜めのない若者と貧困』（主催：全国進路指導研究会）などで、現在の貧困について語るのを読みました。彼のいうことは次のようなことです。

(一) 貧困は構造的なものである。若い人たちは、三つのセーフティネット（労働のセーフティネット、社会保険のセーフティネット、公的扶助のセーフティネット）から落ちて行く構造になっている。そこで貧困が生産される。

(二) 自己責任論は本質を見誤る。テレビで貧困の問題が報じられていると、頑張って働いているのに生活ができない人を見て、可哀相だと同情しながら、隣で一緒にテレビを見ているフリーターの息子に対しては、「お前は自己責任」と切り捨てる父親がいるが、そのようなとらえ方は本質を見誤る。

(三) 五重の排除。「五重の排除」というのは、「教育課程」

「企業福祉」「家族福祉」「公的福祉」「自分自身」の排除であると述べ、この中でとくに問題なのは「自分自身」の排除である。

(四) 社会の溜め。人間は溜めに包まれており、大きい人も小さい人もいるが、お金の溜め、親や親戚など人間関係の溜め、自分に自信がある精神的な溜め。昔は貧乏でも家族や地域があった。いまは経済的に頼れる人間関係や精神的な溜めのレベルが違う。全体としてそういうものが失われるのが貧困である。

(五) 溜めを増やしていく社会をつくる。溜めを増やす長いプロセスをどうやって増やすか。生活保護、信頼できる友人、空間、温かく見守っていくことが必要。一般論でただケツを叩くだけでは、自立から結果的に遠ざける。溜めのない人に溜めを増やしていく社会を作っていくことが大事。

このような事実にもとづきながらそれを冷静に分析する仕事若し人のなかから出てきたことを喜びます。

これを読めばわかるように、また事実、かつてはあった隣所の助け合いや職場での働き人の連帯などが急速に失われています。その結果、いちど貧困に陥った若者はなかなかはい上がれない。日本は今、欧米よりも厳しい冷え冷えとした階級社会になっています。

南海 小林多喜二の小説『蟹工船』が再び読まれています。いま貧困に苦しむ若者がいちばん共感するのが『蟹

工船』です。なかなかはい上がれない状況に置かれた多くの若者が、『蟹工船』に閉じこめられた労働者に我が身を引き写すからです。

北原 この共感こそまさに階級的共感です。その共感の根拠こそ階級です。であるから資本の側も危機感をもっています。

南海 二〇〇八年六月八日午後〇時半ごろ、東京都千代田区外神田のJR秋葉原駅近くの秋葉原電気街の交差点で、歩行者天国に男が赤信号を無視してトラックで突っ込み十七人を殺傷する事件が起きました。

容疑者の二十五歳の男は直前まで派遣会社の日研総業からトヨタ傘下の関東自動車工業東富士工場に派遣されていた。そして五月二六日に突然クビを通告されていたのです。突然の解雇は生活が不安な派遣労働者にとって絶望を強いるものです。関東自動車工業はこのようにいつでも解雇できる労働力を酷使することで莫大な利益を上げ、優良企業となっていました。

まさにこの事件は新自由主義の過酷な搾取体制が生み出したものです。

北原 その直後に幼女連続殺害事件の宮崎勤が処刑されました。秋葉原の大量無差別殺傷事件に対してこのような行動には厳罰で臨むという国家権力の意思表示でした。南海 かつて日本社会には「罪を憎んで人を憎まず」という言葉が生きていました。犯罪は許さないとそれが起

こつてきた大元を見なければならぬ、事件の被害者とともに、事件を起こしたのも世のあり方の犠牲者だ、だから更正の機会を与えなければならない、という考え方はです。

これは湯浅さんのいう「溜め」です。今の日本にはこの溜めが失われています。

北原 問題の根本が今日の酷い搾取体制にあることは資本の側も知っています。それが明らかになることを恐れるがゆえに、即刻宮崎勤を処刑した。このことは彼らの方にも余裕がなくなったということです。それだけ階級対立は実際厳しくなったということです。歴史的にこの段階を通ることは必要ですが、しかし厳しい時代となることはまちがいない。

南海 若者は、この厳しさのなかで、にもかかわらずいろいろと新しい生き方を呈示してやっています。若者自身がいろいろな回路で社会に抗議するということが続いています。あるいは、抗議をこえて自分たちの生き様と同じ立場のものが協働して生み出していきこうというところまで来ています。これは素晴らしい。そのような新しい生き様が各地各所に生まれてきてほしい。

北原 先の湯浅誠さんも東大大学院法学政治学研究所博士課程単位取得退学し、大学院在学中の一九九五年よりホームレス支援などに関わった人で、父親の死をきっかけに大学院を辞め、貧困者支援活動に専念しています。こ

のように「何々として」を離れたところで新しい知のあり方を実際に生み出していく若者の出現は、嬉しいことです。時代の厳しさが新しい生き方を生み出す。

同時にこのような運動は、歴史をどこかで引き受け継承し、新しい世を生み出していくことと結びつかなければ、何も解決はしないこととなります。その意味で、さまざまの老壮青の結びつきが生まれることを願っています。南海 いま老といわれましたが、老人の問題も同じことです。後期高齢者医療制度は老人差別の制度です。多田富雄さんが二〇〇八年六月十日から、朝日新聞に書いています。多田さんは七十四歳、もと東大の免疫学者であるが七年前に脳梗塞に倒れ、以来後遺症と闘いながら左手でパソコンを打ち、自身の経験にもとづく発言を続けられます。その前半の方から関連する主張を抜き書きます。

第一回：昭和の日本には社会の中心となる健全な中流が育っていました。日本はこの健全な中流に支えられていたのです。それが過剰な競争と能率主義、成果主義、市場原理主義で「格差」が広がり、もはや中流はろくに発言ができなくなった。健康な社会ではなくなりました。

一昨年四月から施行されたりハビリの日数制限、そして今年始まった後期高齢者医療制度など、市場原理主義にもとづく残酷な「棄民法」としかいいよう

がありません。

第三回：私は朝日新聞に、「リハビリ中止は死の宣告」という一文を投書し、窮状を訴えました。投書は白紙撤回の署名運動に発展し、二ヵ月間に何と四十八万人の署名が集まりました。

私は車いすで厚生労働省に署名を・届けました。厚生労働省はそれを握りつぶし、〇七年の再改定では、かえって締め付けを強化しました。

こうして障害者、高齢の患者の診療制限が露骨になりました。その延長上に今年四月からの後期高齢者医療制度があるのです。

七十五歳以上の老人を従来の公的医療保険制度から切り離し、個別的に保険料を徴収する。負担は増え、払えない者からは保険証を取り上げる。しかも診療報酬の制限で、患者が新しい痛気を併発しても治療ができなくなるかもしれませぬ。残酷な「うば捨て医療制度」です。

第五回：それが小泉政権下で、さらに拍車がかかり、「自助努力」や「適正化」の名の下に、人間社会のきずなを断ち切ってきました。

：

そこに「格差社会」のゆがみが重なり、收拾不可能な社会問題化したのが日本の現状だと思えます。

衝動的に人をあやめる若者のニュースが相次いでいます。命を大事にすることを知らないと、自暴自棄になって、破滅的行動に歯止めがかからなくなる。命を軽視して物質本位に走った大人の責任です。

このあたりで病根に気づき、政策を転換しないと、この国は本当に危ない、と私は思っています。

これを読めばいかにいまの日本社会が老人を切り捨てる非人間的な社会であるかがわかります。

北原 後期高齢者医療制度はわれわれいわゆる団塊の世代をねらい撃ちするものです。団塊の世代が七十歳前後になったとき医療費が大きくふくらむであろうことはまちがいありません。その問題を社会全体で乗り越えていこうとするのではなく、老人を差別し切り捨てることで経済的負担を軽減しようとしています。

若者の貧困問題、老人の問題にあわせて、さらに研修生という名の外国人労働者の使い捨て問題も過酷です。このように日本資本主義はアメリカ資本主義と並んでとりわけどう猛であり、金儲けのためにはいかなる非人間的なこともするのです。

このような問題に共通することは、それが資本主義そのものの現段階であるということです。私は、二〇〇七年八月三十一日に『天賦人權』の「自民党大敗の本質」の中で次のように書きました。

新自由主義とは何か。それは剥き出しの資本主義である。弱肉強食・拝金主義の市場主義、大域主義という名の地球規模での収奪体制、これである。

産業革命とともに近代資本主義は登場した。それはまさに過酷な収奪と搾取であった。社会主義運動は必然的に燃えあがり、紆余曲折を経て、ついにロシア革命にいたる。人類史上最初の社会主義権力が樹立された。これに対して資本の側は、ケインズ主義といわれる修正資本主義を導入、資本の行動を規制し、一定の富の配分を国家の手で行い、人民の反抗が社会主義に向かいロシア革命が広がることを、おさえようとした。第二次大戦の後のいわゆる戦後復興もまた、基本的にはケインズ主義の範囲であった。

ところがいわゆる社会主義が行き詰まった八〇年代中期以降、資本主義はケインズ主義を投げ捨て、本来の資本の論理ですべてを押し進めようとした。サッチャー主義でありレーガン主義である。レーガンの時代アメリカはIMFなどを通して中南米の収奪を強化した。そして社会主義陣営が崩壊した九〇年以降、国際資本は何の遠慮もなく行動した。それが新自由主義である。

日本では中曽根首相の戦後体制の見直し、転換の宣言であった。バブルの崩壊を機に資本の側は剥き出しの体制を要求、小泉改革はそれに応えるもの

であった。それが規制緩和という名の新自由主義である。規制とは資本の横暴を規制することであったが、これを投げ捨てた。

伝統的な農林漁業を破壊し収奪する。それは単に産業としての農林漁業の破壊ではなく、土地と風土に根ざした生活の破壊であり、人間が生きる意味の破壊である。

貧富の格差の絶望的なまでの広がりである。現代資本主義は、都市に下層貧民を産業予備軍として蓄えておかなければ、利潤を上げることができない。富める少数者はますます富み、貧しい多数者はますます貧しくなる。

新自由主義は剥き出しの資本主義であるがゆえに、根本的な矛盾をかかえている。人民の貧困の拡大であり購買力の低下、過剰生産と恐慌、である。アメリカのサブプライム問題にはじまる景気後退はまさに新たな恐慌ではないか。

まさにこのような事態が進んでいます。帝国アメリカからの独立を果たし、このような腐敗し墮落したばかりの経済体制から脱却し、足を地につけ長い時間をかけてアジアの一小国としての節度ある世のあり方を生み出していくのか、あるいは帝国アメリカとともに没落するのか、これが根本の問題です。

当面の政治課題の真の争点は帝国アメリカからの独立をめざすのか否か、そのための準備を目的意識的にはじめるのか否か、です。新自由主義的世界観、価値観、生活様式、すべてにわたる問題です。

南海 確かに問題はそうに深いです。不況で仕事がない、中小企業は苦しい。確かにそうです。しかしその仕事は自動車産業や資源浪費産業につながるものであれば、仕事が再度増えることはありません。日本の産業を支えてきた中小の町工場にとってこれは難しい問題です。

国家が産業構造の転換の青写真をえがき、それにそって企業の再編、労働者の再編成を、中小企業や労働者への打撃を回避しつつ、指導すればいいのです。しかし今の日本政府にその力も気概もありません。

北原 問題を少しまとめてみます。

一、労働者は、労働力を資本に売ることによって生産過程に入る。生産過程で受けとる賃金は、労働者が生産した価値よりもはるかに低い。こうして資本は増大し、労働者は貧困化する。

二、資本主義は技術を制御することができない。このゆえに周期的な恐慌に襲われる。そのときの調整弁として、必要なら解雇し生産過程からも排除できる労働力を必要とする。

三、その自由を保障するのが新自由主義であった。そのゆえに新自由主義は貧富の差を極限まで押し進め

たが、その故にこそ購買力を失い、まさに資本の運動法則として崩落した。

四、このとき資本はさらなる労働者の犠牲のうえに、ここから脱出しようとする。帝国アメリカの没落過程でおこる労働者への収奪は、資本主義的搾取そのものである。

五、このような過程のくりかえしを終わらせるのは資本主義の止揚しかない。歴史はこの問題を現実過程の問題として提起している。反貧困の運動は、内実として資本主義的な生産関係を乗りこえるものをもつとき、新しい歴史をきり拓く。

階級の復権

北原 先ほども言われたように、いま『蟹工船』が多くの若者に共感をもって読まれています。『蟹工船』への共感こそまさに階級的共感です。その共感を起こさせる根拠、それが階級です。階級という概念はソ連や社会主義陣営が崩壊して以降、まじめに取りあげられることはありませんでした。しかし私は、いまこそ階級概念を復興させなければならぬし、この時代の厳しさのなかでこの概念を鍛えていかなければならぬと考えています。

南海 階級、階級闘争、これらの言葉が雑誌や書籍から消えて久しいような気がします。

北原 実際そうです。しかしそれは人びとが階級という言葉で考えることを恐れたものによって消されたのであり、社会主義や共産主義への攻撃と同じものです。そのものが誰でありどのような構造のもので階級という言葉が消されてきたのか、それはまた別によく考えるべき問題ですが、そのような思想的攻撃に、まずおおよけに発言する多くの人がうち負けてしまい階級概念を放棄、人びともこれを失ったのです。

南海 それは逆にいえば今なお階級概念は有効であるということの意味しませんか。誰が恐れているのか。

北原 実際の問題ははるかに複雑ですが、まとめて言えば、新自由主義という資本制度によって人間を自由に搾取し莫大な利益を得てきたもの達です。彼らが階級概念の広がりをもつとも恐れています。使いたいときだけ使い、不況なれば真つ先にクビを切る。資本にとってこんなに使い勝手のよい労働力はありません。

南海 彼らは階級という概念をつかんで人びとが団結することを恐れているのですね。いま不安定な職にしか就けない若者が『蟹工船』に共感する。それはまさに同じ階級に属するという事実が生み出す共感なのです。同じ存在、同じ立場が共感を生み出す。そのことを若者がつかんだとき、形態は違っても「同じ立場、同じ階級」に属するものとの連帯が生まれます。それを恐れたのです。北原 かつて小泉首相は「郵政改革」だけを掲げて選挙

に勝ちました。当時小泉を支持したのは現状の変革を願う若者でした。このときもし階級という考え方が若者のなかに受け容れられていれば、このようなことは起こらなかったかも知れません。

当時、小泉改革で最も切り捨てられる層が小泉を支持したという批判が幾人かの識者によつなされました。しかしその多くの言論は若者の焦がれるような現状打破の気持ちをはわかってはいなかったし、また、若者が階級意識をもつことを妨げてきたものこそ、偽善的な左派や市民派の識者だったのです。

新自由主義がこれほど露骨になる前、一九七〇～八〇年代、一部のいわゆる先進資本主義国は、広範なアジア・アフリカへの新植民地主義支配を土台に、国内では修正資本主義、ケインズ主義をおこない、福祉国家などのような政策をもとに一国内階級融和政策を推し進めました。その結果、左派政党も改良主義に陥り、一国内の利益配分を少しでも自分たちに有利にしようとする方向に向かいました。

南海 七〇年代から八〇年代のそのような政策は六八年の青年学生の大反乱に対する融和政策でもあったのですか。

北原 その側面もあったと思います。基本的には社会主義陣営への対抗策でした。その方向を転換したのが、アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相でした。かれらは、自由主義経済を掲げ、ケインズ主義か

らの決別を宣言、今日の新自由主義につながる露骨な資本主義を進めたのです。

ソ連や中国の状況からもはや社会主義が脅威でないとの読みがあり、事実その後社会主義陣営は崩壊、その後なだれを打ったようにいずれの国々も新自由主義を取り入れます。

こうして、階級融和は放棄され、それとともに階級概念が現実の土台を再び獲得してきたのです。しかし社会科学者や政治学者など既成の知識階層の人間にはもはやこの概念を再び生かす力はないように思われます。

南海 現実の方がはるかに先を行っているのですね。しかしでは一体「階級」とは何か。それを再定義しなければなりません。

北原 かつてどのように定義されていたのか。『岩波小辞典 哲学』(粟田賢三、古在由重編、一九五八年第一版)では次のようになっていた。

階級〔英 class、独 Klasse〕歴史的に規定された社会的生産の制度のなかで占める地位の点で、生陸手段に対する関係の点で、労働の社会的組織における役割の点で、従ってその自由にしうる社会的富の分け前をうけとる方法とその分け前の大きさの点で、他から区別される人々の大きな集団、

社会経済の一定の制度のなかで占める地位が相違するおかげで、その一方が他方の労働をわがものと

することができるといふ、そういう人々の集団（レーニン）

をいう。経済的に支配的な階級は政治的にも支配階級となり、また精神的にもその影響力をひろげる圧倒的な諸手段を支配している。階級性とは、階級社会のあらゆる人間の政治的行動や精神的活動がすべてその属する階級の刻印をおびていること、そしてこれが職業その他から生じるあらゆる相違よりも根本的意義をもっていることである。マルクスは、ある階級に属する諸個人が客観的に共通の利益をもちながらも、まだこの連帯にめざめず、階級的に団結しない段階にある階級を、ヘーゲル用語にならって、**即自的階級**（Klasse an sich）とよび、自覚をもって団結するにいたった階級を**対自的階級**（Klasse für sich）とよんでいる。

金持ちと貧乏人、人を使うものと人に使われるもの、ここに厳然とした本質的な違いがある、そういう思想です。もちろん、最終的に誰が支配者かといえば、国際的な金融資本やアメリカの産軍複合体などいろいろと具体的な分析しなければならぬ。また、そのなかで国民国家はどのような役割を果たしているのかという問題も重要な問題である。一方、いわゆる知識層はどのようなのか、一般の管理者はどのようなのか、農業、個人商業などはどのようなのか、などいろいろあります。

しかしそれが重要なものではありません。階級思想が広がることをおし止めたものほどそのような質問を出すのです。しかしそれは本質的なことではありません。貧困にあえぐ労働者が「階級」という考え方をするのかどうかなのです。われわれ新自由主義の抑圧のもとにある階級は、まさに資産のない階級です。これは言葉の真の意味で**無産階級**です。

南海 無産階級ですか。プロレタリアということですね。でも無産階級の方がよくわかります。

先の小辞典の定義では自覚するものと自覚しないものを区別しています。確かに認識の最初の段階では次のようになることが多いです。自らの置かれた状況は自分の責任であると考えたり、運が悪いと考えたりし、上に入り込んで解決しようとする。あるいは同じ立場のものを蹴落として自分がい上がろうとする。これらはすべて自己にこもって客観視できない階級です。

それに対して経験を経て理論を身につけることで、自己の境遇は自分の責任ではなく社会的に作られたものであると知り、同じ立場のものが力をあわせて乗り越えていこうとする、この段階になった階級を**自己を自覚し**、こえる階級。このようにいいますね。雨宮処凛さんが「ブレカリアートという言葉を知って自分は解放された」という意味のことをいっていますが、これもまた同じことをいっていると思います。

自分をこえる階級は国境を越えます。新自由主義は自由
に国境を越えます。同じ新自由主義のもとで苦しむもの
も、国境を越えてつながらなければなりません。

北原 国境を越えるということについて一つ考えるべき
ことがあります。それは日本と中国や日本と韓国の間
にある問題です。中国では小泉首相の靖国神社参拝など日
本政治に何か軍国主義の復活に向けた動きがあると、す
ぐに反日デモなどが起こります。それ自体は当然なので
すが、それに対して日本の側でも反中国の世論が広が
ります。江沢民が中国共産党総書記の時代におこなわれた
歴史教育は「日本民族は中国民族に残虐なことをした」と
いう民族主義にもとづくものでした。その教育で育った
世代がいま社会の中心にいる。

一方、四川大地震での救援活動で日本人を見なおした
り、また日本漫画の深い浸透などがあり、中国では日本
をどのように見るか、大きな分岐が存在します。それは
日本側でも同様であり、資本主義中国が覇権をうち立て
ていこうとすることに對する恐怖心を背景にする中国脅
威論やその裏返しに中国の貧困や環境破壊をことさら取
りあげる論と、日中戦争の教訓から中国との友好を求め
る論がともに存在しています。しかしそれらは、中国民
族と日本民族の問題として考えているという基本的な共
通点があります。

ここで私は、日中間の問題は階級の問題であって民族

の問題ではないといいたいです。毛沢東の時代にはこ
の原則が打ち立っていた。日本軍国主義は日中国人民の共
通の敵という考え方で貫かれていました。問題なのは軍
国主義の復活をめざす日本の保守層であって、人民は相
互に信頼しうる。日中戦争での日本軍の残虐行為は、軍
国主義の戦争が生み出したものであり、戦争がいかに人
間を変えるかという問題であって、民族固有の特質では
ない。日中の人民は協同して日本軍国主義の復活と闘わ
なければならぬ。これがかつての中国共産党の立場で
あり、私はこの考え方を支持します。

南海 北原さんの訪中記『十六年目の中国』にそのこと
を書かれています。ただそれは、現在の中国支配層への
批判になりますね。

北原 そうです。中国共産党は完全に資本主義の利権集
団になっています。中国人民の批判は本来この腐敗した
政権に向かわなければ、現代中国の問題を解決するこ
とはできません。もちろんそれには一定の歴史的条件が必
要で、いまはまだこの政権から利益を受けるものの力が
強く、政権への反抗は散発しておさえこまれています。

さて、先ほどの「プレカリアート」です。人間はそのと
き自分の手元にある言葉で闘います。「プレカリアート」
は「プロレタリアート」を模して作られた言葉です。こ
の言葉がどれだけの奥いきと裏付けをもつかは未知です。
ただ、人はそれまで見えていなかった抑圧する相手が見

えたとき、心がそれだけ解放され闘うのです。

日本の人民や中国の人民が、自分たちを抑圧する相手が世界的な新自由主義につながる現代資本主義とその権力であることを見出すとき、新たな連帯が生まれます。そのときは来ます。時間ばかりです。現代は実に困難な時代です。しかしまた、希望も失われていない時代です。

技術と制御

南海 先日、日本の北海道洞爺湖で、いわゆるサミット、G8が開催されました。G8は国際的な金融危機、石油価格高騰の危機、農業と食糧の危機、地球環境の危機の4つの大きな問題をかかえていました。

今回のサミットを取りまく状況は、これまでのものは根本的に異なっていました。もともとサミットは七〇年代のオイル危機を受けはじめたものです。資本主義諸国側が市場主義を共通原理として掲げつつ、石油などの資源を消費する側としていかに安く得るかということが實際上の目的でした。また通貨安定のためにプラザ合意がなされたものサミットの場でした。

ところが今回、石油価格を引き上げているのは市場そのものです。荒れ狂う市場に直面して、どのような協調の施策がとれるのかが問われていました。だが、過剰な警備に守られて形だけの議論に終始し、結局何も取り決

めることもできず、現実の諸問題の活路を見出すことはできませんでした。

その後、アメリカのバブルが崩壊することで、石油価格が今度は暴落しました。すべて、バクチ経済に狂奔する金融資本が原因であり、これを統制することがもはや資本主義にはできないのではないか、これが問題でした。

この二十年間、国際金融資本はデリバティブ取引などの金融操作によって、一見繁栄しているかのように見えました。結局それはまさに砂上の楼閣であったことが、アメリカのサブプライムローンの破綻によって明らかになりました。結果、行き場を失った投資資金が石油や穀物市場に流れ込み、原料、食糧の高騰を招いたのです。そして今度は資金の引き上げです。二〇〇八年年末には石油価格も暴落しました。半年の内に価格が暴騰し暴落すること自体が、市場制度の破綻を示しています。

帝国アメリカは過剰な消費を行うことで見かけの繁栄を演出してきましたが、それは人為的な地球の温暖化をもたらし、圧倒的多数の世界の貧困層を生存の危機に追いやっていきます。過剰生産と搾取の強化による購買力の低下、その結果としての周期的な恐慌、このマルクスの言葉通りの事態が進んでいます。

そのうえで、一体環境問題の本質は何なのか。

北原 四つの危機をあげられましたが、これらは並列的なものではありません。過剰なエネルギー消費と地球の

破壊という資本主義そのものがもたらす環境危機、そして弱肉強食の拝金主義がもたらす人間性と社会の危機、これがより本質的で基本的な問題です。今日の環境問題は、産業革命以来の問題であり、人間と自然の関係に関する問題の噴出ととらえることができます。

私は人間と現代技術をまとめたことがあります。少し書きなおして引用します。

技術発展の爆発としての産業革命 人間にとって火は根本的なエネルギーであり、言葉は本質的な方法である。人間は、火を使い、協同して働き自然からめぐみを受け、言葉を獲得し人間となった。言葉を使い経験をもとめ、掘り下げ、伝え、智慧を磨いてきた。言葉を持つことによつてはじめて人間は「考える」生命となった。

協同し道具を用いて働き、自然から糧を得る。これは言葉によつてはじめて可能である。道具が配置された生産構造が技術である。技術の発展は、一つの到達点として産業革命に至った。産業革命を考え方として準備したものは何か。それが、ニュートン力学とデカルトの近代的世界観である。

かつて人間は、自然界から恵みを受けるといふ段階から、世界を耕し実を成らせるといふ段階へ転化した。それが新石器革命であった。世界を改変してそこから糧を得ることのはじまりであった。その一つの到達点が産

業革命である。産業革命によつてその規模は巨大化した。世界を改変するために、自然の法則を対象化して認識し、具体的現実に適応する、これを最後まで進めたのが産業革命なのである。

その思想と理論を準備したものが本質的にニュートンであり、デカルトであった。18世紀の自然科学の成立は、デカルトの二元論をその根拠とした。ヨーロッパ近代は世界を物質世界と精神世界に分離したうえで、その物質面の探究に専念した。18世紀に成立した自然科学は、時間と空間を物質が存在し運動する枠組みとしてあらかじめ前提した。これは、言葉によつて人間が自然を対象化して認識した時以来育ててきた世界認識の型であり、ニュートン力学はこの人間の世界を認識する仕方、集大成であり、その極限であった。いわゆる「主観—客観」といふ認識上の図式は言葉によつて人間である人間の認識にとつて必然の帰結である。近代資本主義文明はこの必然性に根拠をもっている。

しかし同時にそれは生命を物質に還元し、人間を個別の人間に切り離れた。人間をばらばらにすることは、近代資本主義が人間の働くということそのものを富の源泉として搾取するうえで、必要でありまた十分なものの方であった。

原子力と高度情報技術 産業革命を土台とする自然認識技術の発展によって、ニュートン力学では説明できない現象が次々と発見された。一八八一年マイケルソンは光の媒質と考えられていたエーテルを検出しようとして失敗した。彼の干渉計は産業革命以降の技術なくして不可能だった。この失敗は逆に光速度不変の原理の発見へと繋がり、その思想的掘り下げのなから相対性理論が生まれた。量子力学もまた同様に技術の発展なしには不可能だった。

相対性理論と量子力学は、現象の時間・空間的かつ因果的記述に対する制約を暴露し、時空概念の絶対性を奪い取った。ニュートン力学が生み出した近代の生産技術は、逆にニュートン力学を乗り越える事実の存在を人間に示した。それまでの「*problematique*(問への枠組み)」が事実によって転換を求められたのだ。

ニュートンの時間と空間を前提にする世界観の超越的枠組みは、相対性理論と量子力学においてとりはらわれ、その世界観は「発展する物質」としてのこの世界自体の認識を一步一步深めることを可能にした。相対性理論と量子力学は、時間・空間が物質存在と運動の前提ではなく、逆に物質が「運動しつつ存在する」ことが、そこに時間・空間の「ある」ことである。このことを明らかにした。

この思想と理論によって獲得されたものこそ、原子工

ネルギーであり、今日のいわゆる高度情報化技術である。半導体技術や超伝導技術の前進、コンピュータと通信の劇的な普遍化の土台には、量子力学が基本思想と理論として存在している。これぬきにはいかなる先端技術も不可能であった。電子や光子を一個づつスクリーンに向けて放つ技術は、量子世界の波動性と粒子性という二重性の具体的応用であり、中性子の回折干渉の応用や原子を一個づつならべる技術など、すべて量子力学が基礎理論となっている。二一世紀になつて実際に応用されはじめた、一〇億分の一メートルの世界の技術、いわゆる「ナノ技術」もまた量子力学ぬきにはありえない。

相対性理論と量子力学によって人間は原子力エネルギーという現代の火を手にし、高度情報化技術を獲得した。これは本質的には、かつて人をして人間とした、火の使用と言葉を生み出した有節音の獲得に匹敵する、根本的意義を有している。

資本主義は技術を制御できない 相対性理論と量子論、それに裏づけられた原子エネルギーと情報技術、それは近代合理主義がその理論的展開の果てに見出し生み出したその対立物だということである。この近代合理主義の根底には、人間を世界から隔て自然を対象化するという本性がある。その本性が産業革命を生みだし、産業革命の技術がもたらした新しい認識が、産業革命の土台にあ

る近代合理主義と矛盾する現象を人間に伝えた。

近代の合理主義は生命を物質に還元することで大きな結果を生みだした。物質への還元はまた、生物を個別の切り離されたものとして考えることを前提にしていた。しかし、その結果として遺伝子を物質的に扱い分析したとき、生物を個別の切り離されたものとする考え方は正反対の事実が人間に示された。遺伝子の普遍性と環境を前提にした遺伝子展開の構造、である。遺伝子の普遍性は、いのちが一つにつながっていることを示している。遺伝子は単独で存在するのではない。一つのいのちを前提にして、発現する機能を変化させてきたことが判つてきた。

近代とは近代資本主義の時代に他ならず、近代合理主義を実際に具体化するのには資本主義の生産関係である。資本主義は資本の論理で動く。資本の論理とは弱肉強食の拝金主義そのものである。

近代合理主義は科学を生みだした技術を発展させたが、その結果、近代思想の枠を超える事実が発見された。相対性理論と量子力学と遺伝子学である。資本主義はこれを制御することができない。近代の枠のなかにある資本主義にはこれを制御する意思も能力もない。

資本主義は本質的に放縦であり「神の手」としての市場を仮定しなければ調和を考えることもできない。しかし「神の手」等はない。自らを規制し律することができ

ない資本に、近代を越えた技術の制御はできない。

ここに環境問題の本質があります。

南海 なるほど。環境問題の本質は今日の技術がその本性において資本主義を越えたものであり、資本主義にはこれを制御する力がない、というところにあるのですね。大きく問題をとらえてこれをおさえる。G8のようなところで何の解決も得られないことはわかりました。

しかし、実際に環境問題を少しでも動かしていくには、闘いが必要です。資本が自らその放縦性をかえることなど有り得ないからです。また、われわれの日常から資本の論理で作られた社会意識を変えていくことも必要です。

北原 好き勝手に環境を破壊する資本から、誰が環境を保全していくのか。資本の搾取される階級、働き人の階級しかありません。近代的価値観によって低く見られ疎外され使い捨てられてきた階級、彼らこそ、失うものが何も無いがゆえに、この近代に対立する技術を使いこなすことができるのです。

共産と共生

北原 階級という問題は普遍性の問題です。新自由主義が全世界規模の搾取体制となったことで、そのもとに置かれた人びともまた同じ相手のもとにあるもの同士としての連帯が必然となります。階級という普遍性の場で、固

有性はどのように生きるのか。あるいは生かしうるのか、この回路を人類はまだ見出してはいません。

私は『構造日本語定義集』のまえがきにあたる『定義集へ』のなかで次のように書きました。

わたしたちは、人間は言葉の違いをこえてわかりあえると思っている。しかしそれは、固有の言葉で深く耕すときはじめて可能であると考える。そのときはじめて人は、協同して働き輝きながら向上する生命としての本質において同じであるという普遍性のうえに立てると考えている。

人間は、それぞれの人間の生きた深さにおいてしか、互いにわかりあうことはできない。言葉の問題ではない。人間がわかりあえるためには、生きて固有の言葉を拓き耕し、人間の土台に至らなければならない。それができなければ、転換期を超える新しい段階の人間は生まれない。

固有の言葉に根をもつ普遍性が開示される場で、はじめとともにわかりあえ、ともに生きることができ。近代資本主義が力をもって押しつける「普遍性」は普遍でない。真の普遍は、固有性が共存するところ(場)としてのみ実現される。それは、西洋近代を構成する部分をもひとつの固有性とする、新しい段階の普遍性である。しかし、それは、土台としての言葉が深く耕されなければ不可能である。

これは甘い考え方です。固有性を徹底して耕せば新しい普遍性を獲得でき人と人はわかりあえる、ということとは、それだけでは正しくありません。階級が同じであるという根拠のもと、同じ階級の場合において、言葉が耕されるならば、わかりあうことは可能です。言葉を耕すのは現実の闘いであり、困難な道なのです。

階級という問題を前にして、はじめて固有と普遍という問題もまた現実の問題となります。新自由主義という資本主義を前にしてはじめて現実の問題としてこの問題に出会っています。「固有性が共存するところ(場)」は資本主義のもとにおける被支配階級そのものである。

これだけではまったく抽象的な一般論に過ぎないので、しかしこの方向性はまちがいない。人類は一步一步この方向に歩んでいきます。

南海 確かにそれはよくわかります。言われたように、現実にはこの問題の解決は机上ではまったく不可能で、実際の人民の闘いと連帯のなかなでしかありえません。

北原 その通りです。同時にまた、知の段階の問題としてこれを取りあげないかぎり二十世紀と同じ過ちをくりかえすと思うのです。現実の社会主義は人間や民族の固有性と対立した。もちろんそれは誤りというよりは人類がはじめて出会った社会主義革命という現実の歴史課題のなかでの試行錯誤の問題なのですが。

われわれは二十世紀に大きな試行錯誤をしました。血

の教訓でした。時代は再び社会主義を求めています。

レーニンは「革命は普遍的なことだが、その方法と形式は固有なものである」ということ言っています。これは二十世紀の革命のなかでは、実現しなかったことです。まったく未知な開かれた問題として、われわれの前に横たわっています。

南海 このようなさまざまな問題を解決していくわれわれの方法の一つとして、今日の情報技術をわれわれが生かすということがあるのではないだろうか。

北原 確かに、情報技術の進展はまったく驚くばかりです。これについては私はかつて次のように書きました。

人類は、社会を構成するすべての人間がすべての情報を共有しつつ、自ら主体的に判断し社会の主人公として生きることができると可能性を、獲得している。これはまた、世界の各民族が、その民族性を最大限に発揮しつつ、人類として、国家の枠組みをこえて協同しうる可能性を意味している。有節音の技術（つまり言葉の獲得）が人間の思想を可能にしたように、高度情報化技術は人間の新しい知恵、すなわち個の尊重と協同して生きることの完全な両立の知恵を可能にしている。これはまさに階級の廃絶された共産主義である。生産力の発展は不可避な客観的過程であった。その不可避の過程が現在到達している段階の、本質的な意義は共産主義が可能性として

存在しているところにある。

今日、この可能性は、現実性に転化していない。人間はまだ、今日の技術のもつ可能性の実現、つまり人類の人間としての解放の実現を果していない。(一) 相対性理論と量子力学という根本的に新しい世界認識によって獲得された現代技術は、人間の真の解放の可能性の技術的土台を準備した。(二) この技術的発展によって生まれた可能性というものは、本質的なものであるがゆえに必ず現実性に転化するし、またしなければならぬ。(三) しかしにもかかわらず、現実にはこの可能性はまだ可能性のままであり、現実のものとはなっていない。

ということはいまも変わりません。可能性を現実性に転化するためには、人間の目的意識的な闘いが必要です。これは長い時間を要することでしょう。

このような技術がわれわれの前に開けるとは思いもよらなかったことです。しかし事実として人間はこのような情報技術を手に入れました。ロシア革命の時代にも情報技術の革命的進展がありました。それが鉄道網の広がりです。いままだ新たな革命の土台としての情報技術があります。しかし、鉄道の場合もそうであったように、生かすも殺すもそれを担う人間の問題です。

人間はこのようにしていくつもいくつもの歴史的転換点を闘ってきました。その時々によく多くの命が失われ、そ

して歴史が進みました。人間とはそのようなものなのかも知れませんが。いったい人間がこの世に現れた意味がどこにあるのかと考えますがそれはよくわかりません。ただ人間が、歴史的にしなければならぬことに命を費やし、そして歴史を進めてきたこと、人間とはそのようにして生を営むものであることは確かです。

このような見通しの根拠として『準備的思索』において私は次のように書きました。

資本主義は「市場主義」や「大域主義」という普遍性の名の下に、働いた人からさちを奪い資本を増殖させる。さちを奪い資本を増殖させる場所、それが市場である。市場のやりとりを善とする世界に対して、さちを奪われる側の世界は、今日もさちを受けとるいとなみ自体に価値を見いだす。理学もまたさちを受けとるいとなみこそが人間のいとなみであり、人生の意味であると考える。その営みそのものが世の前に出なければならぬし、今日の世界のあり方は必ずそのように転換されると考える。

その根拠は何か。

一、人が協同してはたらくことを協働という。協働の場は言葉によって成立する。協働の場はことわりのひらかれる場である。協働の場を成立させる言葉、それは同時にその人をして人として認める言葉である。それを固有の言葉という。こ

とわりは必ず固有の言葉でひらかれる。それ以外にない。固有の言葉を粗末にするものにとわりがひらかれることはない。固有の言葉で切実に生き、はたらかなければ、ことわりはひらかれない。人がこのように生きるとは言葉の違いを越えた真理である。

二、働くものは、いのちのはたらきとして耕し、ものの世界から「さち（幸）」を直接に受けとる。

この形式はさまざまでも、この本質は人間に共通のものである。世界は、一方で国家に分断され、一方でさちを奪う側と奪われる側に二分されている。だが、直接にさちを受けとる場で働くものは、はたらくものとして同じ経験をしているがゆえに、必ずわかりあえる。協働の場には共感と連帯がある。これは国家の力による世界の二分を乗り越える。国家の力を背景に資本を操り資本の増殖をめざすものは、固有の言葉が生まれ育つこの場とついに切り離されている。直接にさちを受けとるもののみが、結局はこの世界の意味である。

三、このゆえに「さち」が人の「幸い」である世は実現可能である。ことわりあいの場に届くまでに耕された言葉と言葉が、ことわりのひらかれる場において出会うとき、それは可能である。

ことわりがひらかれるとき、そこで輝くことを聞きそして語らえ。考えてなったことを智慧としてことばに留めよ。それはかならず、時空を越えて、固有の言葉で切実に生きるものにつたわり、また他の言葉で生きるものにつたわる。そして、はたらくものをひとつに結びつける。言葉の智慧はこの世界を転換し、いのちの輝きを取り戻す。こうして固有性が輝いて共存する世となることは可能である。

この転換の可能性はどのように現実になるのか。手だてはあるのか。その方法はまだ現実のものではありません。しかし人間は必ず方法を見出し団結し次の時代をきり拓くでしょう。これは一般論ではありますが、やはり今までの通りだと考えています。

南海 上田等さんへの追悼文で次のように書かれました。

人間は、有限のときを精一杯に生きて、そのことにおいて、ころざしを次代に伝えていかねばならないものです。上田さんはそれを全うされました。

まったくそのように思います。われわれもまた「有限のときを精一杯に生きて、そのことにおいて、ころざしを次代に伝え」たいものです。

北原 言葉としての共産主義が、その思想を必要とする人々に受けいられるまでには、まだまだ多くの困難が

あります。派遣先によって解雇され行き場を失う人こそ、まさに無産階級であり、無産階級としての共通性もっています。この共通性に基づいて団結する、団結し交渉する、団結を拓げる、このような芽が出てきつつあります。言葉は後からでいいのです。一つ一つの取り組みが実は共産主義の内実を準備するものであるのです。その実践が先行することが重要です。実践が事実として広くおこなわれるとき、その現実を共産主義への運動としてつかまれるのです。

根をもつこと

根こぎと根づき

南海 新しい共産主義は、共産主義という言葉そのものは実は重要なことではありません。なすべきことをしていったとき、そのときしていることが共産主義だとおさえ、それを新たな連帯の根拠としなければならぬと気が来ます。これまでの議論からそれはまちがいがいい。しかしそれを声高にいう必要はないと思います。

一方、人間はやはり根をもたねばなりません。北原さんが京都北白川で経験されたように、人間は行きづまったとき杜の中のぼっかり空いた空間に坐り、自己を解きはなち、その地で生きてきた人間の無意識の古い記憶に

つながりながら、新たな人生を生き直してゆく。一方で、そのような場を奪われた現代の悲惨について、その場の人々に思いをよせつつ、悲惨の根拠を考え、そして行動する。その悲惨は枚挙に暇がない。ものに思いをよせ、そのものごとを考え、そしてそのものに即して生きる。

これが根をもつことではないでしょうか。そのような人生を奪われること、これが〈根こぎ〉である。そのような場とそこにおける人生を闘いとり、これが〈根こぎ〉である。ものごとの根もとにありていく、これが根源的ということである。

思いをよせ考える言葉は自らが人間である言葉、青空学園という固有の言葉によらなければありえません。人間が夢を見るときは言葉でなくして、どうしてもものごとの底にまでありていくことができようかということです。

北原 私は、教育運動から世の変革の運動に入り、組織の専従もしました。しかし、結局それに破れました。このような闘いは、いずれにせよ敗北の連続で、自分がやってきたことがいったんは敗れたこと自体は、それでいいのです。

しかしそれで終わることはできません。労働運動であれ、世の変革の闘いであれ、人間はそのとき手元にある言葉で闘わなければならない。そして闘い終われば総括し、言葉を豊かにしなければならぬ。それが経験と言葉に蓄え次代に引き継ぐということだ。そのように考え

ます。

闘いはさまざまに場を移し持続しなければなりません。革命は永続です。それはしかし単に続けられればいいということではない。人間の営みとして蓄積されるためには、言葉が豊かになることを伴わなければならない。量の蓄積が質に転化するとはよく言われることですが、経験の蓄積は言葉です。その言葉は、人民の経験とならなければならない。そのためには闘いの過程での言葉が根のあるものでなければならない。

一言でいえば、変革の思想は根をもたねばならない、ということ。では、それはいかにして可能か。それはまさに、人間としてというところに立ちかえって、言葉を意識し磨きながら考えるしかないということです。

最近、この問題に関係する鶴見俊輔さんの発言に出会いました。

『無根のナシヨナリズムを超えて 竹内好を再考する』
(鶴見俊輔 加々美光行／日本評論社二〇〇七／七)のなかで鶴見俊輔さんが次のようにいっておられます。

日本の知識人は欧米の学術をそのまま直訳して、日本語のように見えますが、実はヨーロッパ語です。それをよくわかっていないのです。そういうものとして操作しているので、根がないのです。しかし、日本語そのものは二千年の長さをもっています。万葉集から風土記から来ている大変なものなの

です。万葉集を読んで聞いてわかるのですから。イギリス語、フランス語より深い歴史をもっています。今もそれは生きているのです。この古い言語の意味に、さらにくっついている魑魅魍魎も全部引き受けて、何とか交換する場をつくりたい、それが竹内好の言語の理想です。なぜ、それを生かさないのでしょか。そこに日本の知識人が行っている平和運動とか、反戦運動がすぐにあがってしまう理由がある、という感じがします。そこが面白くありません。

鶴見さんが問題にしていることは、青空学園をはじめ私の最初の問題意識と同じです。私は党派活動の実践において破れました。しかし、いろんな失敗や試行錯誤は不可避です。私はマルクス主義そのものにおいて敗れたとは考えていません。マルクス主義や社会主義・共産主義は、新自由主義が峠を下りはじめた現代こそ、より切実な思想であると考えています。それをどのように現代において受け継ぐのかはまったく開かれた問題であるのですが。それだけに実践の総括の一つとして「日本の知識人が行っている平和運動とか、反戦運動がすぐにあがってしまう理由がある」は痛切なものであるのです。

根のある変革思想を、という私の呼びかけは、この経験に根拠をもっています。日常語を洗練し、抽象し、意味を再定義し、思想の言葉として育てていく、これをしなければ日本語とその世界に次の時代はないということ

す。ところが近代日本の学術の言葉は、このように根のある言葉をとりあげて掘りさげ意味を広げ、また深めるという方向にはなされませんでした。それにしても、鶴見さんにこれだけのことを言われてなぜ大学人は黙っているのか。自分の言葉が日本語だというのなら反論し、議論すべきです。それがなされないところにこそ、問題があるといわなければなりません。

南海 本当に自分で考えぬいた人は、身についた自分の言葉で語ります。またそのことによって、言葉が豊かになり、言葉に人間の営みが蓄えられ、次の人が考える土台となります。

しかし、日本語世界の学術の場では、こなれない西洋語の漢語訳で語っていたり、それもせず音のまま使っていて、世の言葉とは断絶しています。家人が社会人入試で大学院に入り、心理学を研究していますが、教官の多くは自分の言葉ではしゃべっていないし、翻訳語やカタカナ学術語の意味を問うても、自分の言葉で答えられる教官はほんの少ししかいないといっていました。

北原 人間としての深まりと言葉としての掘り下げが一体となったときに、はじめて一人一人の営みが、深く共有されます。それが人間の言葉というものだ。その確信を裏付けていたのは、自分自身の言葉に対する直感というか、信念でした。それは次の命題にまとめられます。

一、人間は言葉によって人間である。言葉は労働と

もに古い。この二つは、互いに作用しあって発展してきた。それぞれの人間にはその人が人間であるゆえんの言葉がある。その言葉は抽象的な言葉一般ではない。必ずそれぞれの具体的な言葉である。その言葉をその人間の「固有の言葉」という。人間として考えるとき、それは固有の言葉で考えるほかない。

二、言葉は言葉である以上、世界をどのような基本構造としてつかむのかを定める言葉を持っている。それが構造語である。構造語は世界把握の言葉であると同時に、その言葉の仕組みも決定づける。構造語は発展する。しかし取り替えはできない。個々の言葉は、言葉の体系のなかに位置をもち、その相互の位置関係によって、内に考え外に伝えることが実現される。

三、人間の営みは言葉に意味を加え、こうして言葉は耕される。人間の新しい営みは言葉の新しい意味をきり拓く。言葉は個別の人間の営みを協働する人間の営みに普遍化する。この相互の構造が、一人一人の人間の生の場である。この相互関係のあり方自体が文化である。

「固有の言葉」という考え方自体が近代の産物です。それはわかっています。しかしまた近代日本語ではその固有の言葉がまったくなくがしろにされてきたことも事実なのです。このとき、日本語のなから長い時をたえて

きた言葉をもう一度とりだし、ことわりの言葉として生かしていくことが大切だと考えました。

野を拓き田を耕す

北原 日本語科で『構造日本語定義集』をはじめたのも、このよう信念によるものでした。思いばかりが先走って、力が余りにも不足し、内容はまったく乏しいものです。素人談義を超えてはいけません。しかしとにかく、考える土台としての言葉を掘りさげることが前提であるということ、この思いは強いものがありました。

一つは、日本語を「固有の言葉」としてとらえ、その日本語のなかの基本的な言葉である「構造日本語」をもう一度対象化して読みなおすということです。そうすることで、近代日本語が置き去りにした日本語のことで、自己の経験と照らしあわせて、定義しなおしたいと考えました。再定義は日本語の歴史のなかのまさに今の営みです。

結論としていえば、「近代日本語が置き去りにした日本語のことわり」はそれ自体として取りだすものではなく、語る内容をもって語るときにその語りの質としてそのときの言葉のなかに息づいていくものなのです。やってみたいこと自体は貴重な経験でしたが、それ自体を取りだそうとする方向の探求で何かが得られるということはあり

ません。

さらにまた、人間がわかりあえるためには固有の言葉を耕さなければならない、という問題意識もまた、それ自体問い直さなければならないと考えています。固有性を徹底することは本当に人間としての普遍性に至る道なのか。言葉が耕されることは結果であって、言葉のなかで問題が解決することはあり得ないのではないか。

南海 言葉が意識されて語られないかぎり経験が次代に伝わらない、ということはその通りだと思います。言葉を言葉として問題にするのは、言語学者の立場であって、われわれは言葉が生きているのかどうかの問題です。「生きている」の意味は多様であり、それを直感的に言っているのですが、いかえれば言葉が人間の言葉としての働きをしているのか、といえると思います。

いくら今の言葉がだめだと言っても無意味で、一から考えるその営みそのものなかで、実際に言葉を生かしていくしかないと思います。一方また、言葉への問題意識を欠いた思索は確かに底の浅いものになることはわかります。そのことは確かです。

北原 「言葉への意識をしっかりともって人間として考える」場、これが青空学園だと考えています。大学という場を離れ異なるところで生きてきたけれども、やはり人間は何かを考えるし、人間としての根っここのところで、世の中で人間が生きてゆく思想とそれと一体の生きた学

問ということを考えてい、そのように思いました。技術の発展は、電脳空間で個人がそのような場をきり拓くことを可能にしてみました。

南海 私もそれには賛成でした。数学もまた草の根の場で少しでも広げたいと思いました。数学読み物はたくさんあります。また、受験技術の参考書もたくさんあります。しかし、学問としての数学が、大学を離れた場でどれだけ根づいているかと考えれば、それは大変貧しいものです。数学の影ではない、たとえ初歩的でも数学そのものを、数学を職業とはしないものの中に広げたいと思いました。

北原 ここでよく考えなければならないことがあります。この青空学園の初心やはじめの頃の言葉は近代啓蒙主義そのものであり、西欧近代の大学の理念そのものです。その裏付けになっているのが近代的人間を土台とする考え方です。近代日本の大学への批判ではあっても、批判の根拠が西欧啓蒙主義にあるのではないか。

近代啓蒙主義は確かに近代日本では上辺だけで実際には現実のもでなかった。そのために私のように、言語学に引かれながら数学に進むというようなこともありました。現実を観念で超えることはできない。青空学園の初心の内容は私たちに必要でした。

ですが、今は再び近代的人間を問うときです。ですから、青空学園において青空学園の理念そのものも問うと

いう立場から対話をすすめたいのです。青空学園の初心の文章は、それをふまえつつ、新しい段階に至れば書きなおすべきものです。

南海 このように、ある考え方を立ててはまたその根拠を問い、また考えを立ててそして問う。このくりかえし、継続運動、これが生きる場を拓き耕すということです。深く根をはるためには、よく拓きよく耕さなければなりません。

北原 現代の〈根こぎ〉は湯浅さんがいうように、「教育課程」「企業福祉」「家族福祉」「公的福祉」「自分自身」の排除として現れる。根底にあるのはやはり資本の論理、金儲け第一主義である。〈根こぎ〉の結果、世の中の留めがすり減った。お金の「溜め」、親や親戚など人間関係の「溜め」、自分に自信がある精神的な「溜め」がすり減ってしまった。全体としてそういうものが失われるのが貧困である、と彼はいう。

資本の論理は弱肉強食の金儲けです。資本主義はこの世界に対してそれを金儲けの手段とします。金持ちになることがその人間の価値を決める社会、それが資本主義です。資本主義は人間を排除し溜をすり減らす。この世を本当に荒地にしまいました。ふたたび人間はこの荒地地を拓き耕さなければなりません。

本来人間にとって経済はこの世界で生きてゆくための手段であり、金儲けは目的ではありません。資本主義に

対して、「真に平等で万人が人間としての本質を実現していくことのできる新しい社会」に向かって一歩前へ進んだのが、ロシア十月社会主義革命でした。全世界の搾取されているプロレタリアート、抑圧されている民族の未来を確実にきりひらきました。社会主義は経済法則を目的意識的に活用しつつ、人間の本質としての労働自体が人間としての生きがいである世の中を生み出していこうとするものでした。

この社会主義は一定の時期、現実存在した。

南海 そうです。資本主義の勝手気ままな搾取に対して、かつては社会主義がその対抗陣営として存在しました。

北原 その時代は資本主義の側も無茶はできなかった。それがケインズ主義です。修正資本主義です。あるいは福祉社会であり、大きな政府による最低生活の保障であり、教育の機会均等でありました。労働者の団結権を保障し、労働組合を社会の重要な機能として位置づけたのもこの修正資本主義です。

だが二十世紀後半に至り、ロシア革命や中国革命は崩壊したのです。資本主義はしぶとかったのです。資本主義の思想と闘うのに、レーニンの残した資産だけでは、不十分でした。

考えてみればそれは当然です。レーニンがすべてを準備することなどできないのです。社会主義政権の内部からの腐敗や解体と闘うことは、レーニンの時代の課題で

はなかった。したがって、歴史の課題という観点からみれば、たとえレーニンの方法が不十分であったとしても、原則を失わずにレーニンを継承し乗りこえることは可能であったし、またなさねばならぬことであった。だがそれはなさねば、結果として、いわゆる社会主義陣営は崩壊したのです。

国家としてはただキューバのみが残りました。二〇〇八年、世界中で医療費と教育費が無料であるのはキューバだけです。医療制度が崩壊し適切に必要な医療を受けるためには金がなければならず、貧しければ医療からも排除されるアメリカや中国と比べて、キューバの社会主義がいかに優れているか、ということです。キューバが中南米の反帝国主義政権と提携し新しい歴史を作っていくことはまちがいありません。

南海 社会主義陣営が崩壊し、一気にむき出しの資本主義が再登場したのですね。それが新自由主義であり、日本でいえば中曽根内閣の戦後政治の総決算と小泉政権を規制緩和だったのです。しかしながらこれによって、資本主義の根本的な矛盾もまたあからさまになった。

北原 それが二〇〇八年夏の現在です。いまアメリカ帝國主義はいよいよ凋落の過程を歩んでいます。これはまちがいのないところです。アメリカに従属する日本資本主義もまた必ず凋落します。これにつながる右派民族主義もまた歴史の遺物になってゆく。

南海 つくづくと思うのですが、人間は一定の環境のもとに生まれます。そのもとで精一杯生きることが人間である。それは確かです。が、現代世界はかくも悲惨で毎日日人びとは飢え、多くの命が失われる一方で、世界の富はごく少数の人間の内にあり、それを独占することがおやけに認められ、「そのもとで精一杯に生きる」と考えても、やはり、この現実をそのままに、個人が努力するという方向はもはや限界に来ているのではないかと思います。

そのように考えないと、そもそも世界は何のためにあるのか、わからなくなるときがあります。

北原 現実の悲惨は人間に世界を考えさせるためなのか。日本の平安時代末期は気候の不安定な時代で、旱魃、飢饉が続ぎ、貴族制から封建制への革命動乱と政治の混乱、その下で社会の再編と、まさに激動の時代でした。これを背景に鎌倉新仏教が生まれた。しかしもとよりだから平安末の悲惨を肯定することもできません。

今日の悲惨を正面から見つめ、そのもとで人間の生きる根拠を考えまたそのように生きる。このことしかありません。

いま世界では、新自由主義の過酷な搾取に対して、新しい闘いが始まりつつあります。それはこの世界のなかに、それと対抗しそれを廃棄していくような新しい根拠地ともいべきものです。生きるための新しい人間の関

係が生まれつつあります。

南海 日本を見ていてもそれを感じます。「生きさせろ」という叫びから新しい生き様が生まれつつあります。

北原 それはまだまったく萌芽でしかなく、この先資本主義に取り込まれていくのか、あるいはさらに深く横にも広がっていくのか、わかりません。しかし時代が厳しくなればなるほど、これに対抗せざるを得ない人間の結びつきも深まります。

南海 地球は神が作ったものではありません。そのようなキリスト教の世界観は地球を手段にします。地球は地球であり、いのちの輝く場です。また、この世界の他に天国も地獄もありません。原意存在するものとその意味、これがすべてです。私はそのように考えてきました。

社会主義は、キリスト教やイスラム教のような一神教とは決定的に違います。別の世界を仮定しません。この世界のなかで生きて死ぬ、死ねば土に還る。土とはこの世の存在です。

資本主義は方法です。経済もまた方法です。何の方法か。人間が人間として生きるための方法です。人間が人間として生きる、この内容を新自由主義に打ちかつまで高め、それに基づいた人間関係を築いてゆく。このことが進まなければ問題は何も進みません。

資本主義によって荒れ地にかえったこの世をふたたび拓き、豊かに実のなる田に耕していかなければなりません。

それを担うもの

北原 搾取は資本主義の本質であるから、搾取をなくすには資本主義を廃棄するしかない。私はそのように考えます。資本主義が生み出した国際的な金融資本、資本をかき集めそれを投機し濡れ手で粟をつかむように儲け、そのもとで多くの人民が塗炭の苦しみを味わう、これが新自由主義の時代です。このような資本の行動はその本質にもとづくものであり、このような生産における関係は廃絶しなければ問題の解決はない。

南海 その主張は理論問題としてはその通りだと思えます。しかし、現実には資本主義を廃棄しようとする運動はすべて敗れました。社会主義ロシアはすでになく、毛沢東の中国革命も見る影もありません。今も初期のころざしが生きているのはキューバだけです。キューバは人民の生活の最低限度の保障を社会制度として実施する体制をつくってきました。共産主義に向かうということではありませんでした。

北原 資本主義を廃絶するといっても、それは実際にそれに代わる人間の関係が生み出されていかないかぎり不可能です。この点でかつて日本の運動は弱点をもっていました。キューバは政治路線としてどのような内容を掲げるかの問題とは別に、新しい人間のあり方を実際につくり出してきました。これが大切だということです。

人間と世界の金を媒介にしない関係をどのようにつく

り出すのか。それは、むき出しの資本主義のもとでもはや何も失うもののないものにしてはじめて可能なことです。世界の各地域で萌芽として生まれつつある新しい関係をどのように普遍的なものとして広げていくのか。これがいま問題です。

その意味で、最近、貧困に反対する立場のなかに芽生えた立場の違いはよく考えなければなりません。ある人は、丸山真男に代表される既成の知のあり方を批判し、現状をかえるためなら戦争でもよい。戦争によって根底からひっくり返ればよい、ということを主張しました。一方、別の若者は、「貧乏でなにが悪いのか」ということから街のなかで自分たちの生き方を作り出そうとやっています。前者は後者を、それは貧乏を肯定することだ、と批判します。

私は後者を支持します。前者は、カネがすべてという世界観は前提にして、戦争でも起こってこれまで金を取れる立場にいたものの権威が失墜し、カネの流れが変わればよい、と主張しているように見られます。しかし、重要なことはカネは目的ではないということを実示し、新しい生き方を打ち出すことなのです。それを打ち出し実践している後者の運動を支持したい。

南海 アメリカの過剰な消費体質や、金持ちになることが価値そのものという精神、自分たちが世界の中心だと考えそれを疑わない傲慢さ、そして現在のサブプライム

ローン破綻問題の本質がこのようなアメリカ資本主義それ自体の帰結であると考えようとしてもしい鈍感さ。一つの帝国、一つの文明が終焉を迎えるときとはこのようにその中にいるものは気づかないまま事態がよりいっそう抜き差ししないところへ進んでいきます。

帝国アメリカのこのような生活文化は総体的なものであり、資本主義をそのまま肯定したなかで変わっていくとは考えられない。それに対して、国際的な資本の搾取に対抗する運動はまだまだ小さいものです。しかし新しい芽はいくつもある。このような芽はまず南米に生まれたい。アルゼンチンでは数年前、国家財政が破綻。IMF主導の再建過程で人民は本当に生活できなくなった。そのときにいろいろ相互支援のつながりができた。南米には実に多様な試みがありそれらはいずれも資本主義的な関係ではない人間のつながりを生みだしています。

ようやく日本でもこのような新しい文化を内包した運動が生まれてきました。まだまだ各地でこのような運動が生まれ、それがつながり、そして新しい生き方として、思想化されていかなければなりません。時間が必要です。このような新しい関係が資本主義を食い破っていく。

北原 固有性を尊重した協働体、その連合、連合のための普遍性の土台、労働そのものに生きがいを見いだし、必要に応じて受けとる社会。それが育ってきました。

長い人類の歴史のなかで、階級社会から社会主義を経

て共産主義へ至る転換ほど根本的なものではありません。それは新石器革命と対になった根本的な革命です。新石器革命で出現した階級が、新たな段階の革命において廃絶される。このような転換期は、すべての人間に、それぞれの条件のなかで、ものごとを根源的に考え実践することを要求します。

この転換は、これまでの生物期のように、偶然による試行錯誤のなから淘汰され道を見出すという方法でなされたり、階級期のように生産力の発展が歴史発展の人間の意志を越えた原動力であるという方法でなされるのではありません。

人間の自覚した目的意識をもった行動によって新たな人間関係が生み出され、人間が生きる意味をふまえた協働体を土台とする世がつくられる。国家もまたそのなかで役割を終えていく。

われわれは人間の目的意識的な営みを信頼する。この目的意識性は、マルクスによって現実のものとされた。マルクスが到達した段階を引き継ぎ超えていかなければならない。人間は社会的人間として自らを形成したが、その内実は「階級社会的人間」生産関係によって組織される人間であった。ここから出発し、そして、「階級社会的人間」をのりこえなければならぬ。これは言葉によって言葉を超えた人間の新しい協働の世界、資本主義の暴力を制御する智慧をもった新しい人間の関係とそれを可

能にする場を生みだすことと同値である。

『論座』二〇〇八・十 終刊号で若手の思想家である白井聡さんが次のようなことを書いています。

それにしても、いまなぜコミュニズムか、思われる向きもあるだろう。筆者の考えでは理由は二つある。

ひとつには、諸々の修正資本主義的な政治的方向性がごとごとく行き詰まってきたことがあげられる。

：

リベラル・デモクラシーは一個の特殊なイデオロギーに過ぎないことが意識されつつある。このことは、われわれを反資本主義ないし脱資本主義の原理であるコミュニズムにまで遡行することを強いる。

もう一つはコミュニズムの探求それ自体が喜びをもたらすという事実である。…この現実の底を突き破って新しい生のあり方を求めること、それ自体が喜びに満ちた行為である。

：

近代国家と資本に代わる信用のシステムをいかにして構造化できるのかという問い、これもミューズムの問いであり、今日われわれが集団として生まれ変わる可能性、生成の喜びがこの問いに賭けられている。

この通りなのです。ただこの一文はネグリ批判と柄谷批判のみで、自身の問題提起に対する白井さんの展開はほとんどなされていません。私は次のことは共通に確認されねばならないことだと考えています。

新しい歴史の始まり 客観的事実として、人間は、生物としての人から発展し、技術の進歩を土台に生産力を発展させ社会を変革し思想を深め、ついに、マルクス主義を獲得したことによって、世界に対する目的意識性と能动性を最終的に生みだした。人類ははじめて、「客観的歴史」の法則と目的意識的活動を統一した人生を生きることが可能になった。人類史の新しい段階、それを共産主義と言うならば、共産主義を生み出す可能性が準備された。

現代の共産主義思想とその実践、歴史に対する目的意識性、これは近代資本主義のなかからそれを乗りこえるものとして生まれた。『今までの哲学者たちは世界をさまざまに解釈しただけであった。だがそうではなくて、もっとも大切なことは世界を変革することである』（マルクス『フォイエールバッハについてのテーゼ』一八四五年）。このマルクスの言葉が今ほど輝いている時は、実は他にない。この可能性は二十世紀にロシア革命、中国革命として現実性に転化した。しかし、その試みは少なくともいったんは挫折した。しかしその試みが終わったのではない。新自由主義という新しい段階の資本主義は、世界を一つ

の市場としてつなぎ、搾取の場とする。この場は同時に搾取される階級の間である。この場において新たな歴史をつくる人びとが形成される。

人間は言葉によって協働して生きてきた。階級を根拠とする言葉による繋がりを準備しなければならない。歴史が求めていることは可能なことである。新しい歴史は必然です。

一、西洋近代資本主義、とりわけその土台である産業革命は、根本的にギリシア後期のプラトン以来の考え方を最後まで進めることで達成され、その世界への拡大が近代であった。しかし今やそれは地球という有限な世界のなかで限界に至っている。資本の増大を第一にする拡大の運動は、地球の破壊要因となり、これを制御することはできていない。

二、人間と世界の存在の意味は何か。資本のためなのか。そんなことはあり得ない。この世界から「さち」を受けとる労働の喜びこそ、意味の有無を超えた輝きである。西洋の「学」はギリシア時代に労働を奴隷に任せた貴族の「知」として成立した。生きる現実からのからの遊離は、キリストの神の前の真理として「真理」それ自身を自己目的化することによって正当化された。この「労働」と「知」の分裂は形を変えて生き続けている。分裂した知は働く喜びを知らない。

三、働きの場こそ固有の言葉の生まれるところであり、ことわりの世界そのものであり、働くものが固有性に立脚してたがいに分かりあえる土台である。固有性を深く耕し新しい段階の普遍性をめざす。固有性が解放された人間の生き生きとした普遍性は可能である。固有性が互いを認めあつて共存するところ(場)としての普遍性は可能である。

四、可能性は人間の目的意識的実践によつて現実に変化する。それを担うのは新たな「階級」である。世界を覆う新自由主義は新たに階級を形成する。存在としての階級を組織された階級に高める。またそうしなければ虐げられた階級は生きることができない。量的蓄積が質的転化をもたらすことはまちがいない。五、しかしその具体的な方法はまだ明かでない。可能性を現実性に転化するための実践的方途は、開かれた問題のままであり、膨大な努力の蓄積と、現実のちからが不可欠である。前途は明るい。しかし道はまだ見出されていない。

以上です。

南海 一人一人がまず生活と仕事の場でまじめに生きることです。その上でなしうることを積みあげていかねばなりません。

近代において、文化と科学は華々しく展開しました。しかしその一方で、政治と社会の退廃と破産はとどまるこ

とを知りません。いったい何のための文化なのか、何のための科学なのか、政治とは何のためにあるのか。政治や社会がこのように荒廃する文化や科学とは何なのか。

北原 経済は目的ではない。あくまで手段である。何のための手段なのか。人間が一定の生活水準で生きるための手段です。生きてそれがどうなのか、それはここではいえません。一人一人がそれを考えることを保障する土台が経済です。その準備が重要なのです。

経済のために人間性を荒廃させるのは本末転倒なので。資本はその本性から金儲けをたとえ人間を破壊しても追求します。手段が目的になっています。これを止めねばなりません。

日本の問題についていえば、最後は天皇制の問題に行きつくように思います。日本の支配層はぎりぎりまでゆきづまったとき、天皇制の擁護者として振る舞うことで、支配を維持しようとしています。

南海 小泉元首相がそうでした。彼は日本の郵便局などに蓄えられた金融資産を帝国アメリカに売り渡そうとした売国奴です。その彼が靖国神社に公式参拝することで、売国奴としての本質を覆い隠そうとした。日本右翼や民族主義者はこれにすっかりだまされて、国民の資産が国際的な金融資本の手に落ちることを見過ごした。何が民族主義だということですか。

北原 おそらく青空学園日本語科の立場こそが、最も日

本列島弧の固有性に立脚しようということを明確に主張している。これは日本語料が失うもののない階級の立場に立とうとしていることとつながります。失うもののないものこそ最も問題を根源的に考えることができます。

私は多くの失敗をしました。その教訓から私は、世の変革の思想は次の内容をもたねば無力であると考えています。

- 一、言葉の固有性に基礎づけられた人民文化の固有性を失わない。言葉と人民の里、その神を失わない。固有の言葉に内在することわりと向きあい、それを育てあげて磨き、言葉に根ざした論理を育てること。
- 二、固有性の内部に、否定とそこからの創造の契機を育てること。「なる」のは放っておいてなるのではない。耕さねば成らないのである。耕すとは、否定に裏づけられた、再生の営みである。
- 三、最後の分岐点は天皇問題である。保守派は里のことわりの体現者(みこともち)という虚構のもとに天皇を担ぐ。実は里のことわりを篡奪したのが天皇制だ。これに、近代市民主義で立ち向かってでも無力だ。天皇制に奪われた里のことわりを人民の手に！

南海 これはよくわかります。近代市民主義とは、いわゆる戦後民主主義ですね。戦後民主主義は軍国主義時代の天皇制への批判から、愛国主義のみならず「愛里主義」

までも否定した。その結果、古里への愛着をもつ人民を草の根保守の側に追いやった。八〇年代、九〇年代に盛んであった草の根保守主義は、実は戦後民主主義の根なし草の市民主義が、それへの反発として生み出したものだったのです。

青空学園日本語料が準備しようとしてきたことは、天皇制に絡め取られることのない、里のことわりに根ざした変革の思想をうち立てようということですね。

北原 固有性に根ざした抵抗と生活の場を生み出すための基礎作業です。はじめたばかりです。われわれは自らの生きてきた時代の経験から、なしうることをします。そのうえで、新しい世代が新しい時代をつくっていくことを願っています。

理念をもって生きる

世の形をつかむ

時代の課題

北原 これまで続けてきた対話は、昨年二〇〇八年秋に経済危機が始まるよりも前のものでした。今は危機の最中です。歴史は一つ新しい段階になったといえるべきです。それで対話もまたこれを踏まえてすすめたい。現在からどのようにここをこえていくのか、その活路を考え

なければなりません。活路とは経済を再建する活路という意味だけではありません。人間が生きていくうえで経済は必要な条件ですが、経済問題が経済のなかだけでは解けないのです。

この危機は一過性のものであり得ません。有限な地球のうえで生産の拡大を続けるかぎり、このような恐慌状態はむしろ常態化すると考えるべきです。

この経済危機は大きな時代の転換点であると思われる。しかしこの恐慌の内容とそれが画する時代の転換の本質について深められた議論がなされているとは言えません。経済恐慌は一見すると資本主義の弱体化のように見えますが、それ自身は資本主義の枠内の運動であり、恐慌それ自体で資本主義が終焉したりはしません。恐慌はそれまでのやり方のままではそれ以上量的に拡大しえないところで起こります。これまでの恐慌がたどった一つの道筋は、恐慌過程を経て現実には資本の再編成が起こり、独占的な市場支配がいつそう強まり、対外的には競争、国内的には搾取と収奪がさらに進むというものです。南海 青空学園では二〇〇六年の時点で『兆民の遺言』のなかの「混迷と再生」―「混濁の世」で次のように近代をとらえました。

「近代」とは、資本主義経済とその上につた世の中を作っていくとする過渡的な時代である。この時代は、夢や希望によって人々を動かし、引っぱっ

て行く時代であった。この夢は、封建的な身分や生まれ、社会階層で人生を拘束することから人々を解放し、自由な個人を生み出すという、人権、自由、平等の普遍的な理念を内実としているがゆえに、必然性をもって全世界的な流れとなった。近代はこの面において避けがたく、また意義あるものである。

近代化は国民国家の確立という段階を踏み、それによって加速される。近代化はそれを開始したときの世界がどのような時代であるかによって、それぞれに異なる様相を見せる。明治維新による国民国家の確立にはじまり、バブル経済の崩壊（九〇年代初頭の）による近代化過程の終焉に至る過程も、多くの近代化の一つの過程である。

身分制から解放され、努力すれば誰もが出世できる。大学を出ていい会社に就職して、よく働き、仕事を通して社会に貢献する。これが近代日本国の一般的な人々が目指す生き方であった。大学制度もまたこのような構造のなかに組み入れられて機能してきた。

しかし、このような近代化は当然にも限界に到達する。資源は有限であり、環境もまた限界がある。日本国のいわゆるバブルの崩壊もこの限界の存在が引き起こした。中国はまだ限界にまでは来ていない。しかしいずれ何らかの限界に来ることもまたまちがいない。

ない。限界に来る形には個別性がある。しかし、資本主義的近代化がいずれ壁にであうことは必然である。

これまでの近代化の歴史では、一つの社会が限界に達したとき、他国を侵略し経済世界を拡大して当面の限界を取り払うという方法がとられてきた。二十世紀初頭のアメリカは未だにこの立場にたち、イラクを侵略した。イラクの石油をはじめとする世界の資源支配力を高め、巨大な経常赤字に信認が揺らぐドルの現状に対し、軍事力によって石油・ドル本位制を補強し、アメリカ経済の限界をさらに超えようとした。

戦争はつねにこのように経済的理由を根拠に始まる。侵略されたアラブ世界には、アメリカの侵略と戦うだけの思想と方法がまだ生まれていない。しかし人間は、人間の尊厳を奪う侵略者に対しては、そのときにある思想で戦う。今それはイスラム教である。イラク戦争によって新たな世界大戦が開始された。世界戦争によって必ずいくつかの帝国が衰退してきた。アメリカは今日唯一の帝国である。アメリカ帝国主義の古典的な帝国政策は必ずアメリカ帝国主義自身の凋落をもたらす。アメリカ帝国主義は二〇〇六年の秋の現在、イラク、アフガニスタンで泥沼に陥っている。これはすべて、地球という有限世界における資本主義の限界の具体的現象である。

限界にまで達した近代化の果てに、一人一人がどのように生きていくのか、それはまだ見いだされていない。あるいはこれを考える土台がない。この意味で、まさに今は混濁の世である。日々の生活におわれるなかで、ふと立ち止まり、我が来し方を省み行く末を考えると、人は何か胸をかきむしられるような気持ちに襲われるのではないだろうか。高度経済成長を終え一定の物質的達成を実現したとき、実はそれは人間にとってそれほど大切なことではなかったのだということに気づき、しかしではどうすればよいのかわからない、これが今、日本のそして世界の間がおかれているところなのだ。問題はこのように日本社会だけの問題ではない。この意味で普遍的に開かれている。

北原 一九三〇年代の恐慌は第二次世界大戦を引きおこし、その結果、世界市場の再編成によるアメリカの寡占支配と、それに対する社会主義陣営という構図に至りました。今日では、かつてのように戦争による再編成と市場の拡大という方向が可能かといえばそれは難しい。実は戦争による市場の拡大を先取りし、自ら戦争を起こし儲けるというのがブッシュ前アメリカ大統領の政治路線であったわけです。それが破綻し帝国アメリカの弱体化がすすんだ以上、戦争による再編成は難しい。オバマ政権ではそれに代わるものとして環境関連の新しい市場が

意図されています。が、これがどのように進んでいくのか、まだわかりません。

しかし以下のことはいえます。近代資本主義は、それが現実のものとなって以来、生産力と市場の量的な拡大によって内部の質的な問題を乗りこえてきました。生産力の拡大や生産性の向上は個別の単位がそれぞれ独自に追求する。それが市場をおして調整されることによって全体として発展する。自由主義経済そのものです。結局は規模の拡大による問題の解決、これが資本主義の基本戦略でした。近代経済学の自由主義派はこの思想と戦略に理論の形を与えたものでした。

しかしこのような方法は経済活動の場が地球という有限の場であることを想定していません。たとえ想定しても資本主義は拡大する以外にどうすることもできません。ところが今日、事実として生産と市場の拡大はもはや限界に達しているのです。大きくいえば、人類は新石器革命以来、生産力の発展を原動力とし、それに対応しうる生産関係を生み出すことで新たな時代を切りひらき、歩んできました。しかし、生産力の拡大は限界にきています。生産力と生産関係をともに制御しうる新たな智慧が求められています。拡大することなくまわる世のあり方が求められています。それには、能動性と目的意識性を支えるまったく新しい価値観がなければ不可能です。その智慧によって有限の場に人間の至高の意味を顕し、その

もとで世の再編を実現していく。

このように考えている人々は確実に増えている。過渡的に中国やアメリカによる資本主義の再編がはさまったとしても問題は何も変わりません。問題の把握がいかに大きすぎるとしても、「量の拡大でない道を。それを可能にする智慧を」ということは、まさにこれ以外にはありえないことです。これ以外にないことがわかっているときに、その場しのぎの議論に時間を費やすことはできません。われわれの対話も次の段階に進まなければなりません。

南海 最後はわれわれの生き方そのものです。現在を踏まえて、考えうることは考えておきたいです。

北原 われわれも還暦をすでに超えて数年、この先どこまで考える時間があるのかはわかりません。生かされてあるあいだ、考え続け、対話し続け、なし得ることをし、それを記し続ける。そしてその営みのうちに人生を閉じることができればそれでもいいのです。

南海 二〇〇八年秋以降、われわれの考え方は一般的になりつつあります。社会学者の見田宗介氏が、昨年起こったアメリカ発のバブル経済の崩壊という事件を受けて、その意義を社会学の立場から深めています。

最近発行された二〇〇九年四月三〇日付けの「朝日ジャーナル」と銘打った週刊朝日緊急増刊のなかで『現代社会はどこに向かうか―世界の有限という真実』持続する

現在『の生へ』と題した一文の最後の節「世界の無限。世界の有限」で言っています。

「近代」という高度成長期の人間にとって自然は、「無限」の環境容量として現象し、開発と発展のための「征服」の対象であった。「近代」の高度成長の成功の後の局面の人間にとって自然は、「有限」の環境容量として立ち現れ、安定した生存の持続のための「共生」の対象である。

かつて交易と都市と貨幣のシステムという、「近代」に至る文明の始動期に、この新しい社会のシステムは、人びとの生と思考を、共同体という閉域から解き放ち、世界の「無限性」という真実の前に立たせた。カール・ヤスパースが「軸の時代」と名づけたこの文明の始動期の巨大な思想たち、古代ギリシャの哲学とヘブライズムと仏教と中国の諸子百家とは、世界の「無限」という真実への新鮮な畏怖と苦悩と驚きに貫かれながら、新しい時代の思想とシステムを構築してきた。この交易と都市と貨幣のシステムの普遍化である「近代」はその高度成長の極限の形態である〈情報による消費の無限創出〉と世界の一体化自体を通して、球表の新しい閉域性を、人間の生きる世界の有限性を再び露呈してしまう。

かつて「文明」の始動の時に世界の「無限」という真実に戦慄した人間は今、この歴史の高度成長の

成就の時に、もういちど世界の「有限」という真実の前に戦慄する。

宇宙は無限かもしれないけれども、人間が生きることのできる空間も時間も有限である。「軸の時代」の大胆な思考の冒険者たちが、世界の「無限」という真実にたじろぐことなく立ち向かって次の局面の思想とシステムを構築していったことと同じに、今人間はもういちど世界の「有限」という真実にたじろぐことなく立ち向かい、新しい局面を生きる思想とシステムを構築してゆかねばならない。

「近代」の思考の慣性のうちにある人間にとってこの「歴史の終息」は、否定的なもの、魅力に乏しい未来であるように感覚される。けれども幾千年の間、人間が希求し願望した究極の世界のビジョン、「天国」や「極楽」のイメージは、歴史のない世界、永劫に回帰する時間を享受する世界である。天国の歴史はあるが、天国に歴史はない。「天国」や「極楽」という幻想が実現することはない。「天国」や「極楽」という幻想に仮託して人々の無意識が希求してきた、〈持続する現在〉の生の輝きを享受するという世界が実現する。

けれどもこのことは、質実ではあっても健康な生の条件を万人に保障する科学技術の展開と、他者たちや多種の生命だちとの自由な交響を解き放つ社会

の思想とシステムの構築と、なによりも〈存在すること〉の奇跡と輝きを感じる力の解放という、幾層もの困難な現実的な課題の克服をわれわれに要請している。この新しい戦慄と畏怖と苦悩と歓喜に充ちた困難な過渡期の転回を共に生きる経験が「現代」である。

北原 まったくその通りです。見田さんは慣れた手つきで修辭の多い文章を書いています。かんどころは近代資本主義の量的拡大は限界に來ている。拡大ではなく、そのまま存在すること自体を受けとめ、存在に輝きを見出し、互いの存在自体を認めあえる智慧が必要なのだ、という事です。

近代社会はつまり資本主義経済下の社会ですが、この社会はすべて経済の量的な拡大によって再生産されるように制度化されています。量の拡大なしにこの社会が人間の生きる場として再生産されるのか、これはまったく開かれた未解決の問題です。

南海 そのためには智慧が必要だと先ほどはいいましたが、結局は新しい世のあり方を担う人間が生まれなければありえません。今、世界のそれぞれの地で人間としての生存のために、あるいは尊嚴のために、多くの闘いがあります。そこに生まれる人と人のつながり、組織のあり方などはすべて、この開かれた問題への試行錯誤です。

北原 問題を大きな枠組でまとめておきます。

一、地球は有限である。経済活動が無限に拡大しようはずがない。有限の地上で閉じた循環する経済活動の体制とこれを制御する思想、それは開かれた問題である。

二、問題解決の条件として、人間と生命の存在とその輝きそのものに価値を見出し、自足して生活する智慧が生み出され共有されなければならない。

三、人びとが人間として生きるために發揮する力と智慧、そのもとでなされる連帯と協働の試みは、量の拡大によらない新しい人のつながり、社会組織への試行錯誤である。

近代の二重性

南海 恐慌は経済の運動であり、それ自身では世界を転換しません。恐慌期には資本主義の本性がむき出しに現れます。しかしそれによって、資本主義を資本主義として対象化してとらえる意識もまた一般化します。

恐慌は、人間としての生存が資本主義のもとで否定される人々を横につなげる。資本主義のもとでは人間としての存在と尊嚴が奪われたままであるからであり、人として生きるために闘わざるをえないからです。もちろんそのような人々への分断の攻撃もまた厳しくなる。弾圧も酷くなる。それに対抗していくために、思想もまた鍛

えられます。

現代の転換をになう思想を模索するという意味で、『壊れゆく世界と時代の課題』（市野川容孝、小森陽一編、岩波書店、二〇〇九、三、二六）という最近の書は注目すべきです。いくつかのテーマについて基調報告と対話で構成されています。

北原 現代を『壊れゆく世界』ととらえるところに本書の立ち位置が表されています。それは現在が根本から変革されねばならない世界であると見るという立場の表明だからです。その一方で本書のいずれの議論も煮つまってはいません。壊れゆく世界にあつて何を築くか、あるいは壊れゆく世界のなかで人間はどう生きるか、ということまでは討論されず、問題を提起したままになっています。

南海 本書は、昨秋の金融恐慌勃発の前に討論は終えられていたようですが、起こったことは正確に予見しています。第1章「アジア／日本を貫く近代」批判のために」では次の発言にあるように、近代を日本の近代批判ではなく、近代そのものの批判として展開しなければならぬという意見です。

【基調報告】米谷匡史

こういった現状がある一方、中国、韓国、台湾の側にも近代への欲望が渦巻いていて、福沢はむしろアジアの近代化に協力してくれた貢献者だとして肯定

する議論も出てきてしまっています。歴史修正主義は日本だけにとどまらず、アジアで連関しています。

となると、ここで問題なのは日本の近代の批判だけではない。アジアと日本を貫いて作動する近代の力を、アジアと日本の間主体的な相互連関のなかで批判していく方向へ、さらに批判を深めるべきではないか。それが、私の基調報告の趣旨、構えになります。

北原 これはつまるどころ近代の二重性の問題です。近代の二重性とは何か。それはブルジョア革命の二重性です。近代とは、一方で基本的人権と生存権、政治的自由などのいわゆる民主主義の実現を旗印にする。しかし他方またブルジョア革命は資本主義に道を開くものであり、資本の支配の拡大である。資本本来の論理は金儲けのためには手段を選ばないということであり、民主主義とは本質的に相容れない。

この二重性は、どのような過程をたどろうと、近代資本主義が導入されてところでつねに存在するものです。結局はこの問題であり、それが今ほど切実になったときはないのではないか。次の意見も当然です。

国境を越え連鎖する近代の暴力性 姜尚中

いままでの近代日本の差異化を徹底してやってこなかったから、国境の向こう側も見えなかった。それ

をいま、徹底してブレイクスルーしないといけない。それをブレイクスルーしたときに、国境の向こう側もよく見えてくる。そういう作業をやらないと、米谷さんがいったように、アジアを主体化するか、日本を主体化するか、それだけの違いに陥ってしまう。フーコーではないが、起源の待つ暴力性を明らかにしていかないといけない

戦後日本のはじまりについて、玉音放送のことは小森さんが書いていますが、昭和天皇の人間宣言にしても五カ条の御誓文に則るといって、やはり明治維新を絶対的なアドバンテージとしているわけでしょう。なので、そのアドバンテージを崩されると、天皇制の起源手法は成り立たなくなる。

南海 近代の二重性ということはわかります。前の対話の中でも「人間を基礎とする」ということは、フランス革命の理念であり、革命はこの理念のもと人民の力を集めて王制を打倒したのです。しかしその後、ブルジョアジーは労働者や農民を裏切る。」ということを確認しました。**北原** それは近代ブルジョア革命の一般的な道筋です。明治革命も同じことでした。典型は隊長相楽総三に率いられた赤報隊のたどった経過です。赤報隊が掲げた「年貢半減」はまさに「生きさせろ」という声に応えたスローガンだったのです。この旗の下に民百姓は東征する官軍を歓迎した。しかし明治革命の帰趨が決するや、大商人

の意図を受けた岩倉具視らは、赤報隊を偽官軍として除く。これは私の『夜明け前』を読む」に詳しく書いたところでです。

ブルジョア革命の常道として、明治革命でも権力が確立するや、人間原理は圧殺された。日本近代の諸問題は、このとき圧殺された人間原理をいかに再構築するかという問題を基調としているのです。

南海 しかしその上で、二重性が理解されたとしてもそれで相楽総三の恨みが晴れるわけではありません。

北原 そうです。近代日本のなかでどれだけ人が近代の二重性のなかで恨みをもって死んでいったことか。それは二重性の理解とは別の問題です。この恨みは個人的な恨みではありません。死者の恨みは、高いところからの恨み、階級的な恨みです。二重性を打破し、資本の非人間性を撃つ。これが本当の意味での二重性の批判です。あるいは現実の批判です。

この意味で近代の二重性を批判する立場というのは、二重性の一方の立場、人間的権利をうち立てようとする側の立場に立つことです。その立場は、結局は階級的立場としかいいようのないものです。つまり階級性のある現実の闘争しか真の批判はありえない。批判は変革の闘いであるとき、はじめて真の批判です。

ですから、階級性を明確にしないところでの近代批判は、民族の対立問題に陥ったり、あるいは良心的だが現

実を変える力のない批判でしかあり得ないので。

南海 かつて日本が中国を侵略したことに對し、「日本は戦争責任をとらねばならない」という議論が常にあります。日本の中の良心的な人々は「日本は中国に謝罪すべきだ」といい、日本の中の右派の人々は「それは自虐的だ」と批判した。

この議論はいずれの側も問題を民族の対立でとらえ、階級の問題としてとらえていない。そのために近代のもつ二重性に双方が絡め取られている。この点に關してすでに次のような議論をしました。

北原 国境を越えるということについて一つ考えるべきことがあります。それは日本と中国や日本と韓国の間にある問題です。中国では小泉首相の靖国神社参拝など日本政治に何か軍国主義の復活に向けた動きがあると、すぐに反日デモなどが起こります。それ自体は当然なのですが、それに対して日本の側でも反中国の世論が広がります。江沢民が中国共産党総書記の時代におこなわれた歴史教育は「日本民族は中国民族に残酷なことをした」という民族主義にもとづくものでした。その教育で育った世代がいま社会の中心にいる。

一方、四川大地震での救援活動で日本人を見なおしたり、また日本漫画の深い浸透などがあり、中国では日本をどのように見るか、大きな分岐が存在し

ます。それは日本側でも同様であり、資本主義中国が覇権をうち立てていこうとすることに對する恐怖心を背景にする中国脅威論や、その裏返しである中国の貧困や環境破壊をことさら取りあげる論と、日中戦争の教訓から中国との友好を求める論がともに存在しています。しかしそれらは、中国民族と日本民族の問題として考えているという基本的な共通点があります。

ここで私は、日中間の問題は階級の問題であって民族の問題ではないといたいたいです。毛沢東の時代にはこの原則が打ち立っていた。日本軍国主義は日中人民の共通の敵という考え方で貫かれていました。問題なのは軍国主義の復活をめざす日本の保守層であって、人民は相互に信頼しうる。日中戦争での日本軍の残酷行為は、軍国主義の戦争が生みだしたものであり、戦争がいかに人間を変えるかという問題であって、民族固有の特質ではない。日中の人民は協同して日本軍国主義の復活と闘わなければならない。これがかつての中国共産党の立場であり、私はこの考え方を支持します。

北原 近代の二重性を乗りこえるのは、階級の立場を獲得する以外にはない。先の書で米谷氏は「ここで問題なのは日本の近代の批判だけではない。アジアと日本を貫いて作動する近代の力を、アジアと日本の間主體的な相

互連関のなかで批判していく方向へ、さらに批判を深めるべきではないか。」といわれます。これは結論的にいえば、問題を階級問題としてとらえることではないのか。

北原 相楽総三から連綿と続く近代日本の支配層に殺された人々の恨みと、日本の侵略で殺されたアジアの人民の恨みとが結びつく。

一、近代は、封建制に対して人間としての権利を掲げて闘い革命をおして成立する。資本家とその政権は建前としての人権は掲げつつ、実際にはこれを裏切る。ここに近代の二重性が生まれる。

二、近代資本主義は事実として、たちいかなくなりつつある。近代日本のもので苦しんだ人びとの怨念を晴らすときは近づきつつある。

三、しかし、可能性の現実化はまだ未解決である。世界中でわき起こる、人間として生きさせろという叫びと行動、その連帯、ここにその萌芽がある。

南海 第三項に関して、最近『闘争のアサンブレア』（廣瀬純十コレクティブ・シトゥアシオネス著、月曜社、2009、311頁）を読みました。本書の帯に

失業の先にあるのは「求職」「再就職」だけではない。職場を占拠せよ、労働を拒否せよ、偽通貨を流通させよ！ 闘いの都市ブエノス・アイレスが、いま、私たちに呼びかける。

政治経済運動の新たな水平的・自律的集団性（アサンブレア）の構築へ。」二世紀の始まりとともに、ネオリベリズムに抗して立ち上がったアルゼンチンの失業労働者や職場占拠労働者、都市中産階級たちの様々な実践と挑戦を紹介。《生活Ⅱ闘いのための作業仮説》をめぐる、熱き対話集。

とあるように、二〇〇二年秋のアルゼンチンにおける民衆蜂起と人民権力Ⅱ評議会（アサンブレア）に解き放たれた人びとの思想と行動の記録、そしてその後の経過に関する対話です。

大変感動しました。このような経験こそが、「量の拡大によらない新しい人のつながり、社会組織への試行錯誤」です。

北原 人びとの思いと力が解き放たれた祝祭空間は、かつて全学共闘会議にもありました。あの解放の空間、言葉がそのまま力をもつ場、私もその場を経験しました。アルゼンチンはそれをはるかに深くまた大きな規模で出現させたものです。しかしまた、この大きさは、それだけ民衆の経てきた苦しみの大きさであることを銘記しなければなりません。

アルゼンチンでは新自由主義と軍事独裁が合わさった体制が七〇年代後半から八〇年代前半まで続いたのです。日本などより四半世紀前に南米では新自由主義がすすめられ、人民の生活は困難を極めたのです。この苦しみの

上に二〇〇二年秋の蜂起がありました。

祝祭空間はそれだけでは持続しません。アルゼンチンもまた日常に戻りました。しかし解放された記憶は永遠です。人民蜂起のこの経験がさらに積みあげられ共有され、その中から持続の智慧が生まれてくることはまちがいありません。このアルゼンチンの経験を日本に伝えた本書は、それ自体が経験の共有の一つの実践であり、本書は歴史的な意味のあるものです。

南海 一九八九年の六月四日に向かう天安門広場もまた、このような祝祭空間でした。これはあのように血の弾圧でつぶされたのですが、その記憶は消えません。いま中国社会の中堅となっている人びとのなかにすっかり残っています。

事件を題材にした小説「時が滲む朝」の作者で、中国人初の芥川賞作家となった場逸も50年前、留学中の日本から天安門広場に行った。「何でも小声で話さなければならぬような社会の抑圧が、一気にとれた爽快感を、生まれて初めて感じました」という（「朝日新聞」二〇〇九年六月七日付より）。

六・四運動もまた血の弾圧を受け、そこにいたものはそれぞれに国家の監視の下に困難な人生を余儀なくされる。しかし、あの解放の記憶は永遠である。必ずまた甦る。そう言うことです。

北原 人民は祝祭空間の経験を記憶として保ちつつ、新

しい言葉と新しい関係を生み出してゆくのです。多くの犠牲が必要なのかも知れませんが、それが人間の歴史かも知れません。われわれもまた、祝祭空間の記憶のもとに言葉を拓き耕してきたのです。この対話もまたそのような営みなのです。

普遍と固有

北原 問題の本質は普遍性をもつものです。しかし問題が現実存在する形は、つねに個別性、固有性をもってきます。前の対話でもいいましたが、レーニンが「革命は普遍的なことだが、その方法と形式は固有なものである」と言っています。固有な方法と形式で革命後の社会を発展させてゆくことは、二十世紀の革命のなかでは終に実現しなかったことです。その結果、いわゆる社会主義陣営はキューバを除いて崩壊しました。時代の普遍的な問題を、固有性を尊重し根のある変革として現実のものにしてゆくという問題は、まったく開かれた問題として、われわれの前に横たわっています。

南海 なぜ固有性を大切にしなければならぬのか。それは、固有性が言葉や風土や歴史をもった人間の集団の具体的な現実の存在そのものであるからです。集団が集団として歴史を越えていくということにおいては、その集団の固有性はまさに生きている。

社会変革の運動は、意識においては日常意識の外から持ちこまれる。このとき、その運動が存在としての集団の運動であるためには、外から来たものは集団の固有性を、それ以外にあり得ないものとして尊重する。そうであれば集団の運動とはなり得ない。

固有性を大切にしない運動は弱い。「日本のことが何もわかっていないではないか」という反撃に答えられないからです。日本の戦後民主主義の枠の中の市民運動などにその傾向が強い。その人たちの声は結局は世の深部に届かず、八〇年代九〇年代に草の根保守の反撃を許しました。

北原 私は「ウーマンリブ」、「フェアトレード」、「ベリックインカム」など、横文字音訳によって表されるような運動もまた同じ範疇にはいると思います。

しかし一方、固有性を大切にするというが、そこから本来に普遍が獲得できるのかもまた開かれた問題です。あるいはこの普遍は、西洋が作り出した「普遍」とどのよう異なるのか。固有性を失わない普遍性というのは、現実に存在しうるのか。これらはすべて開かれたままの問題です。

前掲書の第二章「世俗と超越と」では次のような日本の個別の問題点の指摘が目されます。

臼杵陽

日本のこれまでの歴史をみると、個のレベルでは

葛藤をとめないながらも非常にすんなりと、その立場の移行が行われることがしばしば起こっていることがわかります。なぜそうなるのでしょうか。転向論にしても棄教論にしても、日本では一日本の知識人においては、と限定していわなければいけないのでしょうか。二項対立的な境界が、非常に曖昧になってしまふ傾向がある。では、二項対立の場そのものを切り崩してしまふ、その曖昧さの論理は、一体、何かのこのころの、今回、非常に意識した点です。

なぜ曖昧な境界性を問題にしたかというと、それは、境界が曖昧になることによって断絶した淵を越えたことを意識しないまま境界を越えている、ということが認識されないことを意味しているからです。それぞれの知識人が、あるいは一人の人間が、何かをおこなうときに、自覚化されずにそのような移行がなだらかに、かつ、すんなりなされている。それが、ひいては国民全体にまで敷衍している、といってしまうのは、少し問題かもしれませんが、その問題をどう考えればいいのかと意識しました。

北原 これは十分考えなければなりません。形こそ違え近代の二重性に由来する普遍的な問題の日本における現象であり、説明していけば、おそらく問題は固有性と普遍性の入り組んだ問題であろうと考えられます。

明治革命でもなぜ「攘夷」つまり西洋帝国主義と闘う

というスローガンを掲げて闘った討幕派が、勝利すればただちに「開国」に路線を変える。なぜそんなことができるのか。「攘夷」といい、「開国」といい、それは単にそのときに都合のよいスローガンでしかなかったのか。

「鬼畜米英」がなぜ一夜で「アメリカ万歳」になるのか。ここでも同じことです。西洋帝国主義と闘いアジアを解放するという建前はまったく地についたものではなく、昭和天皇自身が自らの統帥権のもとで戦争をおこないそれに敗れるや、アメリカに命乞いをし、皇統が守られることを確認して敗戦を受け入れた。

「二項対立の場そのものを切り崩してしまう、その曖昧さの論理」は確かにあらゆるところに貫かれています。ここには歴史的、地勢的に形成された日本での固有の問題があるかも知れません。

南海 しかしまたその固有性の内には、単にあいまいとか無原則な民族性とか言って終わりにすることのできない、より高い立場からの原則性があるようにも思われます。人民が建前としての「二項対立」に対して、それよりもっと大切なことがあるとこれを取りこえていくようなことなのですが、ここはまだ十分には考えられていません。

日本の個別性に関していえば、次のような意見も注目すべきです。辺見庸さんが、〇九／〇一／三〇〇二／一三にわたって『週刊金曜日』で『生体が悲鳴を上げて

いる』として書いています。

辺見庸

ヨーロッパの哲学者たちは、剥き出しの生に晒されたナチスの時代を経験し、人間の根源を問うた思索というものがあつた。それがこの日本では、朝鮮半島を植民地にし日中戦争においてはあれだけの人間を殺しながら、人間の生を剥き出し、あるいは剥き出された経験をしながらも、まだ根源的な思索がないのです。広島、長崎への原子爆弾投下を経てもなお、思想的、文化的に深い総括をせず、米国に屈従し、ただあこがれ、へつらいながら生きてきた。自前の反省と思索をこれだけしなかった国というのは世界でも希有なのです。

北原 私は「自前の反省と思索をこれだけしなかった国」と国家でくくることには賛成できません。そのうえで、良心的な知識人をはじめ市民的な運動、そして右派民族派の人々まで、あの侵略戦争について政治的な責任を内部からは追及せず、一方また原爆投下という大量破壊兵器を実際に使ったアメリカの戦争犯罪を追求することもなく、戦後の時間をやり過ごしてきたことは事実です。アジアの解放を願い、故郷の山河を思つて死んでいったものは浮かばれないままです。

見るべきほどのことは見、体験すべきほどのことは体

験しながら、そこから今後への教訓を引き出すこともせず、日本人が戦後、偽善的に生きてきたのは事実です。水に流すということは、すべてを記録にとどめ、すべての責任を明らかにしこれから逃げず、そのうえで生き残った人民が過去の恩讐をこえて階級として連帯するときのみ、用いることのできる言葉であらねばなりません。南海 このようにわれわれは本当に深い、深刻に考えるべき課題を負っています。これを柵に上げておくことはできないはずで。

最近『英語にも主語はなかった』（金谷武洋、講談社選書メチエ二八八）を読みました。カナダの大学で日本語を教えるなかで三上章の日本語論に出会い、主語という概念が西洋語のものであって普遍性のあるものではないこと、また主語という概念なしに日本語論を組み立ててこそ、明解に日本語を教えることができるということを経験した人です。そのことを書いた書『日本語に主語はいらない』（金谷武洋、講談社選書メチエ二〇〇）に続いて書かれたのが本書です。主語を指向する英語と、主語を求めない日本語の比較から、文明の比較におよんでいます。その上で、一神教を土台とする西洋の学に対し、汎神論の学問を打ち出すことを述べています。

汎神論のための宗教学

宗教と言えば、宗教学という分野も西洋的一神教が土台となっていることを三浦正弘氏が見事に指摘

している。『主語はいらない』を読んで送って下さった『汎神論のための宗教学』で、パレスチナなどの宗教戦争が結局は一神教同士、つまり排他的な「絶対」と「絶対」の泥沼で、これには結局出口がないと述べておられるが、まさに同感である。本書の第2章最後に出て来る「普遍文法」は現代英語を土台にした文法だが、これも一神教と同じ絶対志向の考えである。我々は日本語文法を盾として、これに反対していかねばならない。三浦氏の次の言葉は三上章の文法理論とも、本書の主張とも、また先ほど引用した西田の「遺言」とも同じ、「土着主義」という虫の視点から発せられたものである。

絶対を旗印に戦争をしかけ、汎神論に立つ宗教を弾圧することは果たして文化的・開明的・進歩的で、科学的に許されることなのだろうか。汎神論の世界に住む者にとっては何とも迷感で手前勝手な論理に困ってしまう。

（中略）これに対抗するためにはやはり汎神論を主体とした学問を打ち立てねばならない。日本人は日本人の身体にあった学問をするのがやはり理にかなっているし、世界平和のためにも有益だろう。これこそ日本人が世界から尊敬を勝ちえる近道だと思ふ。

ちなみに三浦氏は姫路市の高校の国語の先生で、神主さんでもある。こうした人に拙著を読んでいただくことは本当に嬉しい。まさに同志を得た思いがする。やはり高校で教えている時に世界に通用する理論を打ち立てた三上や西田と同じように、三浦氏にはぜひ汎神論を土台にした宗教理論の体系を樹立していただきたいと願ってやまない。三浦氏の「横文字を縦に翻訳することが学者の仕事と心得ている日本の学者」には、それはおそらくできない仕事であろう。

「汎神論を主体とした学問」にはわれわれの「日本語に内在することわりに根ざした学問」と共通の志向性をもっていると思います。それはわかります。われわれもまたその志向性のもとに活路を模索しています。

しかし、ここで《西洋、一神教、排他的》とつながり、その限界を超えるものとして日本語と汎神論が出される。それは余りに樂觀的すぎないかといいたいのです。「絶対を旗印に戦争をしかけ」といいますが、では汎神論の日本がなぜ侵略戦争をはじめたのか、そしてきつちとした総括なしに水に流せるのか、これに答えなければなりません。

汎神論のゆえに水に流してゆくことができるのであるとすれば、汎神論はなにもいいことはありません。一神教の西洋に代わるものとして、東洋、あるいは多神教、ま

た汎神論を対置する論はいろんなところで見ることが出来ます。狩猟文明の西洋に対して農業文明の東洋を対置し、西洋のゆきづまりをうけて後者に何らかの希望を見出そうとするのも同じことです。

しかし、これらはすべて過去を水に流すことなく、辺見庸さんのいう「自前の反省と思索」をやり抜き、それをくぐり抜けないかぎり無意味です。説得力はありません。北原 確かに。汎神論の寛容がいわれませんが『定義集へ』『日本語の今』『混成語・日本語』に書いたように、天皇制は他者に対して寛容ではありません。一視同仁は服従したものに對することであって、まつろわぬものに対して天皇制は非寛容でした。

縄文人のなかにタミル起源の弥生文明が入り、長い時をへてある程度は混成していた。そこに征服王朝としてヤマト政権がやってきた。ヤマト政権にまつろわなかったもの、それがまつろわぬ民であった。ヤマト政権はまつろわぬ民に対し、同化か滅亡かの非情な態度を一貫させた。今日、台湾島では政権が公認する少数民族だけでも十四存在している。それに対し、日本政府が国際人権規約に基づく国際連合への報告書に同規約第24条に該当する少数民族として記載しているのはアイヌ民族のみである。つまりその他はすべて亡ばされたのである。ヤマト政権の同化政策は厳しかった。

古代においてこのようであり、近年はよく知られた日本軍国主義の残酷さです。どこが農業文明の寛容でしょうか。ですから、一神教に対置する農業文明や汎神論は、近代日本や天皇制の総括ぬきには説得力がないのです。南海 日本列島弧の歴史が、つねに外来する文明によって形成され内発的な展開の暇がないままにやってきたことと関係があるかも知れません。日本語は外来の言葉を受け入れるのに非常に柔軟な仕組みをもっています。逆にそのことが言葉を内から耕すことをせず、内部に否定のことわりを育てなかつた原因かも知れません。

このようなことは言えばきりがありません。しかしわれわれは与えられた条件のなかでやるしかないのであつて、その与えられた条件の固有性をつかみ、それをほぐし、たりないものを加えていくしかないと思います。

靖国問題については前掲書で高橋哲也さんが次のようにいっています。

高橋哲也

国家神道のなかで、靖国は決定的な重要性を誇っていたと思います。天皇と国家のために命を捨てた人を祀るというわけですから、国民一人ひとりの生と死に直接、結びついている。その凶式で敗戦まで来た。明治から敗戦までの時期、つまり近代日本の世俗と超越を考えるとときには、国家神道や靖国というものの曖昧さ、そしてだからこそもちえた支配的

な力が問題になってきます。

北原 現在、象徴天皇制はそれ自体が大きな曲がり角にきている。これが何に起因するのか、そしてこれからどうしていくのか。天皇問題は、現代日本人が選びとる問題なのか、それとも与えられたものとして変ええないものなのか。私にも考えるところがあります。後にここで考えていきたいと思います。

アメリカにおけるキリスト教、日本における天皇制、いずれも同じように法を越えたところで近代的な国民統合の役割を担っている。近代はそのような疑似宗教を必要とする。この意味では靖国の問題もまた、近代国民国家の二重性の範囲内の問題であるということもできる。

先の『週刊金曜日』の一文で辺見さんが天皇問題に関して次のようにいうのは賛成です。

辺見庸

あの人たちがを穩便に天皇制から解放して、個人の尊厳と自由、権利をもってもらおうと、軽やかに朗らかに提案してもおかしくはないでしょう。天皇や皇太子たちに記者らは天皇制存続の是非につき直に考えを問うていい。九条についても考えを問うていい。イギリスだつてオランダだつて、そういう提案をしても何の問題もない。しかし、日本では大変危険なわけです。記者が無理に記事にしたら皇室担

当をはずされる公算が大です。そんな国がどこにあるのか。この国では一木一草に天皇制が宿ると誰かと言いましたが、そういう思考がまだわれわれのなかにあるのです。左翼にも天皇制がかかわる心的拘束がある。それが思想の発展を妨げる内的禁忌をつくっているのです。天皇制なくしてこの国はやっていけないのか――これは、マスコミ、思想界が故意にさぼり、自己規制してきた重大なテーマです。

北原 日本列島弧の人間はそろそろ天皇なしにやっつけなければならぬ。しかしそれには準備がいる。天皇制があるから「思想の発展を妨げる内的禁忌をつくっている」と辺見さんは書きますが、実際は現実には立脚して思想を鍛えることによつて、内的禁忌を打ち破る。それが天皇制を内から破つていくことであり、天皇なしにやっつけける人間の誕生である。そしてそれが日本の近代の内実である。

南海 総括しうる言葉を準備する、あるいは総括に向けた思索の中で言葉を耕す、それがわれわれの意志ということなのです。

北原 それ以外にはありません。それがまた近代の二重性からわれわれの人間としての生存を奪いかえすこと、その基礎となることでもあるのです。

一連の思想作業を担いうる言葉を育てなければならぬ、そのための準備として構造日本語を再検討する、こ

れが青空学園の当初に設定した課題でした。

この作業なしに天皇問題を論じても、それは結局天皇制に絡めとられるだけだと考えてきました。それはいままも変わりません。それがまた人民の近代の内実を生み出していくことそのものであると思います。

人間の溶解

南海 同書第四章「言語と法、人間の領域」では近代的人間が崩れゆくことについて、重要な指摘がなされています。

守中高明

たとえば今日、人間の領域とは何か。これは、これだけで一つのきわめて大きな問題を構成します。かつて疎外論の文脈で語られたような、復権されるべき人間とはおそらく異なる意味で、しかしやはり今日、人間の領域はますます不確かなものとなりつつある。それはさまざまな場面で侵害され、傷つけられており、したがって守るべきものとしてあるように思えます。

人間の領域とは何を言うのでしょうか。

生存権や労働権という最低限の人間の権利を互いに守りあう世が崩れ、人の尊厳を資本がないがしろにする。こ

れは互いに守りあうものだ。また、学校でも互いに気を遣いあい傷つけあい、教室にも入れなくなつて教育の権利を奪われる。このように人間が人間として生存する基本形式を互いに守りあうことさえ失われつつある。人と人の関係が断ち切られ、思いを聞いてくれる者もない。このようなことをいうのでしょうか。いろいろ考えさせられます。

北原 われわれは最初「本来の日本語」を求めて探求をはじめました。それは疎外論が論の根拠とした「本来の人間」と併行する考え方です。やってみてわかったことは、「本来の日本語」があるのではなく、現在する言葉が日本語のすべてであるということです。そこでわれわれは、現在する日本語を言葉として成立させている基本的な言葉、それを構造に日本語といつたのですが、その相互の関係を言挙げる方向でやってきました。これは疎外論から物象化論への展開と併行かも知れません。

ですから守中さんの言われる「したがって守るべきものとしてある人間領域」は、われわれの関心事で言えば、「現代日本語を構造日本語から再定義する営為」を含むものでなければならぬと確信しています。

そこで、われわれは定義集で人間をどのように定義したのか。用例を除いて再掲します。

「人間（にんげん）」「人」を「言葉をもって協同して労働する生命体」としてとらえかえすとき「人間」

という。人の人であるゆえんを「人」に付け加えた言葉。人が自らを人として自覚するのは社会のなかにおける自己という認識を土台にする。さらにこれが近代にいたって資本主義の成立とともに言葉をもって労働する生命として人をとらえかえすようになる。この意味で「人間」は近代に発見され、この意味での「人間」は近代日本語ではじめて用いられるようになった。

▼もともと「人間」は「人の住む世界」「人間界」を意味し、「じんかん」と読まれることが多かった。

◆この言葉が近代になって、「人」を概念としてとらえるときに用いられるようになった。

近代は「人」を「言葉をもって協同して労働する生命体」として再発見した。これは、近代資本主義が勃興する時代に始まり、近代ブルジョア革命と資本主義生産制度のものとの産業革命によって社会が根本から変化して全面的に用いられるようになる。日本語でいえば、江戸期に今日に通じる「人間」の用法が始まり、「明治維新」と「殖産興業」による近代工業の成立以降になって一般化する。

明治維新は日本に資本主義を全面化させ、産業革命を準備した。産業革命の求める大規模な生産を可能にしたのは「自由」な（封建制度から自由になった

が、しかし同時に搾取されることにおいても自由な労働者である。明治資本主義の本源的な資本蓄積は農村の収奪によってなされた。その結果、農業で生活できず都市に多くの労働者が流出した。こうして労働のみが生きる術である労働者が生み出された。「自由な」労働者の出現である。

労働によって何が維持されるのか。それは生命と人間相互の関係である。労働は個人の労働ではない。すべて協同労働である。協同を可能にしているものは何か。それは言語である。これが「人というもの」である。このように再発見された「人というもの」が「人間」である。

もっとも早く「人間」を発見したのはもっとも早く資本主義段階に到達した西欧近代である。フランス革命に向かう時代にキュビエによって〈生命〉の概念が確立する。資本主義の展開は西欧人をこれまでとは違う言語に直面させ、言語の比較分析は、言葉の内部構造の探求へと向かい、〈言語〉の概念が確立する。スミス、リカードによって〈生産〉の概念とそれ担う〈労働〉の概念が確立する。学としてそれらは、生物学、言語学、経済学を確立する。

「人」を「労働し言語をもつ生命」として再発見するのが近代である。このようにして再発見された「人」を「人間」という。これは近代資本主義が定義する

人間である。資本主義は人間を「人的資源」として把握する。「生命の尊重」という建前も、労働力は生きていってはじめて価値を生み出すからである。資本主義のいう生命の尊重は労働力としての尊重に他ならずそれ以上ではない。労働力としての力を失ったもに対してその生命を尊重することはない。

人の価値は生産活動につながるかどうかで定まるものではない。生産活動は人間にとって目的ではなく手段である。では人間の目的は何か。それは新たな人間性であり、資本主義的近代の人間を超えることである。二十一世紀初頭、未だそれは見出されていない。その探求こそ、現代の人間の目的である。

北原 この定義は人間を構造日本語で定義したといえるか。「人」を用いてその近代における再発見として定義している。ですからここでは「人」の定義が必要です。同様に用例をのぞいて掲載します。

【ひと(人)] [hitoo] → [fitoo]

■ 「ひと[hitoo]」の「ひ[hi]」は「ひ(霊)[hi]」の「[hi]」とおなじく生命力そのものを示し、「と[too]」は「と(処)[too]」、つまり「そと(外)[sotoo]」の「[too]」と同じく場所を意味する。「生命力のとどまるところ」としての「人」が、日本語が人間をつかんだ原初の形である。協同労働と言葉を獲得することによって、考えるこ

とが可能になった霊長類を人という。近代にいたり、労働し言語をもつ生命として人が「人間」として再発見された。

※古代万葉仮名では「ひ(日)」の「三」と「ひ(火)」の「三」は甲乙違い別の音であった。『大和言葉を忘れた日本人』(長戸宏、明石書店、二〇〇二年刊)では「大和言葉『ひと』は『火の使用』と関係します。つまり、『ひと』は『ひ』を『と』(「つなぐもの」)という意味になるでしょう」と述べている。しかし、これは、万葉仮名の時代にあった区別がそれよりも古い弥生期やあるいは縄文期には無かったということを実証しない限り、単なる思いつきになってしまう。この書はいろいろと示唆に富むものであるが、この点は是非再検討してほしい。

▼動物に対するものとしての人。(用例略)

▼一人前の人格をもつものとしての「ひと」。▽具体的な人を表す場合。▽抽象的に人というもの一般を表す場合。▽人間の品格。人柄。人品など人としての内容そのものを意味する。

▼人を一般的に示す。漠然と示す

北原 これで日本語の内部で人間を定義したといえます。前にも言いましたがこの「人間」定義は「近代の人間」の定義であり、近代の「人間の定義」です。近代資本主

義は人間の生命を資本主義的な価値を生み出すものとして見出しました。人間を生産資源として見出したのです。同時に、人はこのとき、自らを自由で尊厳ある人間として見出したのです。近代の二重性に対応して、人間の定義にもまた二重性があるのです。

ですからこれを定義集の定義としたのです。近代の人間の定義を一足飛びに観念だけで超えることはできないからです。現実に新しい人間はまだ生まれていないのです。「人間として」ということは、近代資本主義の人間を乗り越えていく歴史の運動としての「人間」であり、定義集はまず近代の人間からはじめなければならぬと考えました。

何か本来の人間があつて、それが資本主義によって疎外されているという考え方はできません。われわれもかつて、「本来の日本語」があつて、その内容をつかめば現在の日本語を再建する景気となるという考え方をいたしました。しかしそれは違いました。「本来の日本語」が虚構であつたように「本来の人間」も虚構です。

そのような形ではなく、しかし、新しい人間は必ず形をとります。今はそれを待ち望んでいるところです。

南海 前の対話で私は次のように言いました。「新自由主義はまだまだ根強く続きます。これを超える人間が世界大に生まれてこなければなりません。人間としての原理を問い直し、地に足のついた言葉でこれを語り、新しい

人間の血肉とならなければ、次の段階はありえません。」
そして昨年の恐慌です。これで新自由主義が自ら退くかといえばまったくそんなことはありません。ますます搾取・収奪を強めざるをえません。われわれはこの闘いのなかで生まれた新しい事物の意味を深くとらえ、広げ、共有し、それを積みあげることが必要です。

北原 同書にある次のような言葉には励まされます。このような言葉に、人間は今回問題に向きあっているのだということを思います。

制度化された近代のほころび 竹村和子

「人間」は、人間中心主義的な思想のなかで、とくに近代的な枠組みのなかで、定義されてきました。近代法が成立し、近代の民生主義が広まり資本主義が稼働していくのと歩を一にして、人間の概念が重要になった。いわば近代の知(言語)の枠組みが、近代特有の「人間なるもの」を作ったのです。そこでは、「人間」の概念が通時的にも共時的にも普遍化されましたが、特定の時代の必然が生み出したきわめて歴史的な産物にすぎないことを確認する必要がありますでしょう。

生存が脅かされる時代に わたしは、この次にすばらしい世界が来るとは思えません。言語的存在である人間に、予定調和は訪れないからです。

近代になるときに、神が死んで「人間」が誕生し、人間や人間社会を解析する学問領域、そして人間の理性に基づいた自然科学などの学問領域が、新たに展開していきました。そういつた啓蒙主義的過程で、社会学や精神分析や文学研究が誕生したのです。いわば近代になって、知の地殻変動が起きたわけですが、現代は、同じくらいの大規模なパラダイム変換をしつつあると思います。だから、思いがけない新しい学問分野、もしくは学問かどうかともわかりませんが、そういうところから新しい知が生まれてくるのではないか。現在の人文学では解説できない別種の人間たちから或る別種の社会が生まれていく、その変化の黎明期にわたしたちはいるように思います。あまりにも氣宇壮大かもしれませんが。

南海 われわれははじめからこのようなことばかりを考えてきたのかも知れません。なしたことは、消去法でこれではだめだということばかりです。こうだということを打ち出すところまでいっていません。現実にまだ新しい人間は生まれていない。あるいはわれわれはまだ知らない。そうであるなら、まず消去法は必要なことではありました。

現実が先行しなければなりません。そうでないところで「こうだ」と打ち出されることは、多くの場合一時のものでしかありません。それにしても今はまだまだ深い

恐慌世界のほんの入り口にいます。混沌とした時代に向かっていることはまちがいありません。

北原 人間として生きるために働かせろという叫びは、人間と世界の存在の意味が、この世から生きる糧を受けとる労働の喜びにこそあることを教えています。

産業革命を生みだし今日の資本主義に至った西洋の「学」は、ギリシア時代に労働を奴隷に任せた貴族の「知」として成立した。生きる現実からの遊離は、キリストの神の前の真理として「真理」それ自身を自己目的化することによって正当化された。この「労働」と「知」の分裂は形を変えて生き続けている。

働きの場こそ固有の言葉の生まれるところであり、ことわりの世界そのものであり、働くものが固有性に立脚してたがいに分かりあえる土台である。「新しい知」は闘うことによって奪いかえされた働きの場に生まれる可能性をもつ。われわれはそのような新しい知の兆し、新しい人間の現れに深い注意を払いながらやっていきたい。

言を挙げる

御言は民の事

北原 今日歴史の大きな転換点です。しかし、これを正確に言うと、それは歴史が転換を求めている段階、転

換の可能性の現実的土台があるという段階であって、その土台のうえに転換を実現する主体はまだ形成されていない。現在は、その転換を現実のものとする主体を準備する段階である、ということです。

転換にはそれを担う主体がなければあり得ません。主体が生まれていくためには、それぞれの集団の歴史からくる個別性に即した問題の解決が必要です。それが根のある変革思想ということですが、日本においては天皇制の問題をどのように受けとめるかということが、現実の課題です。天皇問題は今日においても開かれままだです。

この問題に関する基本的な視点を議論したいと思えます。天皇は古くは「すめらみこともち」ともいわれました。この言葉の意味を戦後、折口信夫は次のようにいっています。

『女帝考』（昭和二十一年十月『思索』第三號）

みことはみこと執（も）ち。即すめらみことは、『最高貴の御言執ち』の義であって、其處に、すめらみことの尊い用語例も生じて来たのだが、同時に、天皇に限って言ふばかりの語とは限らなかつた。中つすめらみことは、すめらみことであつて、而も中に居られるすめらみことと言ふことであつた。…中つすめらみことが神意を承け、其の告げによつて、人間なるすめらみことが、其れを実現するのが、宮廷政治の原則だつた（『折口信夫全集』第二十卷『神道

宗教篇』)。

折口はここで神の言葉を聴きとる「中つすめらみこと」こそシャーマン的な女帝であり、その女帝が人間たる「すめらみこと」に伝える。「すめらみこと」はそれを受け取り、まつりごとをおこなう。これは天皇の「人間宣言」を受け、実は古代から天皇は人間であったということを書き残している。

現人神の否定です。折口は戦前戦後を通じて天皇が神であるという考え方はとらなかつた。それは民俗学の良心です。

しかし折口が書き残した天皇観には、より大きい虚構が隠されていると思います。日本列島弧の民俗はどこから来たのか。折口はそれは天皇から来たと言いつづけました。神の言葉を受けとるものとしての人間天皇と、そして天皇家の習俗が先にあり、それが民間に広がったという考え方は変えられません。昭和四年のある論文の冒頭で次のようにいいます。

『古代人の思考の基礎』

尊貴族には、おほきみと仮名を振りた。実は、おほきみとすると、少し問題になるので、尊貴族の文字を用ゐた。こゝでは、日本で一番高い位置の方、及び、其御一族即、皇族全体を、おほきみと言つたのである。この話では、その尊貴族の生活が、神道の基

礎になつてゐる、といふ事になると思ふ。私は、民間で神道と称してゐるものも、実は尊貴族の信仰の、一般に及んだものと考へる(「折口信夫全集」第三卷『古代研究』、初出：「民俗学 第一巻五・六号、第二巻第二号」一九二九(昭和四)年十一月、十二月、一九三〇(昭和五)年二月)。

南海 折口信夫は、神道は天皇家の信仰が広がったものであり、人民の生活や習俗も天皇家に由来し、それが下に広がったというのですね。これが虚構なのです。

北原 まず私は、「我々の国語は、漢字の伝来の為に、どれだけ言語の怠惰性能を逞しうしてゐたか知れない程で、決して順当の発達を遂げて来たものではないのである。」(『古語復活論』、「大正六年二月「アララギ」第十巻第二号」と言つてきた折口信夫が、「思考」を定義することなく「古代人の思考」ということに賛成できません。この問題は青空学園で何度も取りあげてきたことです。

そのうえで、この折口信夫の(天皇の)生活が、神道の基礎になつてゐる」という考え方は、事実ではない虚構であると思います。この問題に関して私は『夜明け前』を読む」で次のように述べました。

弥生時代末期から古墳時代の日本列島は戦乱の時代であつた。この時代、後漢が滅びた後であり東アジア全体が大動乱であつた。中国大陸、朝鮮半島、日本列島はこの大動乱の渦中であつた。そのなかで日本

列島を武力統一し、列島中央部を支配したのが今日の天皇家の祖先である。彼らは、もともとこの日本列島のなかから成長したものでかどうかも定かではない。中国大陸や朝鮮半島から亡命するようにやってきたものもあった。応神も仁徳も土着のものではない。

強大な武力をもったものが支配を広げていくにあたって用いた方法は「土着の習俗を取り込む」ということであつた。この日本列島はもともと縄文文明が開けていた。そこに弥生人が外来し、長く並存しながら弥生の農耕文明が支配的になつていった。さらにその上に天皇家の祖先がやってきたのである。

彼らは農業協働体が協同体の維持発展のために行われてきたさまざまな習俗を取り込み、あたかも天皇家がそれを代表するかのようになつて、振舞うことで支配の権威を打ち立てた。その典型は「すめらみこともち」として天皇を位置づけることであつた。固有の言葉や神から受け取るものとしての天皇、である。そして新嘗祭である。当時の基幹の産業である農業の発展を願う人民の心を取り込むため、農業協働体のなかで行われてきた習俗を取り入れ、それを大嘗祭と結びつけることで、天皇が即位するにあつて正統性と権威づけを演じ出してきた。このような支配の虚構は天武天皇から天平時代に完成する。日本書紀編纂の過程がこの支配のあり方が仕上がついていく

過程でもあつた。

天皇家を中心とする貴族社会が支配権を失つて以降も、その時々々の支配者は「日本文化を体現するものとしての天皇」という虚構を支配のてこに深くかつ本質的に活用してきた。

折口信夫は民俗の实地調査を重ねた人ですから、以上のことを十分承知していたと思います。しかし、天皇家の習俗は、この地での支配を確立する過程で支配地の民俗を取り込んだものだということは生涯口には出さなかつた。陸軍中尉として硫黄島で戦死した養嗣子・藤井春洋はじめ虚構のもとに死んでいった多くの若者のことを思うと、とても言えなかつたといつべきかも知れません。

この虚構で作られた支配制度、ここに天皇制の特質があります。虚構のゆえにまたこれは巨大な無責任の制度でもあるのです。これを支配の体系に使えば、その体制は強固なものになります。

外来の天皇家とそれに連なることで利益を得るものが、内に住む他のものに対してはもつとも厳しく対する。ここに、同化指向が非人間的なまでに強く、また近代において近隣への侵略を政治としての必要以上に非道に行つた根源があるのかも知れません。

このような支配と社会編成の方法は今日に続いていきます。ですから、天皇制に反対だという人々が、民俗や習俗を古いものとして棄て、それを近代市民主義で置きか

えて立ち向かって、それは根なし草でしかなく、天皇が里のことわりの体現者という虚構を打ち破るには余りにも無力でした。

さらにまた、総括することのないままに水に流す傾向は、結局は天皇制が作り出してきた傾向かも知れません。誰も責任をとらずすべてを天皇に預け、そして天皇はまた責任を問われない。中空の虚空が天皇制の特質であるとすれば、これをのりこえることは容易ではありません。とするならば、天皇制の虚構をのりこえて里のことをりを述べようとするわれわれこそ、真の意味での愛郷主義、パトリオティズムかも知れません。われわれの愛郷主義は、資本家の手先となった右翼諸君には思いもよらないことでしょう。天皇家が日本列島にやってくるはるか以前から今日に続く里のことわりを、自覚して今日に生かす。この立場がなければ、時代を転換することなど不可能です。

北原 「みこと」を神の言葉とすること自体が虚構です。まことのみことは民の「こと」です。みことは天上に由来するのではなく、地上に由来する。さらに、「みこと」を「もつ」もの、つまり「こと」を執り行うものは天皇ではなく民百姓のことを実践するすべての者である。今風にいえば、活動家である。「みこと」のおさえ方が違う。さらにそれを受けとるものが違う。

近代の中で「こと」を聴きとるのが実は働くものう

ちにおり、民百姓のうちにいるという思想は、内部からの近代思想として可能であった。この方向にもう一つの日本近代を構想することができる。

しかし近代思想が西洋近代思想でしかなかった明治以降の日本において、これは現実性を持ちえなかった。それはまた、明治維新の国学が徳川幕府を倒す旗印として尊皇攘夷を掲げ「みこともち」としての天皇という虚構のうえに立っていたことと表裏の関係である。「みこともち」としての天皇を担いで江戸幕府を倒した。しかし虚構はすぐに投げ捨てられる。今度は文明開化、鹿鳴館である。

それでも国学は一君万民思想であり、ただ一人をのぞく他の者の平等思想をもっていた。資本主義明治にとつてそれは異質であり不都合であった。明治革命は赤報隊が粛清されたことによつてまず変質し、次に明治五年、国学は近代にそぐわないものとして政界から平田派が追放され、さらに変質する。

いまいちど『民百姓のことこそ「みこと」であり、それを受けとる者もまたその中にいる』という青空学園の初心に立ちかえるときにかけていると思います。構造日本語と名づけた言葉で現代を語る、現代を言挙げするときだということ。ここを通らなければ近代は本当にはないのです。あまりにも漠然とはしていません。実際にやっていくことで、それを表していくしかない。

このように考えてきた根拠は、次のようなことばと人間に関する思索でした。あまりにも概略に過ぎませんが、次のようなことを考えてきました。言葉は硬く、まだこなれてはいません。しかしいわんとすることは、今も大きくは変わりません。固有性が輝いて共に生きる世が成るように、この世界で営々と荒地地をきり拓き、耕し続けよう。自分を空しくして働こう。私個人の存在よりも、縁ある人々の生きるこの世界こそが大切である、ということです。

一、人間は言葉によって人間である。言葉は労働とともに古い。この二つは、互いに作用しあつて発展してきた。それぞれの人間にはその人が人間であるゆえんの言葉がある。その言葉は抽象的な言葉一般ではない。必ずそれぞれの具体的な言葉である。その言葉はその人間の「固有の言葉」という。人間として考えるとき、それは固有の言葉で考えるほかない。

二、言葉は言葉である以上、世界をどのような基本構造としてつかむのかを定める言葉を持っている。それが構造語である。構造語は世界把握の言葉であると同時に、その言葉の仕組みも決定づける。構造語は発展する。しかし取り替えはできない。個々の言葉は、言葉の体系のなかに位置をもち、その相互の位置関係によって、内に考え外に伝えることが実現される。

三、人間の営みは言葉に意味を加え、こうして言葉は耕される。人間の新しい営みは言葉の新しい意味をきり拓く。言葉は個別の人間の営みを協働する人間の営みに普遍化する。この相互の関係の構造が、一人の人間の生の場である。

南海 人間が言葉をもつて働き共に生きること、この根源的な人間のあり方そのものを追求することは、そんなに深くできてきたとは言えません。それはすべて今後の課題です。ただし、このような人間のあり方をおさえることによって、現代日本の人間と言葉のあり方に、大きな問題点を見出し、これをのりこえることが、日本語圏の言葉の真の意味での近代には不可欠である。言葉は、このような課題や問題をかかえつつ、動いていくものですが、しかしまた、これではだめだという見解もまた、なければなりません。

確かに近代日本では言葉に根ざした論理を育てることがなされませんでした。それにはそれなりの理由があることです。ですから、今日の問題として考えなければならぬと思います。

日本語の内部に否定とそこからの創造の契機を育てることがなされませんでした。「なる」のは放っておいてなるのではない。拓き耕さねば成らないのである。耕すとは否定に裏づけられた、再生の営みであるのですが、これがまだまだ弱かった。

北原 私は日本語の骨格を作っている言葉は意味にも深く関係していると思います。それらの基本語を構造日本語と名づけたのですが、構造日本語は日本語である以上捨てられない。そしてそれは意味内容を規定する。ならば、これらの語としっかりつながった言葉でなければ、文のなかに配置しても浮きあがり、深く思想を表すことなどできない。

南海 英語の *Do* 動詞や、ドイツ語の *sein* のような言葉が、西洋における「存在」の意味内容を深く規定しているのと同じように、「もの」「こと」「いき」「とき」「ある」などが日本語の意味を深く規定しているというのですね。それにしても、われわれはこれらの言葉に無頓着に西洋語を漢字語に置きかえて日本語のなかに配置してきました。最近ではそれもせずにカタカナ語のままです。それでは考えることはできません。

北原 しかしまた *Do* や *sein* をいくらながめていてもそれで思想が生まれることはありません。あくまで現代の問題を構造日本語をもって立ち向かうということなのです。それがこの対話の意義です。それを確認してさらに進んでいこうではありませんか。

内発的な近代か内発的な近代かを、もつとも切実に問うたのは夏目漱石です。かれは明治四十四年八月和歌山における講演で次のように述べています。

西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であっ

て、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的と云うのは内から自然に出て発展するという意味でちやうど花が開くようにおのずから蕾（つぼみ）が破れて花弁が外に向うのを云い、また外発的とは外からおつかぶざった他の力でやむをえず一種の形式を取るのを指したつもりなのです。もう一口説明しますと、西洋の開化は行雲流水のごとく自然に働いているが、御維新後外国と交渉をつけた以後の日本の開化は大分勝手が違います。もちろんどの国だって隣づき合がある以上はその影響を受けるのがもちろんの事だから吾（わが）日本といえども昔からそう超然としてただ自分だけの活力で発展した訳ではない。

これを前の言葉で表現しますと、今まで内発的に展開して来たのが、急に自己本位の能力を失って外から無理押しに押されて否応（いやおう）なしにその云う通りにしなければ立ち行かないという有様になったのであります。それが一時ではない。四五十年前に一押し押されたなりじつと持ち応（こた）えているなんて楽（らく）な刺戟（しげき）ではない。時々には押し刻々に押されて今日に至ったばかりでなく向後何年の間か、またはおそらく永久に今日のごとく押されて行かなければ日本が日本として存在できない

のだから外発的というよりほかに仕方がない。その理由は無論明白な話で、前(ぜん)詳(くわ)しく申上げた開化の定義に立戻って述べるならば、吾々が四五十年間始めてぶつかった、また今でも接触を避ける訳に行かないかの西洋の開化というものは我々よりも数十倍努力節約の機関を有する開化で、また我々よりも数十倍娯楽道楽の方面に積極的に活力を使用し得る方法を具備した開化である。粗末な説明ではあるが、つまり我々が内発的に展開して十の複雑の程度に開化を漕ぎつけた折も折、凶(はか)らざる天の一方から急に二十三十の複雑の程度に進んだ開化が現われて俄然(がぜん)として我らに打ってかかったのである。この圧迫によって吾人はやむをえず不自然な発展を余儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのでなくって、ヤツと気合を懸けてはびよいびよいと飛んで行くのである。開化のあらゆる階段を順々に踏んで通る余裕をもたないから、できるだけ大きな針(はり)でぼつぼつ縫って過ぎるのである。足の地面に触れる所は十尺を通過するうちにわずか一尺ぐらいなもので、他の九尺は通らないのと一般である。私の外発的という意味はこれでは御了解になったらうと思えます。

南海 構造日本語、実際の語彙では「やまとことば」と

重なるわけですが、内発的にやまとことばから言葉を展開し「やまとことば」を基礎に現代を語ろうとすることは、和算の言葉で現代数学をやるとうということではありませんか。

江戸時代を通じて和算は非常に高い水準まで達成していました。一方で例えば三角関数をもたないことや、測量と暦学の基礎ではあったが、一般的な科学の方法としての数学という意識は育たなかったことなど、いろんな限界性もまたあります。

それは当然で、十八世紀、十九世紀の西洋数学の爆発は、アラビアで育った数学が欧州各地の人びとの交流のなかで急速に発展したのであって、狭い日本の中だけでは限界があったのです。いくらかの人は蘭学から西洋数学をしていましたが、開国によって西洋数学との交流が公のものとなり、西洋数学が育った場に和算も入っていったことを意味し、そこで新たな形式をえることで、飛躍したのです。それから半世紀を待たずに、高木貞治を生み出したのです。

和算は日本の数学世界や世の数学というものの深いところに生き続けています。西洋の形式を得ることが必要だったのです。同じことが言葉についてもいえるのではないか。

北原 『定義集へ』『日本語の今』『近代日本語再説』で『思考のパーティータ 一三：〈歴史の真理〉に向かつて

「メタ哲学としての佛教の可能性☆」(小林康夫)の次の言葉を取りあげました。

いまからおよそ百年以上も前に、日本は、西欧から、「哲学」を輸入し、それを移植しました。そのために、多くの哲学的な用語を新たに翻訳し、新語を作りだしました。それらの言葉はすでもはやわれわれの言語と思考の完全な一部となっています。

これに対して

そうだろうか。違う。これはやはり鹿鳴館の思想である。私たちはこのようには考えない。むしろ「それらの言葉はすでもはやわれわれの言語と思考の完全な一部となって」というと考えると、日本語で考えることの衰退があると考えられる。「それらの言葉」とわれわれが考えることの間を見る知こそいま必要な知であると信じる。

今日「日本語」とよばれるこの言葉にも、長いときの積みあげがある。その過程で日本語は幾たびか変転してきた。新しい息吹、新しい力が言葉にいのちを甦らせてきた。その言葉で人間が生き働き、生活しているなら、必ずどんなに時間がかかっても、言葉は再びよみがえる。言葉の時の流れのなかで、「人間は固有の言葉を拓き耕さねばならない」と考えた者が、言葉の今を引きうけそして次につなぐ。それ

が人間である。このようなころざしをもって、青空学園で日本語を考えよう、それがわたしたちの出発であった。

と書きました。

南海 では、哲学を数学に直して次のようにいえばどうでしょうか。

いまからおよそ百年以上も前に、日本は、西欧から、「数学」を輸入し、それを移植しました。そのために、多くの数学的な用語を新たに翻訳し、新語を作りだしました。それらの言葉はすでもはやわれわれの言語と思考の完全な一部となっています。

となります。この一文にはそんなに違和感はありません。北原 しかし、輸入したのは「数学」なのか。和算がすでにあったではないか。輸入したのは「数学記述の形式」ではないのか。

南海 確かに。数学では数学的現象そのものは存在し、明治になって輸入されたのはそれを記述する形式、方法であったのは確かです。その方法はやはり優れたものであってその形式を得たからこそ急速に進んだのです。

「数学」を「数学形式」とすればおおむね妥当な表現です。では「哲学」ではどうなのでしょう。

北原 哲学ではそのように記述の形式を分離しそれだけを輸入するということはあり得ません。実際、小林さん

は「哲学」そのものを輸入したといっています。しかしそうなると、いったい哲学を輸入することは可能なのか、ということになります。

輸入された哲学を受けとめることができたとすればそれはすでに哲学があったからであり、本当に哲学のないところでは輸入しても理解し得ない。このような原則論はともかく、「哲学の輸入」が何を意味するのか、定義されていません。また、この発言はブラジルでのものだということですが、いったい哲学の輸入はブラジルではどのように理解されるのか。

また、哲学とは言葉の形式そのものではないかという見解もあります。ですから私は、「哲学を輸入した」というような言説そのものを疑おう、といっているのです。このところを省みることなく「それらの言葉はすでにみややわれわれの言語と思考の完全な一部となっています。」というに至っては、ここに哲学はない、といわざるを得ません。

南海 それでもういちど日本語での哲学を考えなおそうというのですね。しかしそれは数学をもういちど記述形式にかえて考えなおそうというに等しいことではありませんか。

北原 哲学世界で、これまで近代の言葉で考えられてきたことを清算しようということではありません。現在哲学としてなされる言説のすべてが空しいとはいっていま

せん。言葉はそれでも方法であり、伝えるべき内容が切実であれば、そこには聴くべきことがあります。

その一方でやはりもういちどわれわれの言葉で考えようということも必要だと思っています。考える内容とそれを表す形式としての言葉の表現可能性に無頓着な思索は、結局は空しいということは譲れません。

その結果、ただだけのことが問題になるのかはわかりません。ただ、言葉への問いなしに哲学が哲学であり得るのかという問いは回避できません。近代日本語を問わなければ言葉を問うたことにはならないということもまた譲れないところです。しかし、このような議論はいくらいつても堂々巡りです。なしうるところから、言葉の意味を吟味しなおしながら、現代をとらえ直してゆくことはありませんか。

ものとひとの輝き

南海 構造日本語で最も基本となるのは「もの」です。そして現代の根本的な様相を「ものを見失っている」ととらえたのです。資本主義世界とはものを見失う世界である、このように考えています。

「もの」という言葉は日常あふれています。しかし「ものづくり」、「それが人生というもの」「もののけ姫」の「もの」がなぜ同じものであるのか、あらたまってまじめ

に考えることはありません。またそれが大切なこととして学校教育で教えられることもありません。用いる言葉への反省作業、これが一般的になること、これは近代のための前提条件ではないかと思えます。

北原 そうなのです。「もの」は定義集では次のように書きました。またそもそも青空学園のはじまりはこの言葉を近代があまりに扱っているのではないかということでした。用例を省いて載せます。

【もの】[mono]

■「心」[kokoro]―「括る」[kukuru]、「所」[tokoro]―「作る」[tsukuru]からすると[monu]とどう言葉があったのではないか。絶対的に定義される場である[ma]と、相対的に定義される場である[ma]、あるいは宇宙空間としての「ま」と大地としての「な」、つまりはありとあらゆるものにかかわることが[monu]であり、その根拠としての[mono]であったのではないか。

□タミル語「man」に起源。

◆定め、きまり。ここから意味が深まり、定めやきまりの根拠として、人が見ることができものを「もの」という。さらに思いを寄せる対象としてとらえることができるすべてのものをいう。見たり思ったりするその視線にあるものが、「もの」としてとらえられる。「もの」を「もの」としてとらえるのは、まず

「見る」働きあるいは「思う」働きである。そして見たもののことを言葉で切り取る、つまり考える。逆にこの認知作用が成立するものすべてが「もの」である。これが第一義である。

生起し消滅するすべてのことは、不変の存在であるものが担っている。諸々のことが生起する土台にある「もの」は、人の力の外にあり人が変えることはできない。ここから既定の事実、避けがたいため、さまざまの規範など、を表す。しかしまた「もの」は人に対して無関係に存在するのではなく、逆に人との関係においてつかまれ、人をひきつけることもに、ひきつけてはなさない力のある存在である。これが第二義である。

「もの」は、物と心を切り離す二元論の「物」とは異なり、「思い」や「まごころ」と切り離されていない。それどころか「もの」はそのものへの「思い」を引き起こし、見る者のいのちに関わる力があるものとしてとらえられる。つまり「もの」は人に働きかける。もの自体が人が恐怖し畏怖する対象となる。鬼や悪霊など明確にはわからないがしかし人間に働きかけるものを表す。

さらに、接頭語や接尾語など文章構造のなかでも存在するもの一般を意味して用いられる。形は多様に分化している。しかし「もの」の基本的な意味は用

法の違いを越えて一貫している。

※「もの」に対して「こと」「は生きた動きである。「こと」が成立している「とき」から我にかえって人は「こと」が成立する前提として「もの」の存在に気づく。人間にとって「もの」は「とき」を超え「こと」によらず存在する。

▼何らかの、個体として認識されるすべての存在をいう。ものと判定するのは認識であり、人間がものとして認識するのである。

▼具体的な物質的なものではなく、人がどうすることもできない不変・不動の原理や存在を表す。

▽相撲の「物言いがつく」は、「異議を唱えることである」、相撲の原理に照らして勝敗の判断に異議あるときになされる。「ある立場の人がお互いの関係のあり方として当然言わなければならない」言葉、原則的・原理的な言葉である。

▼「言う」や「思う」の前に置かれることによって、明確には言えないが意識の対象となる存在を指し示す。この「もの」がおかれることで「言う」や「思う」は概念としての「言う」や「思う」ではなく、具体的で現実的な行動であることが意味される。

▼人が恐怖し畏怖する対象を表す。

▼人を表す。この場合人をものに見下す気持ちがある。

もっている。

※「もの知り」とは「もの」の「ところ」を知りうる人のことである。「もの」としてとらえた中にあるはずの道理を「もののあるところ」という。

※「ものがたり」は「もの一かた一る」で、「かた」つまり「形」がさまざま「型」に定式化されたことを述べる「語り」に、「もの」が接頭語としてつくことで、「世の原理・法則を知らしめるためののべる」ことを意味する。沖繩「ムンガタイ」で昔話を言うが、これは「物語」そのものである。一方「ことのかたりごと」(古事記「八千矛神の歌」「天語歌」あまがたりうた)の結び)は一回的な歴史的な事件について語る。

北原 「もの」と「こと」、およびそれらを対象にする頭の働きである「思う」と「考える」は、それぞれ対をなし、これはまったく異なる意味である。このときに西洋語の二分法にあわせるために「思考」を作りこの対象としての「物事」という言葉を作った。しかしではこの漢字熟語の意味を日本語の中から定義することはできるか。あるいは、「思う」と「考える」の違いをおさえたうえで改めて「思考」を定義しなければならないのではないか。この課題を考え続けることが青空学園の基調でした。

これを踏まえてこれまで書いて来たものなかで「も

の」の意味を次のようにのべました。

世界のすべては「もの」である。ものほど深く大きいものはない。この単純な事実を土台にする。この世界は「もの」からできている。森羅万象、すべてはものである。これが世界である。まずこれを明確にしよう。この世界は「もの」そのものである。人もまたものの一つの形である。人はこのものを両手で受けとめ、思いをよせ、じっと見、そしてそのものこのことを考える。ものに語りかけ、ものの変化を促し、ゆたかな実りをものから受けとる。ものがすべての根本である。

ものは存在し、たがいに響きあっている。これが事実である。世界はそれしかない。そのなかで、人ともとは豊かに交流しあい、語らいあう、これが世界の輝きである。

ものは、いわゆる物質と精神と二つに分ける考え方で物質とは、まったく異なる。このような二分法ではない。「もの」は実に広く深い。この深く広いものを日本語は「もの」という一つの言葉でとらえる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

南海 近代西洋思想は、このような意味での「もの」を見失ってきたのですね。そして近代日本の表層の思潮も

また「もの」を見失ってきた。

北原 いちがいにそのように言うことはできません。しかし、資本主義と産業革命に向かう流れは確かに「もの」を見失ってきた歴史であるといえます。その基本的な転換は古代ギリシアにあった。それについて次のように書いたことがあります。

古代ギリシア思想 私は「万物のアルケー(始源、原理、根拠)とは何か」を問うた「ソクラテス以前のギリシア思想古代ギリシアは「もの」をつかんでいたと考えています。

生物種としての人は数万年におよぶ協同労働の過渡期に協働体を発展させ、この過渡期を経ていわゆる社会、を生みだし人間となった。「社会」は実際には階級社会だし、それ以外ではあり得ないのだが、人間はその社会のなかにあることによって自己の位置を反省し考えることを身につけた。古代社会が成立しさらに数千年の時を経て、初期ギリシアで人間は世界を「もの」として再発見した。このときの驚きと喜び、これが初期ギリシア思想には満ちあふれています。

タレス (Thales) (B.C.624?~B.C.546頃)は、万物の根元は水(ヒドール)であると主張した。タレスは紀元前五八五年五月二十八日に生地・ミレトスに起きた皆既日蝕を予言し、エジプトの実用幾何学を

輸入して理論的な幾何学研究を始めた（ピラミッドの高さを測量した）。タレスの弟子のアナクシマン드로ス（Anaksimandros）（B.C.610～B.C.540頃）は、万物はのアルケー（始源、原理）は不死不滅で永遠に自己運動する物質。トアペイロン（無限のもの、無制約なもの、無限定者）である、「生成する事象は、時の秩序に従って、相互にその不正をあがなわなくてはならない」といった。タレスの孫弟子になるアナクシメネス（Anaksimenes）（B.C.546頃盛年）は万物は氣息（ブネウマ）、空気（アエール）であり、万物は空気の濃淡によって生成するといったのです。

初期ギリシャ思想の肝心な点は、それが内因論であることである。万物は、「水」という「もの」、「無限のもの」、「氣息（ブネウマ）、空気（アエール）」という「もの」なのである。万物の根元としてとらえられたさまざまな「もの」が、内部の要因によって生成発展することへの驚きと、生成発展の輝きを見た喜びと、世界の意義を聞きとった感動にあふれています。

プラトン以降の西洋思想は、初期ギリシャ思想のアルケーとしてあげられた根本物質が生きて動き千変万化するという自然学説を「物活論（hylozoismus）」と呼び、初期ギリシャ思想を初歩の幼いものとして相対化してきました。

そこには貴族思想がある。生産労働を奴隷に任せる以上、作るべきものの理念と実際の作られるものが分裂する。設計図を書くものとそれにもとづいて作るものの分裂である。この分裂のなかで初期ギリシア思想の「もの」は見失われた。このように古代ギリシア哲学は、プラトンの時代に大きく転換したのです。

そしてその分裂は今日まで続いています。プラトンの時代にはじまる西洋世界は、資本主義を生み出し産業革命にいたり、帝国主義として世界を支配してきた。

私は、初期ギリシャの「叡知を愛する人」（ハイデッガーはこのように言ってプラトン以降の思想との区分を明確にした）に共感します。

北原　そして明治近代化のなかで日本語もまた「もの」を見失ったのです。

南海　この意味でそのとおりだと思います。しかし明治革命が資本主義を導入するとするならば、「物事」「思考」という言葉を作ることによって「もの」を人びとから隠したのにはそれなりの理由があったということになります。「もの」「こと」という現実把握は、精神と物質、見られるものと見られるものの二分法をはみ出してしまいます。

北原　確かに。そのように考えると、明治期に作られた漢字造語は古代からの日本語を隠すために必要であった

のかも知れません。しかしそれを隠しきることなどできません。なぜなら、「もの」のような基本語は日本語の中でつねに用いられるからです。そして漢字造語で隠され押しこめられてもそれは噴き出すように表に出ることがあるのです。戦前の侵略戦争に突き進んだその根底には、この力があつたのかも知れません。

南海 だからこそ、これらの言葉を自覚的につかむことが近代の二重性のうちにある人間が、この二重性を打ち破つて自分の近代を獲得するために必要なのですね。

北原 そのようにいうことができます。もつと積極的に「もの」を再発見することが、次の時代をきり拓き支えるための言葉となると考えています。

資本主義は二十一世紀に至って一つの極限に達し、このままでは世界が立ちいかなくなるのが心ある人の目には明らかになっています。しかし活路は未だ見いだされていません。この時代に再び「もの」を考える土台に置くことは、深い意味のあることです。

百年前に日本語で「もの」を第一とすることを主張したのは、中江兆民である。兆民は『続一年有半』において次のように宣言した。

余は理学において、極めて冷々然として、極めて剥き出しで、極めて殺風景にあるのが、理学者の義務否根本的な資格であると思ふのである。故に余は断じて無仏、無神、無精魂、即ち単純なる物質学的

説を主張するのである。五尺軀、人類、十八里の雲囲気、太陽系、天体に局せずして、直ちに身を時と空間との真中《無始無終無辺無限の物に真中ありとせば》において宗旨を眼底に置かず、前人の学説を意に介せず、ここに独自の見地を立ててこの論を主張するのである。

兆民は「単純なる物質的学説」の主張を宣言しました。理学はこの兆民の立場を継承することをころざしたのです。兆民が「物質的学説」でいう「もの」は、物心二元論にたつ「物質」とは違います。またいわゆる機械的唯物論がいう「物」とも異なる。まさにそれは「もの」であつた。

一、ものは確かにある。見たり思つたりすることができ
るものが「もの」である。すべてものは人と係わり、
人と係わる一切がものである。ものとは思いをよせ
る方にあるすべてのものをいう。「もの」を「もの」
としてとらえるのは、まず「見る」働き、あるいは
「思う」働きである。そして見たものを言葉に切り取
り名づける。逆にこの認知の営みが成立するすべて
のものが「もの」である。思うことよつてものと
して切り取られ名づけられてものが成立する。これ
がものである。

二、ものはそれ自体で存在している。人がものに思いを

よせ、ものものを考えるのはなぜ可能か。それはそこに、ものが確かに存在しているからである。それがものである。そのものは、諸々のことが生起する土台にあり、人の力の外にあり、存在をなくすることはできない。ものはもの自身の力で動いている。であるがゆえに、人がものを思うのは、実はものにひきつけられてはじめて起こる。ものは人間をつかむ。ひきつけてはなさない力のある存在である。

三、人もものである。人もまたものの中から生きる。ものを思い、ものものを考え、ことの内容を聞きとる。それはものが人にはたらきかけることであり、人はものからはたらきかけを受け、人生を変え、そしてものを動かす。人あつてのもの、ものあつての人である。ものは人と無縁に存在するのではない。切実な働きかけと真剣な受けとめ、そして決断、こうして、人は無限に向上する。これが人生である。

人生は厳格です。この世界もまた厳格です。「練習通りにやる」「自分の相撲を取る」。これはこの厳格さをそれぞれの道において言っている。その厳格さ、その自覚が「もの」としての把握の根底にあります。「人生とはそういうものだ」ということです。

南海 厳格であるからこそ、じたばたしてもだめなのですね。一方で、なるようにしかならないと何もしないのも厳格ではない。人間とは「どうでもいい」と投げやり

になることもなく、じたばたすることもなく、生あるあいだ生きてゆくものなのですね。能動的に生きることができればそれが人生なのですね。

北原 そう思います。私は考える枠組のなかに創造神を置きません。そうするとしかし、神のない時代に、この厳格さの根拠は何か、という問うが出てきます。いまそれを考えるとわからなくなりますが。ただ、わからなくてもよい、とも思うのです。この厳格さに直面すればよいのではないか。「もの」はそういう人生を人に教えます。

「もの」という認識は人間の営みです。人間が世界の存在をものとしてとらえる。ではその人間はどこから来たのか。ものからきたのです。この意味で「もの」はものの自己認識である。

「もの」は人なくしてはあり得ない。一方、人はものに魅入られ人となる。このように考えることもできます。そして、このように考えること自体は、世界外の視点です。

「もの」を発見した驚きと喜び、このときの輝きが実質の内容、「もの」の「こと」である。世界はものと人の交流として輝いている。その内部の構造をもう少し立ち入って考えてみたいのです。

言を割ること

北原 「もの」と対になる言葉が「こと」です。これについても『定義集』「こと」に基本的な意義を述べておきました。「こと」は「言」でありまた「事」でもあります。

【こと】 [koto]

■ [koto]は「型」[kata]と同根。無秩序であったものが意味をもつて一つにまとまること、これが「こと」の原義である。「くち(口)」「kuchi」とも同根。「くち(口)」の古形は「くつ[kutu]」である。「くつわ(轡)」「くつ(口)わ(輪)」の意に残っている。「kutu」は、「[k]」(食う)と「[t]」(作る)が統合された言葉で、言葉を言うことである。ことばになることによって、無秩序なものがまとまる。沖繩で「くち」は言葉の意味である。言葉を言うことによって「こと」[koto]が成立する。あるいは逆にことばの根拠が「こと」である。

□タミル語「katan」起源。

◆言葉の行為を成り立たせている根拠であるから、いわれた「こと(言)」といわれる「こと(事)」のさらに根底にあって、それらを成り立たせている、つまり世界を意味あるものになっている働きや法則や理法をもつとも一般的にいう言葉である。

「こと」は日本語でもっとも基本になる言葉で、その意味は深く大きい。人にとってこの世界は、動き、

生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それを人は「こと」のはたらきとしてつかむ。「こと」は、人が自らの諸活動と自らが生きる場所に生起する内容をつかもうとするとき、のべられる言葉である。

「こと」そのものは言葉にならない。山の光景にわれを忘れ、職人が制作に没頭し、全精神を傾けて仕事に打ち込んでいるとき、人は「こと」のうちにある。そしてわれにかえり反省が生まれる。そのとき体験した「こと」を言葉にする。把握するという行為は、生きた事実から命名された概念への転化であり、直接の出会いから概念としての把握へ転化する。事実としての存在が本質としての存在に転化する。

つまり「こと」は、「こと(の)は(端、葉)」としての「言葉」に現実化する。「こと」それ自体は、「言葉」ではない。「言葉」は「こと」の現実の形であった「こと」そのものではない。「こと」は「言葉」が成立する土台であり、「言葉」につかまれる以前の本質を指し示す(指し示そうとする)言葉である。

「もの」の世界に意味を見いだし、これを一つの「こと」としてつかむ。このとき、「こと」として「つかむ」「私」が確立する。また、「こととしてつかむ」ときに、意味を成立させる「とき」が生まれる。「時」の成立である。「こと」としてつかまれた内容は、人

には「時間的に経過する一連の出来事」として意識される。そのように統括してつかむ作用が人間の認知行為である。

「こと」「言」は漢語の影響を受けて「言」と「事」に分化して用いられるようになる。日本語の根底には「事」は「言」を与えられてはじめて「事」として存在するという考え方があった。したがってこの分化が意識されても、意味は相互に転化しうる。

▼次の例は、「言」と「事」への分化以前の「こと」である。この「こと」は現代日本語では、他の語句を受けて、これを名詞化し、その語句の表わす行為や事態を体言化する形式名詞としての用法のなかに生きている。ある内容を「こと」としてまとめる働きをするのが、本来の「こと」の基本である。

■「彼が知っていることがわかった」という例では「彼が知っている」ということ(事)がわかる」という意味の場合と「彼が知っている内容がわかる」という意味の場合がある。これを区別するため、「の」で行為そのものを指示する用法が発達した。「彼が知っているのがわかる」といえば、「彼が知っているということ(事)がわかる」の意味に確定される。「彼が話すことを聞く」といえば話の内容を聞き取ることを意味し、「彼が話すのが聞こえる」といえば彼の「声」という「もの」を認識することを意味する。

▼いのちの持続がことである、そこから生命を表す。◇「こと切れる」◇『源氏物語』幻「いみじきことの閉ぢめを見つるに」

■この用例は、「こと」の持続が、いのちそのものであることを端的に示している。それはどういふことか。「こと」としてつかむことはいのちの働きそのものであり、またつかまれる内容はこの世界の息吹そのものである。「こと」はこのような人の営みが成立する土台としてのいのちそのものをも指し示す。

▼言葉を表す。古代は多くの用例があるが、近代になると「こと」は「事」の意味を主に表し、言葉を表すときは、「言葉」「言語」を用いるようになる。

▼事実を表す。古くから「事」をあてて用いられてきた。中世以降この意味で用いられることがほとんどになる。

※「もの」と「こと」

日本語では「もの」と「こと」は厳格に区別され、言葉の構造の骨格を形づくる。最も基本的な構造日本語が「こと」と「もの」である。次の例で「もの」と「こと」を入れ替えると明らかに意味をなさない。◇まあ、人のいることいること。◇出がけに不意の客がきたものですから。◇人生はむなしなもの。◇なるとばかげたことをしでかしたものだ。◇教えてく

れないんだもの。◇きれいな花だこと。

「もの」と「こと」は取り違えることなく使われる。意味をいちいち判断して使うのではなく、発話者の意図と言葉が一体になっているから「もの」「こと」は正しく使われる。日本語の構造と言葉の意識が一体になっている。「もの」の一連の世界を一つの「こと」としてつかむのは人の認知作用の根幹である。日本語の「こと」という言葉が生まれたのは、考えてみれば不思議である。言葉というものはたつきそのものを言葉にした言葉が「こと」である。

「こと」は事実の発見の意識を表現し、「もの」は個人の力の及ばないものの存在を表現している。「もの」が世界を「見る」ことよって切りとられるのに対して、「こと」は世界に耳を傾け「きく(聞く、聴く)」「こと」よって言葉としてつかまれる。

「もの」が対象であるか、「こと」が対象であるかは、ほぼ動詞の意味によって定まっている。◇見たいものがある。差し上げたものがあります。◇聞きたいことがある。話したいことがある。悲しいことがあった。

しかし◇書きたいことがある。◇書きたいものがある。同じ「書く」であるが、「書きたいこと」は筆者の内面を表現しようとすることを意味し、「書きたいもの

の」では報道など客観的事実を書きあらわして伝えようとすることを意味する。

※「こと」は日本語でもっとも意味の深い言葉である。「こと」という言葉があるがゆえに、「こと」そのものとは何か、と考えることを人に促す。それは結局この世界の生きた存在そのものであり、「こと」は人に対して、世界と直接触れることを促す。「こと」は言葉が途絶える境まで人を連れていく。「こと」を紡ぎだし今日に活かしているなかに、人の、あるいは世界の、あるいは命の、深い智慧がある。「こと」を西欧近代の「学」でとらえることはできない。「こと」を「学」の対象とするときそれはもはや「こと」ではない。「こと」の現実態としての「言葉」を「学」の対象とするとき、言葉の最も肝心な「こと」が捨象される。

南海 「こと一なる」とつながると「異なる」となりま
す。ここには「こと」を取りあげると何かと異質になる、
という言葉の使い方が「こと」あることを示しています。
これはどういふことなのでしょう。

北原 それは日本語の一つの傾向、思想性が関係して
います。「こと」を「こと」としてとりあげられることを「言
挙げ」といいます。言挙げについて考えなければなりま
せん。

『古事記』(人代編其の三、景行天皇)にヤマトタケル

の言葉「爾に言挙（ことあげ）して詔りたまひしく」があります。ヤマトタケルが「この白い猪に姿を変えているのは、この山の神の使いであろう。今殺さずとも、かえるときに殺せばよからう」というのです。実はこの猪は使いではなく山の神そのものだった。それを見抜けず偽りの言葉を口の端に載せた。山の神がにわか荒れ、平らげることができずに山を下った。以上は『口語訳古事記』（三浦佑之）によります。

「言挙げ」は「ことばに出して相手にいうこと。ことばに出して論ずること。」（『国語大辞典（新装版）』）が原義ですが、神などに対して慎みなく挑発的な言葉を口に出すこと。声高く言い立てることという意味を含みもっています。

『万葉集』を見ても次のような例があります。

九七二「ちよろづの いくさなりとも ことあげせず
とりてきぬべき をのことぞおもふ」

三二五三「あしはらの みづほのくには かむながら
ことあげせぬくに しかれども ことあげぞわがする
ことさきく まさきくませと つつみなく さきくい
まさば ありそなみ ありてもみむと ももへなみ ち
へなみしきに ことあげすわれは」

言挙げする、つまり言葉を発するのは禁忌である。しかし、危急、肝要の折には言霊の力が求められ言挙げがおこなわれたのです。

南海 それで「ことわり」も「断る」になるのですね。『兆民の遺言』で次のように書きました。

「ことわる」はこれまでの日本語では漢字に「断る」をあててきた。これは何を意味しているのか。一つの家や村やなどの内で「こと」を荒立てることは、日常生活において当然のように流れている毎日の時間を断ちきることであった。それがつまり「こと」を割る「こと」であり、日常生活を「断る」ことであった。協働の場の慣習的な任務に異議を唱えることが「ことわり」であり、したがって日常生活を「断つ」ことを意味する漢字が当てられた。

しかしわれわれは人のいのちのいなみそれ自身が「ことわり」であり、さらにそのうえで「語り」であると考え。人が生きるということは何かしら「こと」を荒立てることなのである。この現実を覆い隠すことはできない。

北原 「ことわる」は「ことわるまでもないことだが」のような用法を仲立ちにして、最後は拒絶するという意味まで連続的にふくらんでいったのだと思います。ここには、言挙げしないことがよいことだという価値意識があることは確かです。

「ことわる」の原義は言挙げとほぼ同じです。そして「ことを割る」ことで明らかになることを「ことわり」というのです。「ことわり」は「もの」の本質、理法、内容、

意義、意味の土台となることです。漢字では「理」をあてます。

このように日本語では「こと」という言葉は大変重い意味を担ってきたのです。それを次のようにまとめました。

一、ものの集まりに意味を見いだし一つの「こと」としてつかむ力が人にはある。その力が人を人間に定めている。人が「もの」を相互に関連する意味あるものにあつまりとしてつかむとき、そのつかんだ内容を「こと」と言う。話者と世界の関わりを、話者が統一してつかんだとき、それが「こと」である。人にとってこの世界は、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それを人は「こと」としてつかむ。

二、山の光景にわれを忘れ、職人が制作に没頭し、全精神を傾けて仕事に打ち込んでいるとき、人は「こと」のうちにいる。そしてわれにかえり反省が生まれる。そのとき体験した「こと」を言葉にする。こととしてつかむ行為は、ものの生きた事実から、名づけられた言葉への転化であり、ものとの直接の出会いから、人間の考え方、つまり概念としての把握へ転化する。これが経験である。事実としての存在が本質としての存在に転化する。「こと(の)は(端、葉)」としての「言葉」に現実化する。

三、ことそのものは言葉にならない。ことそのものは、有為転変する世界をこととしてつかむ行為の土台であり、その前提である。人はこれを神としてとらえてきた。「みこと(御言)」は神の言葉であった。今われわれはこれを「こと」そのものでつかむ。ことは直接に知るものであり、名づけるものではない。「こと」が、ものからものへ、あるいはものから人へとどけられ、新しいものが「なる」。

南海 ことを割ることは人間が生きてゆくことそのものではないでしょうか。生きてゆくことはいずれにせよ一つ一つの困難と向きあっていくことです。「もの」としてとらえられた人生の厳格さを聴きとり、それを自己の生き方に表す、それが「ことを割る」ことです。人生とはことわりの人生だということもまた、人生の厳格さです。北原 そうなのです。この事実に気づいてほしいです。また、「もの」と「こと」への思索は、人生の有り様を否応なく教えるものです。

「もの」に思いを掛けものの「こと」を聴く。ことが開かれ、人生が動く。「こと」は開かれるものなのです。「開かれる」という動きは、「開かれるとき」という「とき」を定めます。ですから「こと」は「とき」と一体です。「とき」とは何か。これほどあつてないようなものはない、しかもこれほど切実なものはありません。なぜ「とき」が切実なのか。人間が死へ向かう存在であり、人生

に限りがあるから、これが一つの理由です。

さらにまた、死へ向かう存在であるから、人間は生きている今というときを問うのではないか。今を問うことは、人生の意味を問うことであり、時代の要求とそれに対する自己の存在意義をつかむことです。

「もの」のつながりを一つの「こと」としてつかむ。「こと」としてつかむ「ときに」、「とき」が生まれる。「時」の成立です。「こと」としてつかまれた内容を反省的にとらえたとき、人は「時間的に経過する一連の出来事」としてつかむ。

南海 「とき」とは時々刻々のときであって、一定の間というときではないのですね。

北原 ことが開かれ、それが持続している間として時間 は定まります。この「とき」をはじめて徹底して究めたのが、日本国の鎌倉時代初期の仏教者道元です。道元は「こと」と「とき」の生きた構造を直接につかみ、そして語ったのです。道元は、原著『正法眼蔵』のなかの一卷「現成公案」のなかで、『身心脱落』について次のように言っています。

仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするなり。自己をわするといふは、万法に証せらるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心、および他己の身心をして脱落せしむるなり。

これは実に、「こと」が開かれているときの言葉です。この内容を対象化して述べるのではなく、その場から言葉を発する、その跡が『正法眼蔵』です。自己が自己を脱落して「こと」が開かれた場での言葉です。道元は『正法眼蔵』「有時」において、

時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。

とのべる。ここでいう「時」とは、まさに「ことが開かれるとき」である。道元はさらに

尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時なり。

ともいう（同）。ものはすべて「つらなりながら」、つまり大いなる「こと」のもとにおいて、あるのであり、しかも一つ一つが生きて時時なのである。「有時」なるときは「こと」はそれ自体にある。『正法眼蔵』の述べたことは、「もの、こと、とき」の世界の基本構造そのものではないでしょうか。

南海 道元の思想が、ものやことをつかみ直すことで甦るのですね。

北原 道元の発心・求道はまったく内部からのものであり、さらに天童山での道元の経験は、「中国からの刺激」ではなく中国や日本という文化の制約をこえた普遍的な

もので、如浄もまた、普遍的な立場から道元に法を嗣ぎました。道元は自分の経験を述べるために、自身は堪能であつた中国語を漢文として使うことはしなかつた。中国語に堪能であつただけに、漢文式日本語の叙述に入り込む理の空白を道元は十分に認識していて、そうしなかつた。

道元は、当時の日本語の枠組みのなかに中国語から漢字語を切り取って、独自に自己の経験に裏打ちされた意味をもって配置する、という方法をあみ出した。当時の日本語の条件のなかでそれ以外になかつた。「山水経」のなかの「而今の山水は、古佛の道現成なり」というこの「而今」を、他に訓読みしうる表現で言うことはできなかった。言葉をこえた普遍性を獲得し、言葉からも自由な地点から逆に言葉を駆使した。正法眼蔵は、日本語の現実に立つて普遍性を獲得する可能性を示すものだと思います。

道元はもまた日本語に蓄えられた智慧を、そのときに一歩深めて『正法眼蔵』としてのべたのである。その「発菩提心」において次のように言います。

衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度先度他のこゝろを、おこさしむるなり。自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われほとけとならんとおもふべからず。たとひほとけになるべき功德熟して円満すべしといふとも、なほめぐらして衆生の成仏得道に回向するなり。この心、われにあらざ、他

にあらざ、きたるにあらざといへども、この発心よりのち、大地を挙すればみな黄金となり、大海をかけばたちまち甘露となる。これよりのち、土石礫礫をとる、すなわち菩提心を拈来するなり。水抹泡焔を参ずる、したしく菩提心を担来するなり。

北原 人に「人のためにと考えて生きる」生き方を勧めていくことこそが、人間が生きるうえでの意義である。人間がなにをなすべきかを端的に述べている。この言葉がよく味わいたい。非情の求道心と無限の向上、この道元の生き様は、人間の心の支えです。

南海 「自未得度先度他」とはいい言葉ですね。道元にあっては、「もの」と「こと」そして「とき」をその場に居ることで明らかにすることが、菩提心を起こす根拠ともなっています。宗教といわゆる哲学的思索とが一体であり、境はありません。

北原 そうです。この言葉が、ものが開かれた身心脱落の場で行われていることは、意義深いことです。宗教とそしていわゆる哲学的思索とが一体となった学を青空学園を求めてきました。

北原 さて、「もの」と「こと」はそれぞれに別々なのではありません。「もの」は「こと」にしたがい生成変転し、「もの」が生成変転することの意味が「こと」である。この一体のはたらきを「いき」という。ことと一体になったもののはたらきを「いき」という。この世界の輝きと

響きは「いき」の発現であり「いき」そのものである。

「いのち」は、「もの」の一つの存在形式である。「もの」と、ものの「こと」と、ものがことにしたがってたたく「いき」が、世界のなかで一つの単位をなすとき、それはいのちである。

世界はいきいきと輝き運動を続けている。人間もまたこの世界のなかでいつとき輝きそして生を終えてものにかえる。そのいつときを「いのちある」ときという。いのちあるとき、それを生きるという。人が生きる内実は、「こと」の内に入って「こと」をつかみ、人生を動かしていくことである。この営みを「ことをわる」という。人生とは「ことをわる」営みそのものである。

「いのちある」というその「いのち」そのものはことばにならない。世界が、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それはいのちの発現である。人間がいのちあるのもまたいのちの発現である。人間が生まれ、そして帰っていく大元であり、人間にさちを贈る大元でもある。

いのちは深い。いのちの発現は、つねに、ことをわるはたらきという形でおこなわれる。それが人間の存在の基本構造である。

一、人のいのちがはたらくとき、そのところで、ことは言葉となる。いのちは、ときであり、世界の輝きであり、世界の意味である。ものはたがいにことわり

をやりとりしている。つまり、もにはたらく場において「ことわりあう」「語りあい」「語らい」である。ものが語らう、これが世界である。ものが語らい響きあうとき、そのことそのものとしてことわりはひらかれる。

二、ものの内部の語らい、ものあいだの語らい、この語らいこそが内部からことを明らかにする。語らうことよってものはより高くまた広いところに立つ。問題自身のなかから解決の道を見いだすことができる。人もまた、語らいよって、独りよがりな思いこみから解放される。語らいこそ世界を動かすちからである。

三、人が生きてはたらくことは、ものとひととのことわりあいそのものであり、世界との語らいである。人がこの世界で一定のあいだ生きること自体、ことわりである。いのちあるものとしての人は世界からものを受けとり生きる。それがはたらくということである。直接のもののやりとり、つまり直接生産のはたらきこそ、いのちの根元的なはたらきであり、その場でこそもつともいのちが響きあい輝く。人と人はことをわりあい力をあわせてはたらく。つまり、人は語らい協同してはたらく、つまり協働することで人になる。

北原 「いのち」は近代資本主義のなかで再発見される。

ものを生産し価値を生み出す労働の源泉としてのいのち、である。資本家の側からいえば「殺さず、生かさず」の内容としての「いのち」である。近代になって再発見された「いのち」を普通は「生命」という。

生命は、生命体を構成する物質と、物質を組織する情報と、そして情報と物質を結合する働きとで、成り立つ。情報と物質は生命の不可欠の要素であるが、しかしそれだけでは生きたものとはならない。生命はこの二つの構成要素を生かす働きがあつてはじめて成立する。「いき」はこのような「いのち」の三位一体構造の根幹をなす。いのちをいのちとするこの根元的な働きが「いき」である。

これが生命である。「物質・情報・機能」が集まっただけではいのちにはならない。これを一つのいのちにまとめあげる働き、これがいのちの本質である。この側面は実際のところ近代科学からは抜け落ちている。日本語はこの問題を言葉にしてきた。それが、「もの・こと・いき」として日本語に組み込まれた生命の存在構造である。「もの」と「物質」、「情報」と「こと」、「機能」と「いき」は相互に対応するがしまつた次元の異なる言葉である。「もの・こと・いき」はいのちにまとめあげる働きをもつかんでいる。

ともに受ける

北原 民の言葉こそが本当の「こと」である。つまり「まこと(真言)」である。その根拠は「民」が働く人であり、実際に自然と交わる人であり、人間が存在する形そのものの人だからである。

民についても少し考えを進めたい。民[*famij*]は万葉集にも出る古い言葉であるが、田一人(臣)[*ta-omi*]から来ているのではないかと思われる。田で働くものという言葉である。

「田」とは何か。「耕す」とは何か。構造日本語定義集では次のように書きました。

【た】[*ta*(田)]

■[*ta*]は「たから(宝)」、「たかい(高い)」、「たかい(貴い)」などととも、[*ta*]を共通にする。[*ta*]は「得難い立派な」を意味した。

□タミル語 < *taṃp-al* > が「田んぼ [*taṃb-o*]」になり、また、タミル語の語根 [*taṃp-*] から末尾の [*mp*] が脱落して [*ta*] となる(大野『日本語の起源』)。

「田んぼ」は泥田、水田を指す。紀元前九〜十世紀の頃、タミル人が日本列島にもちこんだ技術である。稲作そのものは縄文時代から行われていた。タミル人がもちこんだのは技術としての水田耕作である。

栽培されたいなそのものは在来種であったかも知れない。

水田でない耕作地は「畑〔atagi〕」というが、後に「田」は乾田も意味するようになった。

◇『古事記』中・歌謡「なづきの多(タ)の稲幹(いながら)に、稲幹に匍ひ廻ろふ 野老蔓(ところづら)」
◇『万葉集』二・八八「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつ辺の方に我が恋ひ止まむ磐姫皇后」◇『源氏物語』若菜上「この家をば寺になし、あたりの田などの物の物は、みな、その寺のことにしおきて」

▼金銀・珠玉などの貴重な品。大切な財物。宝物。

◇『万葉集』八〇三「銀(しろかね)も金(くがね)も玉も何せむにまされる多可良(タカラ)子にしかめやも」◇『竹取物語』「宝と見えうるはしき事ならぶべき物なし」◇『竹取物語』「左大臣あべのむらじはたからゆたかに家ひろき人にておはしける」◇『小説神髓』坪内逍遙「たれかあまたの貨(たから)をすて演劇(しばゐ)観むと望むべきや」

【たがやす(耕す)】 [tagayasu] ← [takasu]

◆「もの」のできる「場」である「田」を「返す」ことよって、ものがなるようにすること。「たかへす」が古形、「田を返す」から来る。

▼作物を作るために田畑を掘り起こし、すき返して

土を柔らかにする。◇『今昔物語』「桑田といふは、たかへしおわりて未だ下ろさざる(種をまかない)をいふなり◇新撰字鏡「糞耕也 田加戸須」◇『お伽草子』二十四孝「かれが孝行を感じて、大象が来て、田をたがやし」

※人間の営みとは、場を耕すことよってものが成るようにする、ことである。人間は「もの」を直接には作らない。「田」を返すことよって豊に「なる」ようにする。「耕す・人」と「場の・田」とそして「そこになる・もの」の三者の相互関係が労働、ひいては人間の営みの基本的な型である。

民とは「耕す人」なのです。さらにまた民は問う人でもあります。

自己とは何か。世界とは要するに何なのか。いのちとは何か。自己のいのち、いのちの深まり。ひとりひとりのいのちと、大いなるいのちは、どのようにつながるのか。問いをかかえて、人はどう生きるか。人生の意味はどこにあるのか。人は自己のために生きるのか。人のために生きるのか。

まず問うことである。問える人になることである。問うことが人としての自立の一步である。

現在を転じることは出来るのか。不安、有限、死、世界の無意味を越える道はあるのか。そもそもなぜ越えねばならないのか。さらにまた、この輝きの覆われた世界

の現実を転換することは可能なのか。

人間がかかえてきた存在の不安と、今日の世界の閉塞とは、どのようにつながっているのか。あるいは別々のことなのか。宗教の経験、社会主義の経験はいかに生かされうるのか。問いがあることは転換が求められていることではないのか。必要性は可能性の根拠ではないのか。あたらしい智慧、あたらしい枠組みは可能なのか。

さらにまた、民はまた聴く人でもあります。

人間が生きていくのは、実に難しい。多くの悔恨と苦しみをかかえていかなければならない。それが人生というものである。人間の歴史はこのような苦しみの連続であった。いつの世も、一部の人間にのみ都合よく大多数の人間には苦しみの連続であった。また、なぜ自分にこんな理不尽なことが起こるのか。何か悪いことをしたというのか。こんなこともまた、つねにあり得る。

一方、人間はその本性として「人間としてよく生きてい」と願う。価値ある人生を実現したいと考える。しかしまた、「自分は何の価値もなく、いてもいなくてもいい人間だ」と思いこみ、引きこもったりあるいは自死したりする人がいる。これは大変難しいことであるのだが、他の縁ある人から見ても、なくてはならないその人の意義というものは、じつは己を空しくして人のために尽くそうとするなかでしか実現しない。「自分は価値のない人間だ」と考えることのなかには、未だ自己への執着がある。

現在の市場経済の下で支配的な考え方の枠組みは、自己に執着し、この世の中で成功することを価値あることとする。しかし、それは今の一時の価値観に過ぎない。本来人は言葉によって協同して働く命であり、その本性からして、「人のために」と考えて生きるところにこそ意義が生まれる生命である。

人間が考えるということは、結局はいかに生きるかを考えることだ。人間は、自らの仕事として何かをしようとする。何をなすべきかを知らんがために考える。考えたことを次に伝えていく。今日が転換を準備するときであることはまちがいない。ならばやはりこれしかないではないか。言葉によって言葉の限界にいたり、越えよ。無限の向上、ここに人生がある。

人間の存在は、大いなるいのちとしての大海に現れたひとりひとりのいのちのちとしてのさざ波のような面がある。縁によって起こり、また消えまた起こる。しかしこのさざ波はかぎりなく貴い。さざ波の一つ一つがかぎりなく貴いのはそれが大海のさざ波だからである。大海のいのちの事実であるがゆえに貴いのではないか。

問いを立てること自体は、世界を言葉でつかもうとすることであるかもしれない。分節はあくまで切り取ってつかむためのものであり、切り取るという営為によってつかめることは本体の影にすぎないかもしれない。分節される以前のこの大いなることを直接につかむことが出

来るのか。その道への問いかけをつねに考えていなければならぬ。分節することは、この大海をいろんな側面から見る事柄ではないのか。大海を自覚すること、あるいはこの大海を分節することなくそのまま飲むこと、その道があるのかないのか。

この大海をいまは「大いなること」といおう。すべてはこの大いなることのうちにある。生も死もすべてはこのことそのものである。ここに心を落ち着けよ。それはかぎりなく懐かしい。このような智が人には備わっている、といえるか。

南海 「大いなること」というのはよくわかることです。が、しかしまたいささか未熟な言葉でもあります。ただ、目先の経済ではないことをめざそうということはそのとおりです。

人間は近代にはいるまで、カネ以外のことに価値をおいて生きてきました。経済は手段であり方法に過ぎないことをわきまえていました。今日のように何もかもカネの世界になったのはそんなに古いことではありません。

北原 新石器革命のときから、人はこの大いなることを忘れ、このことから離れた日々を送ってきた。しかしまた一万年の変化転移を生み出してきたのもこのことである。このことを無意識に閉じこめ日々を過ごしてきた。そして階級が生まれ、社会が生まれ、資本主義が生まれ、そしてそれは今日行き詰まっている。

このこと、それは悲であり、いのちであり、一つである。人は懐かしさとして、このことに向きあってきた。このこととわれらを結ぶのが悲の風である。このことからあふれた仏教は、現実に存在するやつねにこの世を支える俗に墮してきた。

今、言葉に出来ることは少ない。だが、この大いなることのうちにあつて、分節しつつ大いなることを指し示す、そのような言葉を生み出してゆきたい。近代の壁を越える道はここにはじまるのではないか。

南海 なるほど。しかし問題は大きいです。せめて問題意識を共有する人の輪ができればと思います。

北原 人はいのちとして働き、ものと語らい、ものから生きる糧(かて)としての「さち」を受けとる。「海の幸」「山の幸」の「さち」であり、世界が人に贈るものことである。「さち」もまた三つの側面をもつ。

【さち(矢、幸)】[sati]

■「サツ(矢)」「[sati]」の転。

◆矢という道具のもつ獲物を捕る威力、靈力。

▼狩りや漁の道具。弓矢や釣針。◇『古事記』上「火遠理命、其の兄火照命に、各佐知(サチ)を相易へて用ゐむと謂ひて」◇『日本書紀』神代「兄火闌降命(ほのすそりのみこと)自らに海幸有(ま)します」

▽漁や狩の物の多いこと。また、その獲物。◇『日

本書紀』神代「海に入(のぞ)みて魚を釣る。俱に幸を得ず」◇海の幸、山の幸

▼幸福をいう。◇『常陸風土記』多珂「同(とも)に祥福」俗語に佐知(サチ)と云ふを争へり」◇「幸あれと祈る」

南海 「さち」の古い言葉です。構造語というよりはもっと古い言葉かも知れません。

北原 構造日本語はタミル語に由来する言葉が多いのですが、「さち」はそれより古く、おそらく縄文時代からあった言葉ではないかといわれています。この言葉を生かすことで、現代の生産というものを少しことなる観点から見ることができないではないか。

一、人はものと係わり、ものごとをわり、世界から生きる糧を得る。それが人のいのちのはたらきである。糧を得るそのちからが「さち」である。人々は心を一つにして一心不乱に働き、さちの力をその身に得る。田畑、山野、海原、工場、商店、学校等のあらゆる場において、耕す。そのとき世界は人々に豊かなものを贈り届ける。さちは何よりちからであり、働さである。

二、「さち」は、そのちからによって得られた糧そのものでもある。海の幸、山の幸、自然のめぐみ、このよくな直接贈られたものも「さち」なら、すべての作

られたものもまた「さち」である。人がことをわり、そして贈られたすべてのものが「さち」である。命そのものとしてのたま(魂)が見えないところにこもり、新しいものが現れるように、蚕が蛹から孵るように、稲穂が実るように、それまではなかったものが現れる。耕すことによっていのちがこもり、はじめてさちは「なる」。

三、「さち」を受けとる働き、それが人が世界に生きてあることの姿であり、世界の輝き、世界の響きあいそのものである。人はこのさちを、協同して働くことによって受けとる。さちを得て生きること、これが人がこの世界で生きることそのものであり、その実現は人の人たるゆえんの実現である。さちを受けとるとき、人は幸いである。それが人のいのちの輝きである。「幸い」とは、ものが成るはたらきが頂点に達し、内から外に形を開き、いのちのはたらきが盛んな様そのものである。

働くことは耕すことである。耕すのはなにも田や畑だけではない。職人がたくみに工芸するのも、旋盤工が職人技を見せるのも、自動制御の流れ作業のなかにおいて、やはりそこには耕す作業がある。人に教える仕事もまた、耕すことである。耕せば耕すだけ、必ずさちは人のものとなる。働くよろこびであり、生き甲斐である。さちはこのように本来、人に幸いをもたらす。

南海 ところが資本主義はそうではない。それはそのとおりです。それはさちという言葉がとらえた人間のあり方をおしつづす。しかし、われわれは原始共産の時代に戻ることができない。

北原 よく「原始共産制社会」といわれますが、原始共産の時代に社会はまだ形成されていない。社会は原始共産お次の段階、つまり新石器革命によって生産力が飛躍し、その結果さちを独占するものと働くこと自体が求められるものに分裂していった。階級社会のはじまりです。このとき社会もまた形成されたのです。

社会とは階級社会でありそれ以外にありません。ですから、原始共産に戻るなどはできないのです。一方、資本主義は本質的にいつて二〇〇八年秋の恐慌以来もはやこのままでは立ちいかないとここに来ています。ですからやはりかつて人びとが暮らしていた人間のあり方は、現在する言葉のなかでとらえておきたいのです。

今日の世界の事実、人は働いても「さち」を自らの手にすることはできず、働くことと人の「幸い」は切り離されている。そうではないでしょうか。

人が得た「さち」はそのまま人のものになるのではない。今日の世界は、人が働いて得る「さち」を奪い、同時に豊かにさちを生みだす環境を破壊する。奪われたさちは集められ富となる。富を得るものはますます富み、奪われるものはますます奪われ、奪いつくされる。そうす

ることでますます富を偏在させる。

人間の働く力は、人間が生まれ出たものの世界から人間に贈られた力である。この力が今日の社会では労働力という一つの商品になっている。今日の資本主義の世界ではすべてが商品であり、商品でないものはない。労働力も商品である。この商品は、働くものが今日の社会で働らくものとしての自己と家族が命をつなげるだけの貨幣と交換される。労働力がものから受けとるさち、つまり労働が生みだす価値はそれよりもはるかに大きいものも係わらず、かろうじて生きるだけの対価しか得ることができない。それを超えるものはこの労働力を買い入れた資本家のものとなる。

富は再び生産を組織するために使われるとき「資本」となる。

一、さちは人から奪われ別に蓄えられ「資本」として再び働きの場に戻る。しかしこのとき、その働きは最早人の働きではなく、さちを奪うための生産組織のなかに組み込まれた働きである。働く人にはその人が生きるだけのものが「貨幣」として与えられる。それよりもはるかに豊かなさちを生みだしたのに、それは人を豊かにしない。資本主義のもとにあるのは「さち」を受けとる力としての「労働力」である。「労働力」は売り買いされる。その人がかろうじて生きるだけの価格でなされる。人は、それよりもはるかに

豊かな「さち」を受けとるのにそれは資本に横取りされる。

二、こうして、さちを人から奪い、「資本」を増やすことを第一とする制度、それが資本主義である。資本主義は協同して働く人を個別に切り離す。切り離して「さち」を奪う。本来、協同してはたらきさちを受けとることは世界の輝きであり、人が人間であるあかしであった。しかし、資本主義のもとでこの輝きは覆われている。職があればあったで働くことは苦しみであり、職を失えば失ったでたちまち路頭に迷う。これが現代の労働の真実の姿である。

三、今日世界は、さちを奪い資本を増殖させますます肥え太る世界と、さちを奪われますますやせ細る世界とに、完全に二分された。さちを奪い資本として蓄えることを実現する基礎は、遠く新石器革命にさかのぼる。そのとき、さちを奪い操って増やす側の人間と、さちを生みだす働きに従いながら、それを奪われる側の人間との分裂がはじまった。だがそのあり方はもはやこれ以上続けることができないところに至っている。

南海 いちどはこの世界に社会主義が実現し、そして社会主義はキューバを除いて崩壊しました。体制として崩壊したところもあれば、中国のように内容において資本主義になつてしまったところがあります。

北原 社会主義の崩壊をどのように考えるのかは、今こそ大切です。

今日、資本主義はその本質としてますます人間を動物に退化させ汚濁と腐敗にまみれている。このような資本主義に対して、「真に平等で万人が人間としての本質を実現していくことのできる新しい社会」に向かって一歩前へ進んだのが、ロシア十月社会主義革命でした。全世界の搾取され貧困にあえぐ人びと、抑圧されている民族の未来を確実にきりひらいた。

だが二十世紀後半に至り、ロシア革命や中国革命は崩壊した。社会主義陣営は崩壊してしまった。が、人間の尊厳という人間に固有の本質があるかぎり、人類史がその歩みを止めることはない。なぜロシア十月社会主義革命がかけた新しい段階への橋は崩壊したのか。それは人類史にいかなる問題を提起しているのか。

資本主義はしぶとかった。資本主義の思想と闘うのに、レーニンの残した資産だけでは、不十分であった。しかしそれは当然である。レーニンにすべてを準備することなどできない。社会主義政権の修正主義による内部から解体と闘うことは、レーニンの時代の課題ではなかった。したがって、歴史の課題という観点からみれば、たとえレーニンの方法が、修正ブルジョア思想によって解体された結果としての現代の修正主義と闘うに不十分であったとしても、原則を失わずにレーニンを継承し乗りこえ

ることは可能であったし、またなさねばならぬことであった。だがそれはなされず、結果として、いわゆる社会主義陣営はすべからず崩壊した。

長い人類の歴史のなかで、階級社会から社会主義を経て共産主義へ至る転換ほど根本的なものはない。それは新石器革命と対になった根本的な革命である。このような転換期は、すべての人間に、それぞれの条件のなかで、ものごとを根源的に考え実践することを要求する。

この転換は、これまでの生物期のように、偶然による試行錯誤のなかから淘汰され道を見出すという方法でなされたり、人間期のように生産力の発展が意識するとなにかかわらず人間の歴史発展の原動力であるという方法でなされるのではない。

われわれはそれでも、人間の目的意識的な営みを信頼する。この目的意識性は、マルクスによって現実のものとされた。マルクスが到達した段階を清算するのではなく、引き継ぎ超えていかなければならない。人間は社会的人間として自らを形成したが、その内実は「階級社会的人間」生産関係によって組織される人間であった。ここから出発し、そして、「階級社会的人間」をのりこえなければならぬ。これは言葉によって言葉を越えた人間の新しい協働の世界、資本主義の暴力を制御する智慧をもった新しい人間の関係とそれを可能にする場を生み出すことと同値である。

客観的事実として、人間は、生物としての人から発展し、技術の進歩を土台に生産力を発展させ社会を変革し思想を深め、ついに、マルクス主義を獲得したことによって、世界に対する目的意識性と能動性を最終的に生み出した。人類ははじめて、「客観的歴史」の法則と目的意識的活動を統一した人生を生きることが可能になった。

南海 確かに。われわれがこのようなことごとを考えるのも、マルクスのいう目的意識性が根底にあります。われわれは大きいえばやはりマルクスの思想圏のうちにいます。

北原 人類史の新しい段階、それを共産主義と言うならば、共産主義は歴史の要求です。歴史が求めているということは、可能性があるということです。現代の共産主義思想とその実践、歴史に対する目的意識性、これは近代西欧文明のなかからそれを乗りこえるものとして生まれた。『今までの哲学者たちは世界をさまざまに解釈しただけであった。だがそうではなくて、もっとも大切なことは世界を変革することである』(マルクス『フイエールバッハについてのテーゼ』一八四五年)。このマルクスの言葉が今ほど輝いている時は、実は他にない。

この可能性は二十世紀にロシア革命、中国革命として現実性に転化した。しかし、その試みは少なくとももいつたんは挫折した。しかしその試みが終わったのではない。二十世紀の経験をわれわれの立場から掘りさげる。そして、

新たな時代の礎を築くために、今なしうることをする。

一、西洋近代、とりわけその土台である産業革命は、根本的にギリシア後期のプラトン以来の考え方を最後まで進めることで達成され、その世界への拡大が近代であった。しかし今やそれは地球という有限な世界のなかで限界に至っている。資本の増大を第一にする拡大の運動は、地球の破壊要因となり、これを制御することはできていない。

二、人間と世界の存在に意味は何か。資本のためなのか。そんなことはあり得ない。さちを受けとる喜びこそ、意味の有無を超えた輝きである。西洋の「学」はギリシア時代に労働を奴隷に任せた貴族の「知」として成立した。生きる現実からの遊離は、キリストの神の前の真理として「真理」それ自身を自己目的化することによって正当化された。この「労働」と「知」の分裂は形を変えて生き続けている。この知はこの喜びを知らない。

三、ことわりは働きの場のさちを受けとる喜びこそ、固有の言葉の生まれるところであり、ことわりの世界そのものであり、働くものが固有性に立脚してたがいに分かりあえる土台であると考える。理学はそうすることで、非西洋の固有性を深く耕して徹底し、固有性を突き抜けた生きた新しい段階の普遍性をめざす。言葉のなかに蓄えられてきた智慧は、それが

直接の生産を土台にする生きた人間の智慧であるかぎり、十分に掘り起こされたならば必ず通じあえる。人間はわかりあえる。

四、マルクスによつて獲得された、世界に対する目的意識性と能動性を、西洋自体にも向ける。西欧文明が押しつけた疑似の普遍性ではなく、固有性が解放された人間の生き生きとした普遍性は可能である。固有性が互いを認めあつて共存するところ(場)としての普遍性は可能である。

五、歴史が求める可能性は必ず現実に転化することができる。しかし、その途はまだ明かでない。可能性を現実性に転化するための実践的方途は、開かれた問題のままである。現在を転換するこの途を見いだしていくには、膨大な努力の蓄積と、現実のちからが不可欠である。

人間と世界をあらためて固有の言葉としての日本語でとらえ直すことにまでたち返る。それが、今日だれの目にも明らかかなこの現代の荒廃と混沌の中から再び立ちあがつて、考え生きていくうえでの土台である。

南海 今はまだ多くの試行錯誤が積み重ねられねばならないときです。思想的にも実践的にもすべて問いは開かれたままです。思想は何より構造日本語に根をもつ言葉で語られねばならない。その試みとして、「もの、こと、いき、とき、わり、こころ、くくる、さち、た、たがや

す」などの言葉の世界のうえに資本主義をとらえようとししました。

北原 これ自体が試行錯誤の一つです。そのことは忘れないようにおさえて、この時代になしうることを積みあげていきましよう。道は曲がりくねっているが、到達すべきところに到達するのです。

まことをつかむ

民主党政権の意味

北原 二〇〇九年八月三十日は衆議院選挙の投票日でした。その結果、戦後六十年のほとんどの時期、とりわけ五五年体制といわれる一九五五年以降では細川政権の九月を除いて一貫して政権の座にあった自民党が、三分の一政党になり果て、代わって鳩山一郎の孫・鳩山由紀夫の率いる民主党が圧倒的多数の政権党になりました。

南海 これは大きな問題です。アメリカ政府やその近辺からは、民主党が勝ったというよりも、自民党ではだめだという主権者の気持ちで民主党への投票につながったという見方です。同様の見方は欧州、とりわけイギリスなどでも顕著です。もちろんこれは表に報じられてくる意見であり、その意味でそれぞれの国での支配政党の見解に近いものだといえます。しかしこれはものごとの正

しいとらえ方ではありません。むしろ日本の保守論壇のなかの見解に本質をつかんでいるものがあります。

月刊『文芸春秋』八月号は「総力特集・さらばアメリカの時代」を企画していますが、その中で、文芸評論家で慶応大学教授の福田和也が「日本政治百年に一度の大転機・政権交代のその後に、本当の地殻変動がやってくる」と題してつぎのように書いています。

自民党が第一党の座を滑り落ち、民主党政権が誕生する――すなわち戦後日本政治を担ってきた五五年体制が崩壊するわけですが、今回の☒政変の衝撃は「戦後」という枠を超えたものになるでしょう。もっと大きなスパンで、日本の政治は根本からの転換を余儀なくされるのではないか。気がつけば、永田町にせよ、霞ヶ関にせよ、国家運営を担当してきたメンバ―の多くが入れ替わり、ルールがまったく変更されていた――そうした大転換の時代を迎えつつある。

現在の経済危機に対して、グリーンズ・パン元FBR議長は「百年に一度の危機」と評しましたが、私たちが直面しつつある日本政治の大転換もまた、「百年に一度」といえるかもしれませぬ。

北原 七月十三日(月)付の産経新聞に、七月十二日実施の東京都議選の結果について政治部長の乾正人氏が「な

「ぜ自民党は惨敗したのか」という一文を発表しているが、そこで氏はつぎのことを主張している。重要な部分をそのまま紹介する。

予想されたこととはいえ、自民の惨敗、民主の躍進という都議選の結末は、有権者の怒涛のような国政への怒りの表れ以外の何ものでもあるまい。

麻生太郎首相は「地方選と国政とは直接関係ない」と言うだろう。だが、自民党公認候補の事務所を激しくくまなくまわったご本人が最もよく分かっているように、都民は麻生政権に「ノー」の意思表示を示したのだ。…次期衆院選も都議選と同じような結果になるのは目に見えている。…

あの郵政選挙で自民党が空前の勝利を収めてからわずか四年。なぜ、かくも短期間で自民党は凋落（ちよらく）してしまったのか。

理由はさまざま挙げられるだろう。小泉改革のもと、財政再建と「小さな政府」を目指すあまり、地方や福祉の現場が疲弊し、対策が後手にまわったこと。「百年に一度」の世界的大不況に目に見える効果的な対策を打てなかったこと。郵政民営化の見直しをめぐって党内対立が噴出したこと。「ポスト麻生」に有力候補が現れない事実が象徴する人材養成システムの行き詰まり。

相次ぐ地方選での自民敗北は、経済政策の失敗だけでは説明できない。自民党が掲げる旗が不鮮明になり、精神的な背骨を失っていると古くからの支持者が判断しているためではないか。

北原 二人のいうとおり、自民党型政治の終焉という問題は、民主党が政権党になり当面の政策が変わっていくという問題より、はるかに根深い問題なのです。自民党の本質は、露骨な軍事独裁であったかどうかに関わりなく、開発独裁そのものでした。韓国の朴正熙、全斗煥、中国の小平以降の政権、インドネシアのスハルト、そしてフィリピンのマルコスなどと同じく、独裁政権のもとで欧米に追いつくことを、つまりは資本主義的近代化をめざした政権であったことは確かです。

南海 そしてそれが崩壊した。歴史的役割を終えたのです。北原 その内容と意味を掘りさげなければなりません。いくつかの左派党派は民主党政権について、自民党と何も変わらない同じ保守党だと批判する。しかしそれでは問題の本質を見失い、歴史の要求と課題をとらえることができません。

民主党の中には、一、鳩山、菅、岡田、前原といった、都市型の保守グループ。二、小沢が率いる農村や地方、連合などに密着した利益誘導型選挙を経てきたグループ。三、いろいろな市民型運動や民生分野の運動と連携をもつグループ。この三潮流がせめぎあっています。高度経

済成長期ではない今、地方の利益誘導がかつてのような土建政治では難しく、ここに小沢氏が自民党時代とはずいぶん考え方を変えた土台があります。

いずれにせよ歴史的な現実の規定されこれらのグループも変転していくので、民主党の外にいるものも、自分の関わる運動を等して、あるいは思想問題として、課題を提起し、自らも考えまた実践していくことが必要です。

南海 『青空学園だより』で鳩山由紀夫の「私の政治哲学」を読む記事を載せました。「私の政治哲学」の中の政治主張を抄訳したものがニューヨークタイムスに載り関心を集めたものです。

このように一党の党首が自らの政治哲学を語ることはよいことだ。私は党としての民主党を支持するわけでもないし、その政治路線の全体に賛同するわけでもない。しかし哲学を語りそこから政治の方向を議論していこうとすること自体は、まったく賛成である。戦後の日本政治はあまりにも議論ということなしに進められてきた。自民党の派閥はムラといわれた。ムラの中ではあうんの呼吸で分かりあえるというわけである。しかしもはやこれではやっていけなくなつた。議論する、対話する、そして行動する、このことが当然のこととして根づくことを期待している。一読した意見を書いておきたい。

鳩山論文はこの十数年の日本政治について「冷戦後の日本は、アメリカ発のグローバリズムという名の市場原理主義に翻弄されつづけた」と言う。そして民主党は小泉の政治路線とはまったく違うという。しかしではなぜ市場原理主義に翻弄されたのか、そこには資本主義の必然性があるのではないか。日本の内部に市場原理主義を受け入れる素地があったのではないか。「アメリカ発のグローバリズム」と外に要因を求めても、小泉選挙で自民党を大勝させたのは日本の有権者自身ではなかったか、という問に答えたことにはならない。政権を担う政党として、新自由主義をほびこらせた根っこのところについてさらにつつこんだ分析をし、いつときそれを受け入れた一人一人の国民の心にひびく呼びかけができねばならない。そして、今の時代に「市場原理主義に翻弄」されないでやっていけるのか、その道筋はあるのか、小手先ではない大きな見通しを示さなければならぬ。それは書かれていない。

鳩山論文は「ドル基軸通貨体制の永続性への懸念」を表明し、「世界はアメリカ一極支配の時代から多極化の時代に向かうだろう」と書く。「日米安保体制は、今後日本外交の基軸」と言いつつ「友愛が導くもう一つの国家目標は東アジア共同体の創造」と述べ、「地域的な通貨統合、アジア共通通貨の実現を

目標としておくべき」と書いてある。このこと自体は必然的にそうならざるを得ないものとして反対ではない。

しかし二つの問題がある。大きくはその実現には「東アジア共同体」について東アジア各国に呼びかけるの理念と見通しを提示しなければならぬ。そのためには近代日本のあり方にまでさかのぼる総括が必要で、これなしに説得力はない。もう一つは、日本を取り巻く情勢ははるかに緊迫しているということだ。この秋ドルが暴落する可能性が高い。最近株価や企業の景気観が上向いているとかが流される。しかしそれは作為のはいったものであり、一時麻葉でごまかしているだけである。基本的な事実として、アメリカはこの間、実体の裏付けを欠いたままドルを印刷し続けた。アメリカの幾人かの経済専門家もこの秋のドル崩壊を予測している。いづれこれは不可避なのである。日本は膨大なアメリカ国債をもったままである。そのときこれが紙切れになる。国民の金融資産が霧散する。民主党政権の誕生を待っていたかのように、新たな経済危機が起こることもありうる。今の民主党にこれに対する備えがあるのか。大きな理念と目前の危機、この二つに言及がない。

さらに政治家の政治哲学には、世界観とともに実践論がなければならない。どのように政策を実行し

ていくのか、そこには基本的な人間社会のつかみ方がなければならない。鳩山論文にはそれが足りない。

北原 そうですね。民主党政権の誕生はこれまでの方法ではやってゆけないことが明白になった中で生まれたものです。しかしこれは本場の激動のはじまりに過ぎません。西洋に追いつき追い越せ、そのために最適化された制度、それが日本の政治機構であった。このような体制は資本主義を推し進めるうえでは大きな役割を果たしたが、資本主義自体が地球の有限性に規定されてこれ以上の量的発展が難しいという限界にぶつかったとき、この制度は機能しなくなる。それが今回の民主党政権誕生の意味でした。

しかしながら問題はそこにとどまりません。明治以来の日本国の近代化のために最適化された機構は、単に政治や経済、産業分野の問題でではなく、近代日本語と思想方法の内奥までをも大きく規定していた。

そのために、人間が内発的に考える土台、近代の受け継ぐべき側面が十分は準備されてこなかった。

このところに対する問題意識こそ青空学園が最初にもった問題意識であり、その内容は縷々述べてきました。問題を問題としてつかむことは、活路を切り拓く第一歩です。未だここにどまつているとはいえず、問題の指摘は積みあげ深めてきました。

その内容を時節の動きを背後に感じながら深めてゆき

たいと思います。

昭和天皇の生き様

北原 民主党政権ができました。それを生みだしたのは、明治以来の政治、社会、人間のあり方を根本的に変えていかなければ、これからの時代に対応できないという客観的な事実があります。

そのとき、天皇問題は避けて通れません。この半世紀、実際に戦争を経験した世代から、天皇の責任を問う声が続いてきました。

南海 内発的に考える言葉が準備することなく、大急ぎで近代産業と軍備を拡大していく。そのための国民統合のことで導入された方法が近代天皇制でした。その行きついた先があつた十五年戦争でした。ですからいま天皇問題の現在を考えることは、たいへん重要です。

北原 十五年戦争は日本の歴史において未曾有のことでした。南太平洋から東南アジア、東北アジア、中国大陸と朝鮮半島、いわば日本列島弧にすんでいる人間の祖先の地のすべてに兵を進めたのです。そして大敗北をしたのです。

この戦争は、ぎりぎりの内容は資本主義日本の版図の拡大でした。それが、反西洋の形においてなされたのです。それを統合し戦争を進める結節点に天皇がありました。

敗戦処理の過程で、天皇は自ら責任を負うのではなく、臣下を戦犯として差し出し、自らはアメリカに命を乞うて皇統を守ろうとしたのです。昨年なくなった作家の小田実はその小説『玉碎』（岩波書店、二〇〇六／〇九／〇八）の前置きでいう。

この事実（敗戦処理過程）で私が強い怒りをもつのは、ここには期せずして日本とアメリカ、二つの国家の国家権力の結託があるからだ。その結託の中心に天皇があり、天皇の「生命乞い」がまぎれもなくあつた。

この結託の事態で怒つたのは私だけではなかった。フィリピンのミンドロ島の戦闘で辛うじて生きのびたあと捕虜になつてレイテ島の捕虜収容所にいた大岡昇平も怒っていた。彼は八月十一日に日本のポツダム宣言受諾を知つたのだが、そのあとの日本政府の正式受諾までの数日間のことを『俘虜記』のなかで次のように書いていた。

まず「私は『星条旗』により日本の条件が国体護持であることを知つて失笑を禁じ得なかつた。名目をどう整えようと、結局何等かの形で敗者が勝者の意のままにならねばならぬのは同じことである。彼は収容所で親しくなつた米兵ウェンデイに言つた。「私はこの条件が日本軍部の最後の愚劣であることを認めるが、幸いに貴国の寛大がそれを容れられんこと

を望む。」そうウエンデイに言ったと書いたあと、大岡はつづける。「十二日、天皇の権限が聯合國最高司令官の制限の下におかれるという条件付きで、国体が護持されたことが伝えられた。今度は日本政府の寛大を待つ番になったが、私は結局軍人共がこれを容れることを信じていた。」

しかし、大岡のこの期待は裏切られた。日本政府はなおも正式受諾をしづつた。ウエンデイが「我々は日本政府が一目も早く回答することを望むね」と彼に言った。「十三日の『星条旗』は日本の回答の未着を同じ焦燥をもって報じていた。ウエンデイの質問に対し、私は日本の戦争犯罪人が自己の生命と面子のためにで天皇を口実に抵抗しているのだろうと答えておいた。」「十四日の報道はさらに悪かった。『星条旗』の調子には威嚇が籠もって来た。満洲で依然ソヴィエト軍が日本車を砲撃していること、ニミッツの艦載機が「日本の決意を促がす」ために、各都市の爆撃を続けていることを報じていた。」そう書いた上で、さらに彼は書き記していた。「私は憤慨してしまった。名目上の国体のために、満洲で無意味に死なねばならぬ兵士と、本国で無意味に家を焼かれる同胞のために焦立ったのは、再び私の生物学的感情であった。」「天皇制の経済的基礎とか、人間天皇の笑顔とかいう高遠な問題は私にはわからないが、俘

虜の生物学的感情から推せば、八月十一日から十四日まで四日間、無意味に死んだ人達の霊にかけても、天皇の存在は有害である。」

私も大岡同様に、八月一四日午後の大阪空襲で「無意味に死んだ人達の霊にかけても、天皇の存在は有害である」と、彼同様私も「天皇制の経済的基礎とか、人間天皇の笑顔とかいう」、あるいは、これは大岡でなく私小田が言うことだが、日本文化の伝承者として天皇や天皇制という存在がいかに垂重要なものであったかというような高遠な問題は私にはわからないが、八月一四日の大阪空襲のなかで「無意味に死んだ人達」のひとりになり得た人間の「生物学的感情から推」して考える。

南海 実際、もし八月五日までにポツダム宣言を受諾していれば、ソ連の参戦も、広島長崎の原爆もなかった。負け戦と決まれば一刻も早く幕を引くのが民の苦しみを少しでも減らす上での基本である。天皇とその取り巻きは、それよりも天皇制の保持を優先した。

前に『青空学園だより』に載せた飯田進さんの本の書評で私も小田実と同様のことを書きました。

『魂鎮への道—B級戦犯が問い続ける戦争』(飯田進著、岩波現代文庫、二〇〇九)を読む。最初は一九九七年に発刊され、今回文庫に収録されたのであ

る。これは歴史を主体的に記述したという意味で本
当の歴史書である。

彼は日本の戦後に違和感をもって生きてきた。今
年も八月十五日の追悼集会では「兵士たちの尊い犠
牲の上に今日の経済的繁栄がある」といわれた。私
の故郷の地方新聞『洛南タイムス』でも「平和の礎
を築いてきた英霊」といわれている。飯田さんは言
う。「飢えと病気の苦しみの中で死んでいった兵士を
悼む気持ちはわかる。私だつて特攻隊員の手紙を読
めば号泣する。しかし、理性的に考えれば戦後の繁
栄と兵士の死はまったく関係ない。」彼らの死によつ
て戦後の「平和」があるというのは、事実ではない。
現代日本のありようからいえば、その死がまったく
教訓化されていないという意味で、日本軍の戦死者
はまったく無駄死にだった。本当に死者を追悼しそ
の死を無駄にしない道はただ一つ。あの戦争に向き
あい、あの戦争を遂行したものの責任を暴き、責任
をとらせ、人間としての道理をうち立てることでは
かない。これが飯田さんの経験に裏づけられた主張
である。飯田さんは、無謀な作戦計画を作った大本
營参謀の責任だけではなく、昭和天皇の責任も問う。
昭和天皇が終生その責任を明らかにしなかつた結果、
「戦争を指導した連中は、昭和天皇が責任を追及され
ないなら、おれたちだつて免責だと考えてしまった。」

日本の倫理的な腐敗がそこから始まったと思う」と
いう。

：

なぜ昭和天皇の戦争責任は追及されなかつたのか。
飯田さんも言うように、戦後急速に冷戦の時代にな
り、アメリカは天皇を免罪して日本統治に活用する
方を選んだ。国内的にもそれを歓迎する旧日本軍国
主義の流れをくむ勢力が少なからず存在した。その
勢力が、一貫して「戦後憲法は押しつけられた。自
主憲法を！」と主張してきた。戦争責任を追及する
ものは少数派であつた。

一九四五年八月一日、日本の人々は日本軍国主
義から解放されたのである。これを解放ととらえる
ことができたものが少数派であつた。多くは、解放
の喜びではなく敗北の悲しみをもつた。飯田さん自
身はニューギニアの獄のなかで軍国主義思想から自
身を解放した。多くの日本人は軍国主義思想を受け
入れていた。内因論に立つて戦争責任を問い、その
ことを通して人間の道理を現実のものにしていく。こ
のことは今もつて開かれた課題である。

南海

敗戦直後にも天皇が責任をとつて退位すべきであ
るという意見が出されてきました。一九四八年六月頃、東
大総長南原繁の「天皇は退位すべきであると思う」との

談話が朝日新聞に載っている。熱心な天皇帝支持者だった南原は、天皇帝を「祖国再建の精神的な礎」とするたため、天皇は道義的責任をとって退位すべきだと考えていた（奥平康弘『万世二系』の研究）。天皇帝を支持するがゆえに退位すべきと考える。これは筋の通った考え方であった。

南原は天皇が責任をとることなく居座ることが、結局天皇帝を衰退させると考えていたし、これは正しかったのです。

同じ年の八月二六日付読売新聞は東大教授（のちに最高裁長官）横田喜三郎の「天皇帝退位論」を掲載した。「過去の最高の責任者がその責任をとうろとせず、国民もまた責任をとうろとせず、たがいにあいまいのうちに葬り去るならば、どうして真の民主国家が建設されようか」。まことに正論です。

北原 右派の人々のなかからも次のような見解が出てきたことは注目すべきです。雑誌『表現者』（二〇〇九年九月号）で中野剛志さんが書いています。

では、我が国の国柄に合致した政教の関係を踏まえた場合、天皇は、大東亜戦争について、どのように身を処すべきだということになるであろうか。それについて、筆者が最も有力と考える選択肢は、政治家の河原宏氏の議論である。

河原氏は『日本人の「戦争」―古典と死生の間で』

の中で、大東亜戦争に問し、昭和天皇に問えるのは政治的な責任ではなく、道義的な責任であるとしたり。その上で、同氏は、天皇が道義的責任を果たすための最善の方法は、退位し、出家することであったと主張したのである。

天皇が出家することのポイントの一つは、天皇が神道の最高神主の立場から一仏弟子の身に移ること、神道という一民俗宗教の見地からではなく、仏教という世界宗教の視野から戦争を見直すということにある、と河原氏は言う。

例えば、靖国神社は、天皇のために戦って死んだ者のみを祀る場であり、それゆえに、「靖国問題」あるいは「靖国問題の政治的利用の問題」を招いている。これに対し、仏教は、神道とは異なり、敵味方、国籍を超えて、すべての衆生を平等に見る理念をもっている。それゆえ、天皇は仏門に入り、すべての戦争犠牲者を哀れむことによって、敵味方の別なく、特にアジアの民衆の犠牲に対して、道義的に対応することができるのである。

すべての犠牲者を平等に哀れむという仏教の理念は、日本人にとっても身についたものである。しかも、我が国の歴史上、天皇が仏門に入ることは、ならぬ異例なことではない。河原氏は、天皇の出家のイメージの例を、『太平記』の光厳院（北朝の天皇で

あったが、戦乱続きの世を嘆いて出家し、諸国を行脚)に見出している。

退位した天皇の出家は、我が国の歴史に沿う形式であり、そして仏教による敵味方の別なき供養は、我々の慣習に合致する。それゆえに、出家による道義的責任への対応こそが、我が国の国柄にもっとも相応する責任の果たし方であった。天皇は、国柄にあった身の処し方を自ら示すことで、敗戦という国家的危機にあつて、国柄の所在を指し示し、国をまとめることができたはずであった。また、それが天皇の存在意義のほずであった。

天皇出家論を唱えた河原氏の主眼も、歴史と国柄を回復するという点にあつた。「敗戦と占領によって、日本人が唯々として、あるいは喜々として自らの歴史を破却したことは、その後の無責任状況到来の一因となつている。歴史を捨てて、人は道義の依るべき根拠を見うしなう。」「道義的責任を没却した日本人の戦後姿勢は、まさに戦後史の内に明証されている。これこそが天皇の戦争責任だつた。」(『日本人の「戦争」―古典と死生の間で』)

天皇は、人智を超えた危機にあつては、我が国の国柄を確認・回復するという使命を負つた存在なのである。そして、そういう使命を課したのも、我が国の国柄であつた。しかし、敗戦と占領という危機

にあつて、天皇はその本来の使命を果たさなかつた。それゆえ、戦後、国柄は棄損されてしまった。当然のことながら、国柄が定めた天皇の微妙な位置づけも忘れられ、不毛な戦争責任論が継続する事態を招いた。

河原氏が、本当に問うているのは、天皇の戦争責任ではない。むしろ戦後責任なのである。

南海 しかしながら、この意味での戦後責任は果たされなかつた。責任を果たすことなく死んだのです。もし昭和天皇が戦争責任を一身に背負つて死んだらどうなつていたか。法でどのように規定されるかにはかわりなく天皇の権威はかぎりなく高まり、戦後の日本人は死んだ天皇を背負つていくしかなかつた。

北原 そして天皇制は続いています。天皇のことは戦後天皇制として再編され持続しています。日本の歴史を顧みると、今日のようなあり方のときがほとんどです。徳川時代は禁中並公家諸法度で徳川の法のもとにおかれていた。今日は日本国憲法のもとにおかれている。江戸の法はあくまで徳川の法であり、したがってまた幕末それは無視され、天皇は反徳川の旗印となつた。今日の法は国家法である。そして歴史的な天皇のあり方を具象化した「象徴」とされている。

北原 どのような政治的な対立があつても、それを超越するという虚構のもとに天皇を最後の調停者としておい

ておくことは、日本のような島国での支配者の智慧でもあったのです。列島では、徹底して争っても結局は島のなかで生きていかなければならない。大陸のように辺境に逃れることもできない。そこで争いから一步引いた権威が保存されるのです。イギリスもまた島国でそのゆえにいったんは廃絶された王家がよみがえり、立憲君主として権威をもったのと同じことです。

南海 天皇はもともとは二、三世紀にこの地の支配者となった。その支配が、支配者側の文化や文物をおしつけるのではなく、逆に征服した土地の習俗、民俗を取り込み代表者、その文化の発信者としてふるまったのです。古代を経て鎌倉期以降は実際の支配権力は封建支配者や明治以降は近代資本家の手に移りますが、一方で最後の権威者として一貫して歴史のなかに存在し続けました。

北原 このあり方は支配者にとつては都合のよいものでした。しかし同時に民百姓のなかに人間原理が育ちません。日本の歴史は同化と差別の歴史でした。前にも言いましたが日本列島弧の少数民族はアイヌだけです。台湾島でも十を越える少数民族がいるのです。それだけ古代から平安期にかけての同化政策、支配者の同化指向が強かったのです。天皇という一つの文化的権威を支配のこととする以上、同じ支配権力のもとに別の文化を認めることはできなかったのです。

国学者は明治革命期に天皇のもとの平等を掲げました。

昭和維新もまた、その思想によって、金持ちやそれに使える役人支配を打倒しようとした。しかし、天皇の本質の一面は差別なのです。部落差別を典型とする差別です。それは単に人民同士を分断し対立させるといったことではなく、差別する側でもされる側でも人間としての尊厳を奪ってきたのです。天皇のもとの平等は空想でしかないので。

南海 一君万民の国学思想は自己矛盾している。

北原 天皇制から自由になるとは、いわゆる反天皇を意味するものではありません。天皇制の基礎となる虚構から自由になることであり、天皇そのものとは、千八百年にわたつてこの日本列島弧にともに暮らしてきたものとして、互いに認めあうということもありえます。これはこれから大いに議論すべきことです。

戦後民主主義や市民主義の運動はやはり底が浅く、それを深い根のあるものにしたいくともまたこれからの問題です。問題はすべて開かれたままなのです。これまで書いてきたことをまとめておきます。

一、太平洋戦争は日本歴史上空前のことであった。古代以来の事々を総動員して闘った。そしてやぶれた。遂行する制度を支えた官僚制度は、結局は無責任の体制であり、そのもとでまことに多くの命が空しく失われた。

二、いずれにせよ昭和天皇は責任をとらねばならず、そ

のことに於いてのみ天皇の再生はありえた。しかしそれはなされなかった。

三、昭和天皇は退位できなかつた。なぜか。戦後革命を恐れたからである。天皇が責任をとることによつて天皇制を再生させることはできなかつた。

北原 最近になつて次のような報告を入手した。天木直人さんのメールマガジンである。これを傍証として紹介する。皇統の保持を第一とした天皇とその周りの人間のためにポツダム宣言の受諾が遅れたのだ。七月に発せられたポツダム宣言を八月五日までに受諾していれば、ソ連の参戦もなく、広島・長崎の原爆投下もなかつた。その昭和天皇が戦後広島を訪れたとき、人々は歓迎したのである！これが戦後日本の実相であつた。

天木直人のメールマガジン二〇一〇年一月一五日
発行第二〇二号

昭和天皇が反共だつた事を示すエピソードをまた一つ見つけた

テレビでおなじみの三宅久之という政治評論家が、「書けなかつた特ダネ」と題する新書（青春新書）を出した。その表題につられて読んでみた。元毎日新

聞政治部の記者というから、さぞかし面白い事が書かれていふと思つたらがっかりさせられた。

「たかじんのそこまで言つて委員会」、とか「ピートたけしのTVタックル」などという娯楽政治番組の常連に身をやつしてダメになつたのか、あるいは年老いてすっかり政治部記者の頃の記憶が失せたのか、たいした「特ダネ」はなかつた。

その中で一つだけ私が注目したエピソードがあつた。

それは、日ソ国交回復を手がけた鳩山一郎が昭和天皇に日ソ交渉に反対されて狼狽したという秘話である。

これは私も知らなかつた。その概略はこうだ。

一九五五年早春のある日、皇居での内奏からあたふたと官邸に戻つてきた鳩山一郎首相は顔を蒼白にして、「陛下は日ソ交渉に反対された」とうなだれた。側近の河野一郎農相（当時）が、その時の昭和天皇の発言を詳しく聞いた上で次のように鳩山首相に進言する。

「総理、陛下のお言葉はご質問であり、ご意向の表明ではないのですか。政府の決定に陛下が反対されるのは、憲法上ありえないことですから。あくまでご質問だつたことにして、日ソ交渉は予定

通り進めましょう」

この一言が鳩山の背中を押して、日ソ国交回復の扉が開いた、という。この話は面白い。鳩山一郎よりも河野一郎のほうが政治家としてはるかに腹が据わっていたということだ。

それにしても昭和天皇の反共ぶりは凄い。ゼネストに恐れた昭和天皇が、日本国民は何をするかわからないからと言ってマッカーサーに日本の治安維持を頼んだという話は聞いた事がある。ソ連の日本占領を恐れた昭和天皇が、マッカーサーに在日米軍を認めるから守って欲しいと言って、「憲法九条があるじゃないですか。憲法九条は最強の安全保障政策ですよ」とたしなめられたという話は聞いた事がある。

そして今度のエピソードだ。

因みにこのエピソードに驚いたのは私だけではない。政治評論家の岩見隆夫氏が一月一三日の「新聞遠見」で河野一郎の言葉は凄いという間接的な表現で、このエピソードの衝撃ぶりを書いていた。たしかにこれだけは「書けなかった特ダネ」に値する。

西洋の苦悩と東洋

西洋の苦悩

北原 二〇〇九年の秋口に対話の改定をして以来の対話です。日本語のことわりに即した新しい言葉で新しい考え方を書ききる。考えてみればこの四十年、この同じことを考えてきたのです。日本語のことわりに即した人と世についての陳述をする。あるいは、自らにそれができなくても、そもそも人間は固有の言葉で考えなければ本当には考えることができないということが人々に共有され、そうすることが世のならいとして代々伝わり行われていくようになるために、そのためになし得ることをする。この問題の前に立ち止まってきた四十年です。

われわれのころざすところはなかなか速く、また大きな問題であり、さらにそれが真実なことであればあるほど、真実は細部に宿り、一般論は無効です。対話こそその細部たらんとするものでした。対話はすでに語るべきことがあってなされるのではなく、対話の場こそ語るべきことが生まれてくることです。つくづくとそのように思います。小説家は作品の細部に真実を宿らせ、思想家は文章に展開して語るのですが、私どもはまさにこの対話こそそのような作品ではないか、そのように考えます。

南海 私はこの秋、ささいなことですが一つ新しい証明を見出しました。ゼータ関数の偶数値の関数値の公式の初等的な証明ができた。はじめは混沌として、ただこの方向で何か証明が組み立てられるはずだということで思

いを集めて考え続けました。

若い数学者はもつと大がかりな道具を用いて考えていくのです。われわれのような教育従事者は、初等的な数学の内でのいろいろ考えるのです。現代数学の道具はひとつひとつ必然性があるのですが、多くの人の努力でできあがると、大がかりな道具に見えます。その意味で、現代数学は南極探検のような組織的研究です。初等数学での探求は近所の山登りのようなものです。ただそこにはやはり共通性があつて、いかに南極探検でも現地に行けば両足で歩かなければならないということです。両足で歩くことの大切さを改めて納得しました。

正しいにちがいないがそのからくりが分からないというところで、いろいろ試行錯誤をし、まったく不思議なところでベルヌーイ関数が立ち現れてきて、そのからくりが見えたときは本当に驚きました。わかつた喜びというのは、まさに「山路来てなにやらゆかしすみれ草」(芭蕉)ということです。こんなところにこんな事実が咲いているのかと思いました。久しぶりに数学の喜びに出会いました。

北原 私もまた新たに考えるところがありました。われわれは明治維新の背景にあつた西洋帝国主義の圧力と、その下で上からの近代化を余儀なくされた東洋を対置し、「反西洋」としての非西洋の深い団結を思想の土台に置いてきました。アジア思想といいアジア主義といい、また

東洋の理想といい、基本にあるのは西洋帝国主義とどのように闘うか、またその主体をどのように作っていくのか、このような問題意識が基調にありました。

しかし実際には西洋も十分苦しんできたのです。われわれは反西洋ではなく、西洋の苦悩を我が苦しみとらえ、ともにそれを越えていくのでなければならぬと考えるようになりました。西洋近代の苦悩に比して東洋の苦悩はまだ底が浅いとは言いません。それはちがうのです。われわれも、あるいは近代日本の侵略を受けた東アジアも、大きな苦しみを背負ってきた。また沖縄も近代において苦しんできた。しかしまた西洋も苦悩してきたのです。

そのように考える契機の一つに横光利一の『旅愁』を読んだことがあります。横光利一は一九三六年、半年間、欧州を旅行する。出発直後に二・二六事件が起こる。ヨーロッパではベルリンのオリンピックや、パリでの人民戦線政府への激動を直接体験する。この経験をもとに、翌年から『旅愁』の連載をはじめた。それを戦後に四編として刊行、それが小説『旅愁』です。

私はこの二年のうちに二度フランスを旅する機会があり、フランスの風土を体感することができていたので、それも相まって『旅愁』は印象深かったです。これはまさに戦時中フランスの半年滞在した横光の感性を基礎に戦時中に書きはじめられたものです。戦後の混乱期に横光

が急性腹膜炎で若死にしたために、未完となった小説です。その主題は、横光のパリ遊学で生まれてきた西洋と東洋の問題です。

彼はそれを西洋の合理主義思想とそれに対する日本の古神道という枠組で考えようと思いました。その軸は近代合理主義とパリの繁栄を肯定する考え方に對し、日本の風土に根ざした文化を肯定する感性との対比です。そして細部として人民戦線内閣の成立と赤旗に揺れるパリを描き、西洋近代に反対する内部の運動としての左翼と人民闘争の盛り上がりを描く。本當に一つ一つの情景が真に迫る筆です。

しかし小説は盧溝橋事件の勃発までを書いたところで未完に終わった。そのために、日本の風土に根ざした感性が、その後起こった侵略戦争と日本軍国主義の残虐さなどのようにつながりまた断絶しているのか、この点についての横光の展開がありません。それは後世に残された問題であり、その問題は今もって解決されてはいないのです。

横光のこの小説を二、三日かけて一気に読んだのです。ここで横光が小説家として問題にした事々はこれまでわれわれが考えてきた事々を越えてはいません。われわれはその後の人間の歴史を踏まえているからそれは当然です。ただ、小説の力を感じたのは、細部に真実を垣間見せながら、彼自身が考え続けているその姿が、小説か

ら浮かびあがって来ることでした。

南海 西洋は十分苦しんだといわれました。実際、西洋は内的に展開し、その原動力は西洋内部の対立や闘争でした。であるがゆえにその苦悩もまた大きかった。これを反西洋という立場で無視することはできません。反西洋という時の西洋は、帝国主義西洋であり、西洋近代の資本主義であり、それを生みだした近代の合理主義にもとづく西洋文明です。

しかし、西洋文明の下で苦悩した西洋のいくつもの文化があることを忘れてはならないのです。この西洋文明に抗った文化です。それを西洋文化と一つにくくることもできません。西洋文明を肯定しそれを推し進めたのもまた文化なのですから。その総体をもって文化というならそれはそれで正當なのですが。

この問題を正確にとらえるためには、まず文明と文化を定義しておかなければなりません。私は「数学は文明の方法である」ということを言ってきました。実際、現代の文明では、あらゆるところで数学が基本的な方法として用いられています。情報機器、交通手段、建造物、すべて数学なしには設計もできず建設もできず、運転もできない。つまり存在しえない。また、あらゆる経済活動は数をもとにおこなわれ、数学なしに生産活動を組織することはできない。

しかし文明という言葉の定義をしなければ意味すると

ところが正確なものとはなりません。一九九六年に米ハーバード大学のハンチントン教授が出した本『文明の衝突』では、欧米（西欧）文明が衰退し、中華（中国）文明などが台頭して欧米をしのぐとか、米中戦争が起こりうるといったシナリオが書かれています。この本は、欧米文明、中華文明、イスラム文明、ヒンドゥー文明（インド）、ロシア（東方正教会）文明、ラテンアメリカ文明、日本文明など、今日の世界にいくつもの文明があるように書かれています。

しかしそれは正しくない。文明とは技術が規定する人間社会の有様であり、今日の世界では西洋にはじまる文明が全世界を覆っています。第一次世界大戦まで、世界には複数の文明がありました。コロンブスに始まるスペイン帝国は、マヤ、アステカといった中南米の文明を侵略して滅ぼした。欧州で産業革命が始まるまで、中国は欧州よりずっと豊かで、中国には欧州にない高度な技術やシステムが存在していた。当時の中国は「中華文明」でした。産業革命で欧州が強くなり豊かになった英国が、アヘン戦争で中国を破って植民地化し、第一次大戦でオスマントルコを滅ぼしたことにより、世界の文明は西洋文明に単一化された。これは避けがたい事実であり、今日むしろこの西洋文明において近代日本や現代中国はそれをより一般化し普遍化した。

文明は単一化した。この文明のもとで人間がどのような

に生きてゆくのかという問題は文化の問題です。この文化を深めるためにこそ、文明の本質をつかまなければならぬのです。文明とは、一定の技術で実現される世のある段階です。文明の歴史は基本的に技術の段階で画されます。では現代文明はどのような技術段階で画されるのか。

現代文明はあらゆるものを形式化しさらにデジタル化してつかみ動かそうとする基本的な傾向をもっています。人間がこういうものだとして認識した、つまり言葉で分節したあらゆるものに番号を振ろう（コード化しよう）とします。同時に現代文明は原子力を制御しようとする文明です。情報技術と原子力の制御は相対性理論と量子力学に基礎を置いています。この現代文明の基本傾向をおしとどめることはできません。現代文明とは原子力と情報技術で画される文明です。そしてそれは地球を覆う一つの文明となりました。

それがいいことであるとか人間性に反するとかいう議論以前に事実です。世界を数学化してつかもうとする基本的な方向性を現代文明は持っています。この基本における仕方こそ、文明の方法としての数学です。数学を基礎として現代文明は成り立っています。

人間はつねに、ある文明のもとで生きているのですが、そこで生きるうえで具体的な形を与えるのが文化です。文化は歴史的に形成された固有性をもっています。文化

は一定の広がりをもちます。文化をどの段階でとらえるかによってその広がりも変わります。統治者がその立場から、国家の統治の範囲として文化の共通性を作ろうとする傾向も不可避です。

文化は文明を相対的に見る視点を持ち、文明のなかにある反自然、反人間性と対峙するものです。学術の研究とは、この文化を耕し、文明のもとにおける人間の生き方を豊かにするとともに、文明をもまた改変していくものです。

文明の方法として数学をとらえる文化が日本の文化のなかでまっとうな位置をしめることができていない。あるいは日本の文化が文明の方法としての数学をとらえるべき視点を確立していない。世にいわれる「文化としての数学」は定義があいまいで底が浅く、とても文明の方法としての数学をとらえる文化にはなっていません。私は、数学が日本社会に根づくとしたら、文化が「文明の方法としての数学」をとらえ直すことからしかはじまらないと考えています。

北原 西洋近代文明それ自体は不可避でした。西洋においてもこれをおし進めそのもとで生きようとするもの、この文明に反対しそのなかで人間としての生を全うしようとするもの、それぞれがあり、それが西洋文化を形づくった。苦悩、苦しみ、それが西洋文化の土台です。

現代文明のかかえる根本的な矛盾とその意義について

はそれを陳述する言葉を準備し述べなければならぬと考えています。それは今準備していることそのものです。そのうえで、文明と文化に関する意見に賛成です。文明は英語では civilization と肯定的におさえられます。しかしわれわれの文明観からすればそれは肯定も否定もない現実の歴史段階です。そしてその文明のもとにおける人間の生きる型が文化です。産業革命以降の文明の進展とそのもとでの人間の生き方、そこに文化がありました。

文化ということにおいて西洋は苦悩してきたし、その苦悩はわれわれ自身の問題でもある。もとよりわれわれ非西洋のものとの困難は西洋の困難と同じではありません。奴隷貿易以来の西洋文明による収奪を受けたアフリカの困難はあまりに大きい。内部からの展開によって、この困難を越えることができるのか。内部から展開する土台自体が破壊されているのではないか。

内的発展の土台の破壊、これにどのように対するのか。この問題が非西洋の困難の本質です。この困難の本質は言葉を奪われていることではないかと考えています。そして、この問題においてわれわれもまたアフリカの困難をわが問題とする基盤を見出すことができます。

文明に対抗する文化、その文化の基礎となるものが人間の言葉です。内的発展の土台の破壊という困難は西洋が経験していないことです。少なくとも西洋の中心部は内発的に展開したことによって、言葉もまた内発的に展

開しました。それは当然のことと考えられてきました。

東洋の苦しみ

北原　しかし非西洋においてそれは当然ではない。最近詩人の谷川俊太郎さんが次のようなことをいっておられました。

二〇〇九年一月二五日付朝日新聞『漫画にコスプレに薄く広がった詩情—金や権力なじめぬ』

かつて、詩は文系青年のたしなみであり教養でもあった。ところが、いまは社会の表舞台から姿を消したように見える。詩はどこへ行ったのか。現代における数少ない「詩人」谷川俊太郎さんに詩のありかを尋ねた。（聞き手・鈴木繁）

谷川：明治期に欧米輸入の思想や観念を、苦勞して漢語という外国語で翻訳した。でも、身についていない抽象語で議論をはじめると、すごく混乱しちゃいますよね。現代詩も同じ。現代詩は伝統詩歌を否定したところから始まっている。詩は人々をむすぶものであるはずなのに、個性、自己表現を追求して、新しいことをやっているという自己満足が詩人を孤立させていった。

「明治期に欧米輸入の思想や観念を、苦勞して漢語という外国語で翻訳」しなければならなかった。それは西洋帝国主義の圧力です。ただそれをやむを得ぬことと気づ

かず、そのままその言葉でやってきたのが多数です。奴隷はどれであることに気づかないことにおいて真の奴隷である。日本語世界の多数は、言葉という人間の尊厳にとつてもっとも基本的な問題で、真の奴隷であった。

詩人の感性はその問題を見逃さなかった。「身についていない抽象語」では、本当のところ議論することも考えることもできない。これは私たちが青空学園で一貫して問題にしてきたことです。

同じ頃に出た『ヒットの源流は平安朝』という二〇〇九年一月二八日の朝日新聞で、日本を始めとして、世界中の民族音楽の調査や研究に従事し、その意義を説き続け、そして一九七五年、病に倒れた小泉文夫さんを取りあげていた。

小泉さんにとって、東大の日本音楽史の講義で三味線と箏の実演を聴き、地にひれ伏さんばかりの衝撃に打たれた体験が「第二の音楽開眼だった」と伝記（岡田真紀著）に書いている。

西洋音楽崇拜のくびきがそこで断ち切れ、民謡などの日本の伝統音楽や、世界の民族音楽の実地調査へと一心不乱にのめりこんでいった。

：

機銃掃射のように、群れをなす男たちの声のパルスを速射するインドネシア・バリ島の男声合唱「ケ

チャ」の上演で知られる芸能山城組が七四年に旗揚げされる糸口をつくったのも小泉さんだった。組頭の山城祥二さん（七十六）はこう語る。

「音楽を聴けば、その背後にある社会の構造、文化の特質がすべて解説できる。逆にいえば、そんな根っこを持たない、切り花をとってつけたような音楽はいただけない、と先生は繰り返し言っておられました」

ヒットの予言者になりすます前から、小泉さんは歌謡曲ファンだったわけではない。「絶望音階」の「四七抜き」の演歌を聴かされるのは肉体的苦痛だったと本人も告白している。「日本人の音感を掘り下げるために耳を澄ませて聴きこむうち、感性の幅が広がったのでしょう」と岡田さんはいう。

病により五十代半ばで命脈が尽きた早すぎた晩年、音楽の神髄の探究の果てに歌謡曲があったのだ。

小泉さんの言葉を、音楽を言葉に直していうと「言葉を聴けば、その背後にある社会の構造、文化の特質がすべて解説できる。逆にいえば、そんな根っこを持たない、切り花をとってつけたような言葉はいただけない」となる。小泉さんがいいたいことは詩人の谷川さんが指摘することと同じです。やはり、「三味線と箏の実演を聴き、地にひれ伏さんばかりの衝撃に打たれた」という感性のあ

る人ゆえに分かっていたのです。

南海 しかしそれは感性のするどい人だけの問題ではありません。われわれのような人間もまた、固有の言葉を耕さずして本当に考えることができるのかということの問題にしてみました。やはり人間として自ら考えるということをどれだけ大切にするかという問題はないかと思えます。

北原 一方で、すでに取りあげましたが、大学の哲学者といわれる人から次のような言葉が出てくるのも事実です。

『思考のバルティータ一三：〈歴史の真理〉に向かって（一三）—メタ哲学としての佛教の可能性☆』（小林康夫）

いまからおよそ百年以上も前に、日本は、西欧から、「哲学」を輸入し、それを移植しました。そのために、多くの哲学的な用語を新たに翻訳し、新語を作りだしました。それらの言葉はすでもはやわれわれの言語と思考の完全な一部となっています。

なんとなく気楽な発言でしょうか。これはブラジルでおこなわれた学会でなされた発言のようです。

ブラジルはブラジル化したポルトガル語が多数を占め、そこにインディオの言葉が混在する状況です。そのポルトガル語はヨーロッパポルトガル語とはずいぶんちがいます。それをブラジル語というのかどうかという議論も

あるほどです。植民地化された非西洋は、言葉において日本よりもっと深い痛手を負っています。そのうえでどのようにして人間の言葉を築いてゆくのかという問題があるはずです。

ブラジルで発言するのなら、ブラジルの言葉の問題を指摘し、日本の近代における経験を語るべきです。それ以外に哲学者にすることはあるのでしょうか。

南海 『悲しき熱帯』の著者、フランスの文化人類学者で構造学の創始者、クロード・レビストロースが二〇〇九年一月三十一日に死去しました。一九〇八年一月二十八日、ブリュッセル生まれだから、もう少しで百一歳になるところでした。

産経新聞パリ特派員の山口昌子さんがかつて行った会見のことを書いています。そのなかで次のように言う。

一九九四年度の春の外国人叙勲で勲二等旭日重光章を受賞した際、インタビュールしたことがある。

当時はベルリンの壁が崩壊して民族紛争が最大の時事問題だった。

会見では、ベルリンの壁崩壊でイデオロギーの時代が終焉したことに言及、「人類学は第三のヒューマニズム」と指摘。「この第三のヒューマニズムが人類を救済できることがあるかもしれないと考えたことがある」と述べた。また、人類学は個人や政府にあ

る種の知恵を授けられることだと指摘したこともある」とも述べた。

日本の果たすべき役割については、「日本の偉大な力は“二重の規格”と呼ばれるものだ。外国の影響に対し自国を定期的に開放すると同時に、独自の価値や伝統的精神に対して忠実な点だ」など示唆に富んだ考察を一時間以上にわたって披瀝した。記者冥利につきる幸福な時間だった。

レビストロースは「外国の影響に対し自国を定期的に開放すると同時に、独自の価値や伝統的精神に対して忠実な点」という。そのことは、大きくはやはりそうなのであるが、それを可能にする文化、その構造とその内部矛盾、あるいは二つの方向の闘ぎ合いとその克服、等の問題の困難さという問題は、われわれのものです。

この問題に関してこの百年の経験をまとめてこそ、それは世界に寄与しうる「日本の経験」です。しかしまずこの問題をつかむことがはじまりです。「それらの言葉はすでににはやわれわれの言語と思考の完全な一部となっています。」と断言しているのは何も問題がないことになってしまふ。それではありません。哲学者とは人が何も問題がないと考えているところに原則を対峙させ、いやここにこのような問題があるではないかと提起する人でなければなりません。

言葉と智慧

北原 その通りです。そして現実の日本語世界に対峙して提起すべき原則をかつて『定義集へ』で次のようにまとめました。これは今も正しいと考えています。

- 人間は言葉によって人間である。言葉は労働とともに古い。つまり、人が協同して自然との間で「もの」のやりとりをおこない「さち」を受けとり「いのち」を再生産するようになることと、人が言葉をもつようになることは、同じだけ古い。この二つは、互いに作用しあって発展してきた。

- 生物種としての人は言葉によって人間であり、それぞれの人間にはその人が人間であるゆえんの言葉がある。その言葉は抽象的な言葉一般ではない。必ずそれぞれの具体的な言葉である。その言葉をその人間の「固有の言葉」という。

- 人間は固有の言葉で考え生きる。特定の限定された分野なら別の言葉で考えることもありうる。しかし、人間として考えるとき、それは固有の言葉で考えるほかない。固有でない言葉は、固有の言葉で考えられるところまでしか考えることができない。それが人間である。

- 言葉は言葉である以上、世界をどのような基本構造としてつかむのかを定める言葉を持っている。それが構造語である。構造語は世界把握の言葉であると

同時に、その言葉の仕組みも決定づける。構造語は発展する。しかし取り替えはできない。

- 歴史の展開、技術の新しい展開、社会の変転などは、新しい言葉を必要とする。それは固有の言葉に土台をもって、構造語から定義されて新しい意味内容を展開するのでなければ、ほんとうに考える言葉とはならない。

- 言葉には、その言葉を固有の言葉として生きた先人の智慧が言葉の構造として蓄えられている。個々の人間は、言葉を身につけることで、この智慧を受け継ぎ、人間としての考える力を獲得して成長する。成長の過程で身につけた言葉は、その人の考える力の土台である。

- 新しい単語や言い回しは言葉の構造のなかに埋め込まれてきた智慧を受け継ぐものでなければならぬ。したがって新しい単語や言い回しはその意味が言葉内部の構造から定まっていかなければ、言葉たりえない。

- それは、いかなる「考え」も、構造語が規定する世界の把握を土台とし、それとの対決をとおして深められるのでなければ、豊かな実りをもたらさない、ということの意味する。現代日本語の経験が教える根本的な教訓である。

- 考えることをとおして言葉の意味を耕し掘りさげる

ことは、その人の人間としての存在が深められることであるとともに、新たな智慧が言葉に蓄えられることである。人間はこのようにして言葉を育て歩んできた。

●言葉を共有する人間が、深められた場で再びまた協同して働く。この積みあげこそ人間が生きているということである。今、このような営みの輝き覆われ、人間としての労働は奪われている。これに対して、協働を自覚して創造すること、ここに現下の課題がある。

南海 ここでいわれた内容を、実際の対話やあるいは陳述の言葉として述べることはまだできていません。日本の近代の苦しみはそれ自体新しい智慧への糧です。この立場が打ち立ちつつあります。また十分に現実とかみ合わすこともできていません。それを再確認し、もう一息考え続けたいと思います。

反・西洋を超える

歴史と人生

南海 われわれは一人の人間でありながら、時代のなでの試行錯誤の過程で自ら内部に分裂をかかえて生きてきました。その分裂からの回復をめざし内面の対話を続けてきました。分裂の基礎にあるのは、近代日本における

西洋的知としての数学と、一方で、根の無い思想は無力であるという痛切な経験です。

分裂からの回復、これがこの対話の一つの目的でした。一方、われわれの対話もまた時代の中にあります。現実の歴史過程が人間に課題を与えます。その課題を自ら引き受けるところに、分裂した自己の回復がはじまるということもまた、あることです。こんなことをいうのは、歴史の現在をよく見るならば、今日の歴史の課題は、分裂からの回復というわれわれの課題そのものです。ですから内部の統一の回復と歴史の課題になし得るところから応えることは一体です。

北原 『個人史』でも書きましたがこんな小さな人生もやはり時代の中のことであり、大きな歴史のなかの個人の歴史です。人間はそのなかで時代の矛盾や分裂をそれなりに引き受けて、いろいろ考え試行錯誤しそして生を終える。それは必ず次代に継がれます。われわれももういちど自らの内からどうしても考えやっておこうとすることをつかみなおし、残る時間を生きたいと思います。

西洋文明と西洋文化

南海 さて、前回文明と文化について考えました。文明はもはや地上ではただ一つです。それは西洋に端を発する近代文明でした。どこではじまるにせよそれが地上に行きわたることは必然でした。

北原 確かに西洋文明は必然であり不可避です。日本国は明治革命で成立した政権のもとで産業革命をすすめ、欧米をしのぐ強国になることをめざし、やがて英米と戦争にまでなつた。先の戦争のとき「近代の超克」がいわれ、あたかも西洋文明に対抗する戦争のように一部の知識人は思い込んだが、実際のところ日本はドイツと組んでおり、あの大戦は欧米文明と日本文明の衝突ではなかつた。日本もまた西洋文明を受け入れ、それによつて培われた物質的な力によつて戦争したのです。その戦争を推し進めたのは結局のところ市場の拡大をめざし、社会主義に反対する資本の論理であり、それ自体が西洋文明そのものでした。

同様に今日の中国もまた「中華文明」として台頭しているのではなく、孫文以来、中国人が西洋文明の技術体系を修得する不断の努力を続けた結果、台頭しています。今の中国は「西洋文明化」を成し遂げたからこそ、急成長し、政治的にも台頭しているのです。世界は西洋文明に席巻されているが、そのことと、欧米が世界を政治的に支配してきたこととは別のことである。従来の百年間には、西洋文明の席巻と欧米による政治的な世界支配が同時に起きていた。文明的に先行した欧米が、他の国々を支配するのは当然でした。

ですからまた、そこに反西洋の感情が非西洋の中に生まれるのは当然なのですが、現実には「遅れた西洋」と

しての非西洋の立場からのものでしかない。西洋化は必然です。これは避けがたい。ですから前回考えたように「文明の衝突」という考え方は正しくありません。

ここ数年、米国の経済面、政治軍事面での破綻の結果、米英の覇権は地に墜ち、世界は多極化に向かっています。今の世界の文明基盤を作つたのは欧米だが、政治的にも文化的にも欧米を軸としていた時代は終わりつつあります。

南海 正確に言えば欧州は新しい一つの世界を築きこの多極化の中で分を守つて文化を育てようとしているようにも見られます。アメリカはまさに西洋の中のもつとも近代西洋に近い、それを体現したところであり、そのアメリカの経済と政治を担つてきた思想そのものが権威を失なつてきています。

これについては何度も話してきました。新自由主義は西洋文明のもとのひとつの経済文化です。それは資本論理を徹底して何はばかることなく推し進めた経済的行動原理です。それは西洋文明を生みだした原動力であり、そのような行動原理を内包していたがゆえに、西洋に近代文明と産業革命が起こつたともいふべきことです。

北原 そしてその新自由主義は破綻した。このことは、西洋文明のもとの、逆説的ではあるが西洋的経済文化が破綻した。西洋文明を推進したその思想や行動原理がもはやこの文明のもとの権威をうち立て支配権を保持することができなくなつていくことを意味します。

南海 西洋に端を発する文明は必然だった。西洋文明は、奴隷貿易と植民地支配による富の独占を土台とし、西欧内部にあつてはアルビジオア十字軍による南フランスの制圧のような古代文明の流れをくむ文明を亡ぼし、そしてルネサンスを画期とする西洋の確立、そのもとの市民革命と国民国家の成立、その権力のもとの産業革命、そして新たな植民地支配と進んできました。その総体が終焉を迎えているのです。

とはいえ、あるいはその結果、今日人類は大きな困難に直面しています。アフガニスタンやイラクの惨状。アフリカ諸国の困難。貧困と人間破壊が一貫する地上。言葉ばかりがありません。

それにしてもわれわれは、西洋にあこがれるにせよ、西洋に反発し「西洋近代の超克」を掲げるにせよ、軸は西洋でした。あるいは敗戦後の森有正の時代も、西洋を軸に考えていました。

中国もまた反封建・反植民地を掲げてこの百年闘ってきました。西洋帝国主義の植民地主義およびその亜流としての日本軍国主義との闘いが、国家と民族の主なる課題でした。東洋主義、アジア主義もまた、西洋に対抗するものとしてのアジア主義、反西洋思想、あるいは非西洋思想の一つとしてのアジア主義でした。それが事実です。

反・西洋を超える

南海 しかし私は、このような反・西洋の立場や思想はもうのりこえなければならぬと考えるようになりました。

世は大転換の時代に入りました。西洋中心の時代から次の段階への転換です。西洋文明自体は地上にゆきわたりましたが、それは物質循環に関していえば、拡大を続けなければ維持できないという経済文化によって支えられてきました。しかし地球は有限です。拡大を旨とするその文明はゆきづまり、もはやこのままでは立ちゆかなくなりました。

今後の世界経済を牽引するのは中国インドなどアジア勢だといわれています。七〇〇八〇年代は非西洋の日本が牽引する一つの勢力でした。西洋文明を摂取した中国やインドが当面拡大を続けることはまちがいない。しかし、それは拡大を旨とする思想圏内のことでしかありません。

北原 日本においては、二〇〇九年、民主党政権ができました。われわれは党派としての民主党を支持するものではないし、今はどこかの党派に属することも支持しているということもありません。しかし、この政権が生まれるは歴史の大勢は、立場や思想を超えた客観的歴史過程です。

コンクリートの経済拡大より人間の生活を、多極化する世界のなかでアメリカ一辺倒からの脱却を、それを担う政治勢力を登場させよ、という歴史の大勢は動きませ

ん。日本の官僚やその背後にしているアメリカや自民党がいくら抵抗しても、その流れ自体をとめることはできません。現実の政治過程は紆余曲折を経ます。が、向かうところは動かしがたい。経済は人間が生きるための方法であって人生の意味ではない。この考え方を闘いによって一歩一歩現実のものにする。これしかありません。

南海 このようにいふとかならず次のような意見が出ます。いや世界はまだまだ貧しい、経済によって人々が豊かにならなければならぬ。経済が人生の目的ではないなどというのは、豊かになった先進国の一部の人間の偽善的な人道主義に過ぎない。このような意見です。

北原 われわれが単に評論を言うだけならこの批判はありえます。しかしその前に、事実として経済拡大を第一とする考え方そのものが、実は世の貧困を生みだしているのです。儲け第一の資本の論理が、非対称に貧しい世界を生みだしているのです。評論的事実してもこれは明確にしなければなりません。

その上で、今日の袋小路からの活路を求め人は人間が生きる意味立ちかえり、固有の言葉で考えはじめます。これは必然です。非西洋の辺境こそ、転換の場であり時代の前線なのです。その意味でわれわれは時代の最先端にいます。

青空学園をはじめ、それまでの問題意識をまとめ、次に向かつて考えはじめたときからわれわれは一貫してき

ました。ぶれなかった。そして分裂や矛盾をかかえてわれわれの内部で考えてきたことが、実が現代の課題そのものであるということになりました。われわれが考えはじめたのは、いうまでもなく六八年からです。ですから、時代が六八年の課題に追いついたとも言えます。

縷々いつてきたように、世界は固有の文化がともに輝く深い普遍の場をめざす。その場こそ新しい段階の文明である。西洋に端を発する文明はこうして新しい世界文明にならなければなりません。多極化を経て、そのうえで極を超えて、新しい人類的な場としての文明に至らざるを得ません。アジア主義もまたアジアの固有性をそのままに新たな普遍性をめざさなければなりません。

そしてまだそれは可能性でしかない。まったく現実のものとはなっていない。このとき、言葉において深く根づく人々こそ、言葉をこえて人々と結ばれるという、この原則に立ちかえるべきです。日本語が、一地方語として衰退し、最後は亡びるのではないかという議論もありました。しかし、あくまで日本語のことわりにおいて考え、生きんとするものがあるかぎり、言葉は亡びません。

われわれが経てきた近代・現代日本語の苦しみは、この転換の時代の貴重な教訓です。東洋の苦悩は新しい時代の肥やしであり糧です。この経験から教訓をつかまなければなりません。その言葉は新しい時代の深い普遍の礎となるものです。

南海 われわれはこのような課題を考えることにおいて一体であり、一つです。人間といのちの世界が輝きをとりもどすときはかならず来ます。そのためにもういちど『定義集』の仕事に還ろうと思います。

北原 それがわれわれの現実の課題です。「野を拓き田を耕せ。里山を守り生かせ。実がなり、人間がたがいにならばれるときは来る」と玄関に書きましたが、われわれににおいてはそれは『定義集』の再構築です。

『定義集』はある意味で「言葉の里山」です。ここは柴を刈るところであるだけではなく、祖先の霊が見守るところという伝説の場であり、そういう伝説を生みだすものとして、考える根拠となる場です。この場合はしかし人の手で手入れしなければなりません。その仕事にかかろうと思います。

その上でそれを踏まえて、語るべきことは語りたいたいと思います。

対話の結論

来し方行く末

北原 来し方をふりかえるのは以下の一文で最後にしたい。これからはただ前に向かって進みたい。

南海 私もそう思います。前後しますが、二〇一二年一

月の末にこれまでの様々のノートや資料等を整理し、多くを捨てました。その作業の数日、様々の思いに浸っていたのですが、授業をするために仕事場で準備をしているときに、突然「振りかえるのはもう終わりにして、前に進もう。」との気持ちが起こってきました。

北原 来し方を起承転結でまとめれば、今は転を終えたところです。

一、起 私がそれまでの人生をいささか転換しえたのは京都・北白川での経験であった。中学や高校時代の作文や学習ノートを見ると、何ごとも自分でよく考えている。ある人は、私の勉強上の頂点が高校時代にあり、大学ではその反動で勉強しなかったのではないか、と言う。実際、受験業界で見ているとそういう子供も多いのであるが、私はふり返って、そのように自分で考えていたからこそ、あのように転換しえたのだと思う。その意味であるときの自分の判断を認めている。

その後一九七三年の六月から七四年の一月にかけて、京都へ平連の活動の一つとして天皇問題を考えるミニコミ誌を出していた。ガリ版刷りのB5版数頁というものであった。最近、実家から送ってきた段ボール箱を整理していて、それを見つけた。読みかえすと、いまにつながる問題意識はかわらない。高倉テルの戦後の『天皇制ならびに皇室の問題』を取りあげ、それを批判している。一

言でいえば、高倉テルのような近代主義的天皇批判は無
力であり、もっと人々の生き様に即した天皇批判でなけ
ればならないということである。

後に、多くの経験を経てこの問題が再び意識され、そ
して、天皇制に奪われた里のこわりを人々の手に取り
もどそうと、集約されたのである。しかしそのためには、
里のこわりそのことを言割ることが必要であり、その
基礎作業として構造日本語定義集の営みをはじめた。が、
七三年当時はまだそこまで考えることは出来ず、このよ
うな基礎作業に着手することも出来なかった。その年の
秋から高校教員になり時間的にもミニコミを続けること
が難しくなった。

私の実際の出発は解放教育運動だった。二十六歳で大
学院を辞め教員になってはじめての六年間は地域の障害生
徒の普通校への進学保障に取り組んだ。解放教育運動が、
部落の子供の教育保障から、より広く教育権の地域にお
ける確立という普遍的な立場に立ち得ていたことを意味
している。その後の六年間は、職場組合の委員長として
地域の教育のための共同闘争に専念した。

もとよりこのような運動は紆余曲折を経るものであり、
中曽根行革の流れのなかで、この高校を廃校にしようと
する動きが加速した。その最初は組合弾圧であり、私と
書記長に停職の処分をかけてきた。これは後に裁判を経
て撤回させたが、県の高校教員組合は、問題を民主主義

や人権への攻撃と捉えることができず、職場の組合を支
援しなかった。また、兵庫県下の解放運動や教育運動に
はさまざまな意見や運動の分岐があり、心から団結して
いたとは言い難い。

そのなかで委員長であった六年のうちはじめの三年間
は主導権をもってやっていたが、あとの三年間は担がれ
ていた。その責任は私の未熟さにあった。当時の自分を
ふりかえると、属していた政治党派にあった形式主義を、
どれだけ現場で克服できていたかといえば、十分ではな
かった。

二、承 一九八〇年、尊敬する徳田球一を継承すること
を掲げる党派の結党に参加した。徳球、これがこの党派
を選び取った理由であった。その後、一九八七年三月、専
従になるために退職した。職場集会を開き、自分のこと
を隠さずにいい、立場は変わってもともに闘うことを確
認して認めてもらった。その夜だったか、私を担ぐ側の
人たちが家に来て、やめることに反対し、説得に来た。し
かし私は、こちらがやっていた対外的な諸関係を、これ
からは君たち自身でやりなさいということで、説得には
応じなかった。

そのようにしてはじめた専従としての党派活動であっ
た。が、しかし結論としていえば、私の党派活動は、敗
北だった。中央の経済活動は結局バブル経済に躍らされ

ていた。貴重な経験を多くしたし、いろんな人との出会いもあった。もつとも信頼できる友人もこの時期の人だ。しかしいろんな意味で党派の活動としては敗北であった。

三、転 党派を離れまったく孤立して一からの出直しとなった。この時期、家族には多くの心配をかけた。これもいちいち記さないが、いまになって一層それがよくわかる。路頭に迷いかけたときに助けてくれたのが、前の高校の職場の同僚で、その後、彼も職場を離れ塾などで教えていた。お前は結局数学を教えるしかないのだから、と塾での仕事を世話してくれた。いろいろつてを頼り予備校でも教えはじめた。

その頃、予備校からテキストと解答を受け取って読んでみた。しかし自分の高校生の時のことを思い起こすと、こんな細々とした勉強はしなかったし、それでも数学は得意科目だった。もっと本質的なところをつかんで、自由に考えるということを身につけた方がいいのではないか。そう考え、自分で教材や教え方を工夫してやってきた。そこで工夫した事々や、教えるためにその背景や土台を自分で勉強した事々、これらをウェブサイトに青空学園数学科として公開してきた。このサイトは多くの人の支持を受け、ここで学んだという人も結構いる。

日本の学校教育は、大きくいえば、生徒を賢くするのはなくただ従順にすることを目指すものになっている。

良心的な教師の個別の努力によって学校は支えられているが、そういう教育に金はかけられないとなれば、廃校にする。最近も定時制高校などの統廃合が続いている。このなかで、せめて、自分で考えようとする高校生に、その一助となる場を造りたい。これが、私の置かれた場で何とか出来る最低限のことであった。

これは何を意味しているのだろうか。党派の時代からいろんな文書を書きためていた。これを客観的に見ながら考えていく場として、ウェブ上にサイトを持つことを考えた。しかし経済的破綻の後遺症でクレジットカードは作れず、当時は電網空間につながることもままならなかった。ようやく九九年になって電網接続ができるようになり、自己サイトを持つことができた。

こうして電網空間の仮想学園として『青空学園』をはじめたのだ。かつて大学への進路を決めるとき、本当は理系としての哲学や言語学があれば、数学は趣味にとどめて、そちらへ行っていたかも知れない。文系理系の分離は日本の入試制度の根本的な弊害であり、その根は深い。ここは自分で考えた本来の知のあり方を、できるところからやってみようとして、学園という形をとったのだ。

言葉と数学は文明の基本的な方法であり、土台である。現代においては人間の土台そのものである。これを一つの文明の土台として統一的に掘りさげること。これがな

されねば、その文明の近代は砂上の楼閣である。近代日本文明は、まさにこの問題を避けてきた。固有性を大切にしながら、普遍性を実現することはできるのか。あるいは固有性自体を展開し、近代的な普遍を乗り越えることはできるのか。このような問題意識のもと、固有の言葉と文化の土台を耕すことを試みようとした。

大学をやめたとき、もう数学を勉強することはないだろうと考えた。しかし、それから四半世紀を過ぎて、再び青空学園数学科の読書会で数学の勉強をはじめたのだ。高校数学を見直していくなかで、言葉を越えた人間の根本的な営みの一つに数学があることを再発見し直したことが、いちばん大きい動機だった。同時に、やはり数学は捨てきれなかった、というべきなのかもしれない。

学生時代、教員時代、党派の時代、再び数学教師の時代、それぞれ、今思えば中途半端であった。一所に居続けることはできなかった。自分のなかにある問題意識と、現実の場できざまの人間関係のなかで実際にしていることの中に、つねに乖離があった。何をしているときも、問題はそんなところがない、という声が聞こえてくる。そこには、現実から逃避する意識もときに働いていただろうが、やはり問題は未解決のままだ。そのために、現実のことにすべてをかけることができず、遍歴放浪をくりかえしてきた。

近代一般の空洞、日本近代の空洞、それが今日の、多く

の自死する子供や大人を生み出している。それぞれの人にはかならずその人をして人としている言葉がある。それを「固有の言葉」とよぶ。人間が人間であることを成り立たせている言葉、つまり人間の条件としての言葉、それが固有の言葉である。固有の言葉のうちから考えることをはじめなければ、人間は人間たり得ない。足下から言葉を耕していきたい。その言葉があれば、人間は死ななはずだ。

四、行く末 以上が来し方である。冒頭にも書いたように、来し方を振りかえるのはもうこれを最後とする。前に向かつて進みたい。

現代文明における方法としての数学をとらえ直したい。文明を規定する数学的実在を少しでもつかみたい。数学は文明とともに古い。それが近代文明のなかで再発見された。西洋において再発見され、近代文明の根本的で基本的な方法となった。真の近代化は数学を発見しなければ、内発的なものとはならない。根拠を問ひ、公理系の構造を問う超数学的視点が数学自身を発展させる原動力の一つであった。この意味を考える。

哲学も数学も知識ではない。実践そのものである。人間の判断力や批判力につながらない哲学や、「わかる」という経験ぬきの数学は数学ではない。この哲学や数学のもつ実践性こそ教育の柱である。日本の文教政策は明治

以来一貫して愚民政策であった。国家の愚民政策に抗い、人民は自ら考える力を鍛えよう。国家から独立し、これを食い破るような、人民の自己教育の協働の場を小さくても作る。

その場において、日本語の再定義を進める。

根のある地についた変革の思想は、まだない。われわれの側ですら、相も変わらず思想を外に求めている。私自身、さまざまな試行錯誤を経た。根のある変革の思想の決定的な重要さをかみしめている。ないときに、生み出されるまで耐える力が必要だ。なし得るところから、原則を譲らず、一步一步、である。歩みが遅く寿命が間にあわなかったとしても、それはよい。

このように考えることができる視座を、自己の存在として生み出した来たことはまちがっていない。また、これしかなかったともいえる。核惨事は、やはりもういちど人間が日本語で生きることができるところを耕すことを求めている。この道を行くしかない。

今はこのように考えている。しかし、少し立ち止まって考えて見れば、私のこれまでの人生など小知識人の独り相撲にすぎない。そのとき、そのときは力のかぎりするべきことはした。そのことに悔いはない。しかし客観的に見て独り相撲の自己満足という面があることを心得ている。人間というのはそういうものだ。いくつかのことももう少し深めたい。あとは、のちの者に託すしかない。

い。人生をともにしてきた家族と困難なときに助け合った友人に心から感謝する。

己の立ち位置

南海 われわれは長く内部の対話をしてきました。2010年の年末から年始にかけてようやくこの対話を終えるところに来たようです。それは二人の間にあった矛盾、葛藤を乗り越える立ち位置を、ようやく二人のものにすることができたと考えるところです。

『青空学園だより』の二〇一〇年二月三十一日に書きました。

私についていえば、ようやくこの歳になって、自分の立ち位置が定まってきたように思う。前にも書いたが、高校数学の周辺を掘りさげることが倦まずたゆまずやってWEB上に残しておく。周辺というのは必ずしも数学だけではない。誰かの役には立つだろう。これは頭の働かぎり続ける。そういう営みをする人間として、情況に対し発言し、可能な行動はする。生あるうちはそれをつづける。思えばこの歳までまったく試行錯誤の連続であった。多くの人に迷惑もかけた。孔子は「四十にして惑わず」といったそうだが、こちらは還暦も数年過ぎて、ようやくそんなところである。

これは偽りのない私の気持ちです。「高校数学の周辺を掘りさげる人間として」ということは、十年やってはじめて言えます。人間はやはり何ごとかをたゆまず積みあげることで始めて人間になる。貴重な経験をしました。「そういう営みをする」ことの内容がなかなか定まらず、数学を捨てようとして捨てきれなかったり、長く迷走したといわざるをえません。

北原 結局私が担っていたのは「そういう営みをする人間として、情況に対し発言し、可能な行動はする」というところでした。すべてを捨てて活動家そのものをめざしたときもありました。しかしそのような活動家そのものがありうるのか、というところから考えなければなりません。今はそういう時代です。

これに関してフランスの哲学者バディウの言葉は切実でした。彼はその著『サルコジとは誰か』の中でいう。記者は榊原達哉氏である。ただし「コミニズム」は「共産主義」、「シークエンス」は「段階」、「シニフィアン」は「ことば」と直した。榊原達哉氏は「既存の体制としての共産主義ではなく、バディウの主張する『未来の共産主義』を意味する場合は、あえてこの訳語（コミニズム）を用いることにした」というが、われわれはかつて共産主義の理念を掲げていたし、その内容が展開し新たな質を獲得するとしても、それはやはり共産主義なのだ。永続革命とは継承と止揚なのだ。このようにカタカナ語と

用いて使い分けをすることは、まさに共産主義の理念のもとに哲学者であるバディウの心を汲んでいないと思う。共産主義を清算してはならない。それはまさに多くの血を流した経験なのである。この経験から教訓をくみだし、第三の時代に生かさなければならぬのだ。継承と乗り越えとが必要なのだ。私はやはり私自身の経験であり、また私が出会った多くの活動家の経験を伝えるという点からも、言葉は「共産主義」でなければならないと考えている。

本質的な問題——この問題の真の帰結は、すべての次元において、まだ調査しきれていないほどの拡がりを持っている——、それは政治の言説・行動において、「労働者」ということばを復権させることである。むろん、二十一世紀の優勢を占める方向、つまり共産主義の仮説の第一の時代（労働者階級、全面的な《人間性》の解放に向かう自然な歴史運動の動因）の方向にしたがえば、その復権がなる、というわけではない。また、二十世紀に優勢を占めた方向、つまり共産主義の仮説の第二の時代（革命政治にとつて、唯一無二の不可欠な指導機関であり、さらには党—国家の形のもとに、プロレタリア独裁を排他的に独占する機関である労働者階級の党）の方向にしたがっても、そうなるわけではない。だが、ただ実験段階にある第三の方向、すなわち金融資本と

その奉仕者によって実現された覇権から組織的な形態において免れることのできる、あらゆる者の総称としての「労働者」という方向にしたがえば、「労働者」ということばを復権させることができる。

：

第二段階の延長ではなく、またありえないであろう、と。マルクス主義、労働運動、大衆デモクラシー、レーニン主義、プロレタリアの《党》列、社会主義国家。これら二十世紀の驚くべき発明は、われわれにとつてはもはや有用なものではない。理論の水準では、たしかにこの発明は認識され、熟考されなければならぬ。だが、政治の水準においては、これらは実践不能になった。それが本質的に自覚されるべき第一の点である。すなわち、第二段階は閉じられ、それを引き継ぐこと、あるいは復活させることは無益なのである。

真理は——いま一度言うが、真理の到来は前世紀の六十年代以降に下書きされている——以下のことの意味する。すなわち、われわれの問題は、新たな仮説の保持者としての大衆運動の問題でも、仮説を実現する勝利せる指導者としてのプロレタリアの党の問題でもない、と。第三段階に結びつき、その開幕にあたってわれわれが努力する戦略的な問題は、別の事柄なのだ。

彼はわれわれと同じく六八年をその出発地点としています。そして社会活動、党派活動を経て、今日共産主義運動の第三の段階を模索している人である。彼は

むろん、世界規模でのソ連の崩壊があった。それに伴い、この老朽化した国家がマルクス主義の紛れもない守護者だという、あらゆる「マルクス主義」的イデオロギーの指標の崩壊があった。この観点から見たとき、いずれにしても荒れ狂う資本主義の勝利といううぬぼれに直面して、左翼の最も深刻な危機を生み出したのはスターリンではまったくない、ことは確認しておこう。ここで言うっておかなければならぬことがある。それは、スターリン時代に、労働者と民衆の政治組旅は限りなく好調となり、資本主義はそれほど傲慢ではなかったということだ。比較の必要すらない。沈滞期の人であり決算人であったブレジネフや、とりわけ徹底的な改革者であったゴルバチョフが、「左翼」の世界をいつ立ち直るのかわからないような悲惨さの中に投じたのだ。いずれにしても、おそらくこの指示対象の端的な死が望まれたのであろう。

と、同書でも書いているようにいわゆる反スタ左翼ではない。この点においてもわれわれは深い共感をもつことができる人である。

スターリン問題をどのように総括するのは、実は未

解決です。私は、スターリン時代の肅清などさまざまの問題は、フアンズム包囲のなかで生まれたものであり、それは残された課題であり、われわれがわれわれの条件のなかで活路を見出すべき問題だと考えています。その意味で、反スタ左翼でないバディウに深く共感します。

そのバディウが、党や専従活動家という形態は、第三の時代の共産主義運動にとつては本質的でないばかりか、それはすでに終わりそれだけでは何ら歴史を進めることができない、ということを行っています。

南海 それはまさに党派活動家であり専従までした北原さんと、数学を捨てられなかった私との対話の意味でもあります。その結果として私たちは、新しい人間のあり方をようやくに自分のものとすることができたのではないかと考えています。

北原 それとともに、もう一つバディウに教えられたことがあります。それは「理念をもって生きる」ということです。専従であった時代をふりかえると、やはりそこにもどうしても党派の利害が出ます。日本の新左翼の党派党争が典型ですが、党派の利害が出るということ自体、党派組織という方法が第二段階までのものであって、これらの時代を切り拓くうえで、意味がなくなっていることを教えています。

「わが党の正しさを示している」、「わが党のいう通りにすすんでいる」、「われわれが領導した」などなど、七

〇年から九〇年代にいわれた言葉は今から見れば滑稽ですが、しかし当時真剣であった。

南海 大切なことは個人でもなく党派でもない。ただ歴史の動きに寄りそい、それを一歩でも進めることに役立つこと、なのです。党派の利害も個人の山っ気も関係ない。歴史の動きの中心点を見据えて、その周りにいさかでも回転させる、それがいかに小さくても良いのです。そのように生きると言うことです。

北原 それがバディウの「理念をもって生きる」ということです。フランスにいる哲学者の廣瀬純氏は『サルコジとは誰か?』につづく『仮説としての共産主義』を紹介する一文が現れた。「理念をもっていきること」(廣瀬純 『週聞金曜日』二〇一二年十一月、十二号)である。次の「理念をもって生きる」はまさにその通りである。

『サルコジとは誰か?』はバディウによる状況論シリーズの題四巻として刊行されたが、フランスでは昨年『仮説としての共産主義』(L'hypothèse communiste. 未邦訳)が刊行され、第四巻で提示された「共産主義の理念」という問題が改めて本全体の中心テーマとして取り上げられ、より詳細に論じられている。バディウの議論はおよそ次のようなものだ。すなわち、敵は資本主義と代議制民主主義とのカップルを唯一可能な社会のあり方だと喧伝し、その他のあり方を端的に不可能なものだと位置づけることで、

「理念をもつことなく生きること」を我々に強いようにとする。

これに対し「真に生きること」としての「理念をもって生きること」とは、可能／不可能の敵によるこうした固定的な境界画定を根底から揺るがすこと、また、そうすることで見出される新たな可能性を歴史のなかで具体的に実現していくことだ。

新たな可能性が示されるのは「出来事」（バディウ自身にとってはとりわけ「六八年五月」）によってのことだが、その可能性の具体的な実現は我々一人ひとりがその実現プロセスにおける身の身を投じる「決意」をなすことによつてしか始まらない。そうした「決意」の瞬間から、各人の行なうどんなローカルな活動（たとえば商店街でのピラ配布）も直ちに、世界史全体における「仮説」の実現プロセスそのものを体現するものになるのだと。

年金改革をめぐるサルコジ政権／ストリートの対立は、したがってまた、理念をもつことなく生きるのか、それとも理念をもって生きるのか、ということとの直接的なぶつかり合いでもあるのだ。

南海 高校数学の周辺を掘りさげつつける者として理念をもって生きる。

この立場というか境地をようやくにわれわれは自分の

ものとししました。もちろんこれは矛盾と対立をはらみ、それがまた思索の原動力であるということは変わりません。しかしそれが一人の人間のなかで為されてゆくという意味で、われわれの内部の矛盾は乗り越えられました。これからはそういう人間として生あるかぎり、この時代を生きぬきたい。

考えてみれば遅きに失したかも知れません。また、何とか生活しているから言える戯言かも知れません。それでもよい。それは自分でわかってればよい。そのうえで残された時間、やはり理念をもって生きたいと思う。

列島弧の課題

南海 ところが日本の場合、右派の大物である岸信介も児玉誉士夫も、なんとCIAから金をもらっていたことがわかっていきます。でも「天皇を米軍が守るのが日本の国体」なら、右派や右翼が親米もしくは属米になるのは、むしろ当然の話です。その結果、日本には健全な自主独立派勢力というものが育たず、「右翼」というと中国や韓国・北朝鮮の問題には妙にいきりたつが、現実には自国に駐留している米軍については何も言わない、言えない、そういった人びとといったイメージになっているのです。

こうしてさまざまな偶然（とくにマッカーサーの個性が大きかった）の末に、国内で広く支持されている天皇

制と、その後も世界最強でありつづけた米軍（外国軍）が深く結びついたことが、戦後日本のどうしようもなく複雑なねじれ現象を生んだといえます。本来もつとも愛国的であり、自主独立をとなえるべき右派勢力が、米軍の駐留を強く支持するというパラドックス。それがイラクからは七年で撤退した米軍が、六十六年たつてもまだ日本にいる原因であり、「そらあ、天皇さあ」といったMさんの言葉は実に正しいのです。

そして「戦力放棄」「平和憲法」という理想をかかげながら、世界一の攻撃力をもつ米軍を駐留させつづけた戦後日本の矛盾は、すべて沖縄が軍事植民地となることで成立していたというわけです。

政治の本質が結果責任（全休利益の追求）であるとするれば、昭和天皇や吉田首相がマッカーサーやダレスと対峙しながら全力で構築した「戦後日本」は、五十年のスパンで考えると大きな成功をおさめたといえるでしょう。しかし百年のスパンで考えるとどうか。沖縄という同胞を切り捨て、ひたすら経済的繁栄を追い求めたことの方が、まさにいま問われようとしています。

戦後の対米従属の日本政治は、昭和天皇とそれを担いだ日本支配層にはじまる。この体制が沖縄を見捨て、地方を切り捨て、そして東電核惨事にまで至った。だがしかし、世界は変転している。ベトナム戦争からアフガン戦争をへてアメリカと西欧帝国主義世界ははつきりと凋

落した。この大勢はもはや不可避である。

これを反映して、日本においてもようやく対米従属からの脱却を求める見解と運動が表面に出てきた。だが、道は曲がりくねっている。アメリカではファシズムが起きはじめている。日本においてもこれに内部から呼応する動きが出てきている。帝国の最期となるファシズム、これに対する人民運動、この対決は不可避である。

北原 私たちは、天皇個人とそれを担ぐ支配層の体系的な体制を天皇制といおう。この天皇制、つまりは昭和天皇とともに戦争を遂行した勢力は、アメリカに命乞いをし、いわゆるA級戦犯にすべての責任を押しつけて延命した。命乞いをしている間に、ソ連参戦があり、広島の原因爆投下があり、長崎の原因爆投下があった。これらは、ポツダム宣言がでた一九四五年七月のうちにこれを受諾していれば、起こらない惨劇であった。このことはようやくに多くの人の認めるところとなりつつある。

そのことによつて天皇制の権威は崩れた。三島由紀夫は西洋文明としてのアメリカに屈した昭和天皇に対し「なごてすめるぎは人間（ひと）となりたまいし」と抗議した。戦後天皇を認めることはアメリカへの従属になり、本当の愛郷思想と矛盾する。ここに戦後日本右翼の根本矛盾がある。三島由紀夫はこの矛盾を一身に引き受けたのです。

戦後の対米従属の日本政治は、昭和天皇と生き残った

戦争遂行勢力にはじまる。この体制が沖繩を見捨て、地方を切り捨て、そして東電核惨事にまで至った。だがしかし、世界は変転している。ベトナム戦争からアフガン戦争をへてアメリカと西欧帝国主義世界ははつきりと凋落した。この大勢はもはや不可避である。

これを反映して、日本においてもようやく対米従属からの脱却を求める見解と運動が表面に出てきた。だが、道は曲がりくねっている。アメリカではファシズムが起きはじめている。日本においてもこれに内部から呼応する動きが出てきている。帝国の最期となるファシズム、これに対する人民運動、この対決は不可避である。

南海 昨年来の世界的な人々の蜂起は、配景として帝国

アメリカの凋落がある。日本において今後四半世紀の課題は、次の二点をこの列島弧に生きる人間の意志として実現すること集約される。

(一) 日本国内に外国軍の駐留を認めない。

(二) 原発を止め核燃料廃棄の過程に入る。

そのための基礎作業として、私たちは、里のことわりを人民の手に取りもどすためにこそ、そしてそれが、人間としてのもっとも基本的な営みであるからこそ、日本語定義集にうちこみたい。

われわれの営みこそが本当の意味で愛郷主義であると確信している。